
リバー・デリバー

B-POP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバー・デリバー

【Nコード】

N9839X

【作者名】

BーPOP

【あらすじ】

世界樹。物理法則を超えるほどの生産性を持つ巨木。

その恩恵を受けて辛うじて生き長らえ、申し訳程度に栄えている世界。しかしそれは、一步世界樹のもとを離れば人の生きてはいけない荒野が広がっていることも意味していた。

そんな世界でバイク一つで配達業を営む男がいた。名前はリバー・D。

バイクと体一つで荒野を駆ける配達屋の前に現れたのは、自身自身を「配達」してくれと依頼する奇妙な少女だった……

プロローグ

西に傾き始めた太陽が、もう休めばいいのに最後の一仕事と言わんばかりにジリジリと地面を焼き、地平線に近い場所の景色は陽炎でぐにゃぐにゃに歪んでいる。が、そんなものよりもずっと前から目に入る汗のせいで世界の半分は歪んで見えていた。

一応は安全第一をうたっているのに、逆光の中ではアクセルスロットルを若干緩めて速度を落とすようにしている。

エンジン音が少しだけおとなしくなり、それに反応するように周囲を流れる風の音やタイヤが砂利をかむ音がはっきりと聞こえるようになった。すぐ隣では荷物を満載した側車がゴトゴトと、荒れた路面に揺れている。

元々はただの二輪車だったものに後から側車をつけただけのお手製サイドカーであるせいか、ちよっと荒れた場所ではもろに路面の影響を受けてしまう。かといって新車のサイドカーなど買う余裕もなければそんなものがこの世に存在するのかわいかさえ危ぶまれる。そんなものを買ったところで、この世界に荒れていない路面など数えるほどしかないのだから無意味と言えば無意味だが。

「ま、爆弾じゃないからだいじょぶだろ」

ハンドルを握る男がちらりと側車に目をやると、あまりの乗り心地に文句をたれるように、荷物がゴトリと大きく揺れた。

ところどころひび割れた荒野の真ん中を、西日を照り返しながら一台のサイドカーが走りぬけてゆく。ぺんぺん草も生えないような荒地ではあるが、いくらかのわだちが同じ方向に向かって伸びているので、そこが道であることが何とか判別できる。これが砂嵐の後や雨の後ならきつと迷子になること請け合いだ。

「あゝ、ケツが痛てえ」

短い黒髪を逆立てた髪型と頑丈さが取り柄のようなブーツが特徴的な男は、砂漠の中に影だけが落っこちてきたような真っ黒な外套

をはためかせながら、その中で尻を細かく動かしながら痛みをこまかしている。

文句をたれながら男はゆっくりアクセルを開けてゆく。サイドミラーに映るのは背後の景色よりも自分のタイヤが巻き上げる砂ぼこりばかりで、目の前は地平線で真つすぐに隔てられた黄色い空と茶色い地面だけだ。あまりにも見慣れすぎた景色の中をサイドカーが速度を上げて駆け抜けてゆく。

もう一度、側車の荷物がゴトリと揺れる。

「うるせえ、明日までの辛抱だ」

このままの調子でいけば明日には街に辿りつくはずだ。そうすれば受取人にこの荷物を引き渡し、代わりに報酬を受け取ることができる

それがこの男の仕事だった。

『配達屋』リバー・D。それが男の名前だった。

「しかし、このご時世に奇特な仕事もあったもんだ」

受け取りにサインを書きながら、たつぷりとあごにひげを蓄えた雑貨屋の店主が皮肉と賛辞を込めた声で言う。

「体一つでできる商売にしちゃ楽なほうだと思っただけですけどね」サインを確認し、側車から引っ張り出してきた段ボール箱を男の足元に、できるだけ音をたてないようにゆっくりと置く。さすがに道中で散々ゴトゴトと衝撃を与えてきたとは言えないので、こんなときだけでも荷物を慎重にというのが、実は小さなことだが重要だ。下手をすると、ここでの荷物の扱い一つで仕事をご破算になることもあるのだ。

「人の財産でもかっぱいで暮らそう、なんて輩がいるご時世に人の荷物をちゃんと届けるってんだから、奇特だろう」

「だから成り立つんですよ。隙間産業、って言うんですかね？」

確かにこのご時世だ。すきあらば他人を出しぬき、自分だけがうまい汁を吸わなければ生きていけないこの世界の環境の中で、多く

は搾取される側に回るか、徒党を組んで身を寄せ合うか、さもなくば荒野を徘徊する無法者になり下がる。そうでもしなければこの荒地ばかりの世の中では生きていけない。

「俺にはできないな、幾つ命があっても足りないだろうからな」

事実、リバーもこの商売を始めてから襲撃を受けたことなんて数えだせばきりが無いし、駆け出しのころはうっかり荷物を盗まれてしまつて途方に暮れた、なんてこともなかったわけではない。おかげでいまでも敷居をまたげない街がいくつかはある。

「いいねえ、若いってのは。ほら、チップだと思つて食つてくれ」
棚に手を伸ばすと、店主は無造作にそこにあつたものを放つてよこす。

放物線を描くそれをなんなく鼻先で受け止め、じつと眼玉を寄せてそれを見てみると、

「いいんすか？ コンビーフの缶詰なんて売れ筋でしょ？」

「ま、今後もよろしくつてことだ」

段ボールの中身を確認しながら、店主はニカリと笑う。けつして器用な笑みではないが、この笑顔で幾多の危機を乗り越えてきたのだろうと思わせる、商売人らしい顔だった。

「んじゃ、近所の宅配から地球の裏側への配達まで、ご最屑に」

反対に、こちらが浮かべたのはお世辞にも笑顔とは言えないような代物だった。表現するなら「不器用」の一言に尽きる笑顔は、乳幼児に見せればトラウマになること請け合いだ。

「はは、あんたは腕と器量はよさそうだけど笑うのはやめたほうがいいな」

痛いところを突かれたと思う。自分ではいつもうまく笑おうとしているのだが、気持ちばかりが空回りする。

苦笑いのような笑みを口元に浮かべ、少しひきつった目元で店主に別れを告げて店を後にする。

開け放たれた扉の中で小さくなるリバーの背中を見ながら、もう一度こぼす。

「ありゃ商売に向かないな」

とりあえずは今回の料金で数日なら食べるには困らないが、荷物が生活雑貨だったこととさほどの量ではなかったので決して収入としては大きくはなかった。

「今回も安宿は確定だな」

とは言いながら、ここ数日は寝袋ばかりの生活だったので久々の布団は楽しみだったし、それ以外にも楽しみはいくつもあった。

基本的に配達は、荒野の中に点々と存在する街から街へ移動しての仕事になる。その時間は短くても数日、長い時で半月からの移動になるのだが、もちろんその間は保存食と野宿を中心とした生活になる。計画を立てる段階で食料の配分や立ち寄る町までの距離を見誤って餓死寸前で命を拾ったことも一度や二度ではない。

というわけで、一仕事終えて羽を広げる街と言うのは、配達家業のリバーにとってはこの上ない安息であり、楽しみでもあった。

できるだけ安そうな宿の前にバイクを止め、閑古鳥が鳴いているフロントでベルを鳴らす。

まだチェックインには早い時間なのか、照明の落とされた薄暗がりの中を吸い込まれるようにベルの音が消えてゆく。

太陽が手加減なしに照りつける表通りとはちがい、ひんやりとした冷気がむき出しの首筋や二の腕にからみついてくるのが気持ち良かった。おそらくは薄暗い雰囲気のおかげで実際の気温以上にそう感じているのだろうかどちらでもよかった。

「はいよ、お待たせ」

掃除でもしていたのだろう、頭を三角巾で覆った女がフロント横の階段を下りて現れた。

おかみ、という言葉がこれほどしっくりくる人材も珍しいと思うほどに見事なはまり役で、頭の三角巾も首からぶら下がったエプロンも、その中の隠しきれないふくよかな体型も、全てがこの人物こそが宿の主人であることを物語っていた。

「一人かい？ 生憎だけどうちは見ての通りの安宿でね、ぜいたくなひと時をご所望なら他をあたってもらうほうがいいよ」

男相手に一步も引かないどころか、押しの強いその気風はさすがに一国一城の主といった貫禄だ。

「いや、仕事で来てるだけだから、泊まれりゃ何でも」

提示された料金は納得の安値。さっそく宿帳を記入して前金の宿泊費を支払うことにしたりバーは、ふと思い立ったように背後を振り返る。

つられて表を覗き込んだおかみは、リバーの視線の意味を察して視線をぐるりと回す。

「すぐ隣にスペースがあるからそこにおいときゃいいよ。金は取らない代わりに盗まれてもうちは責任を取らない、ってことでいいならだけどね」

もちろん断る理由はなかった。

バイクとはいえ置き場所に苦慮することあれば足元を見る宿であれば駐車料金などという名目で別料金を請求するところまである。もとより盗難に関しては自己責任であるのが世の常だと考えれば、置き場所を確保できただけでも十分だった。

「ここは酒も出すのか？」

同じフロアにはフロントのほかにカウンターがあり、丸テーブルがそれを取り囲むようにして十セットほど並べられている。もちろん、カウンターの内側には個人で飲むには多すぎる酒の瓶が並んでいるので、バーか何かをやっているのは明白だったが、とりあえずはそう聞いてみる。

「まあね。簡単な料理なら出すし、もし外で食べるところ探すのが面倒なら使ってやってもらえちゃうのうれしいねえ」

商売っ気のない口調ではあるものの、おかみの自信たっぷりな表情からそれなりには繁盛している店なのだろうことが想像できた。

「覚えとくよ」

「営業は日付が変わるまで、宿もそれと同じだから遅くなりすぎた

ら外で寝てもらふことになるよ」

おそらくこれはジョークだろうがこのおかみの場合は本当にそれを実行しかねない迫力があつたので、とりあえずは曖昧に返事をし、鍵を受け取った。

一階はフロントとバーだけで占められているらしく、宿泊客は二階と三階に泊まるようになっていたようだった。鍵に付けられたタグを頼りに部屋を探し、荷物を放り込むべく扉を開ける。とりあえず何をするにしても身軽になっておきたかった。

部屋はシンプルなベッドとテーブルがあるだけのものだったが、値段の割には掃除の行き届いた清潔な部屋だと感じた。錠戸を押し明けると南向きの窓からは日が差し込み、街の喧騒が室内に流れ込んできた。

「へえ、悪くないな」

そう思ったのは部屋の清潔さもさることながら、窓からの眺めだった。

南向きの明るい景色は街の景色に彩りを添えているようで、街そのものが活気にあふれているように見えた。そして何より、部屋には昼間だというのに電気の明かりがつけられていた。

「そうか、この街には世界樹があるのか」

同心円状に区画整備されたこの街の中央には、街のどこにいても拝むことのできる巨大な木が一本生えていた。

街を一步出れば殺風景な荒野しかないのとは正反対に、その木は空を覆うように枝を伸ばし緑の葉を茂らせ、みずみずしい幹は力強く根を張って、そびえ立っていた。

世界樹と呼ばれるその木は、砂と石ころだけのこの星に両手で数えるほどこだけ存在している、しかしその名が示すとおりにその周囲にはひとつの世界が構築されるほどに潤いと恵みを与える、まさに命の木といった存在だった。

その葉は鳥をはじめとする命を育み、枯れ落ちては大地を育み、水を生み蓄える。もちろんそれは、生物界におけるライフサイクル

のすべてを担っているといっても過言ではない、まさに一つの世界だった。

「だったら、この町が潤ってるのも納得だな」

それ以上に、世界樹は人類にとってのブラックボックスだった。無から有を生み出すがごとくその成長に際限はなく、世界樹の周囲には物理法則を超えて生産された鉱物資源や水、果ては微生物までもが満ち溢れている。何よりも世界樹を世界樹たらしめているのはその「実」の存在だった。

時期を問わず一年中収穫が可能なその実の大きさは、小さな物でも子供の頭ほどで、大きなものでは大人でも抱えて歩くのがやつの大きさにまでなる。熟れると血のように真っ赤に染まるそれを、その存在の重要性も含めて「太陽の実」と呼ぶものもある。

決して食用に適さないその実は、古代には他のすべてが使える世界樹にあつて唯一使えないものとして地に打ち捨てられ、養分として世界樹に返されるだけだった。その存在意義が大きく転換したのは、人が科学技術の発展とともにエネルギー革命を迎えた頃だった。ありとあらゆる化石資源が採掘され、より効率のいいエネルギーを求めていた人類は偶然にもその実の持つポテンシャルに気がつくことができたのだという。最初は直接その実を燃焼させたときの熱量に驚き、次にはそこから抽出される燃料の効率の良さに石油で生計を立てていた王国都市が傾くのではないかと噂されたほどだった。ただ、そうならなかったのは、エネルギーとしてはブラックボックスの部分が多すぎた。

世界樹の実を利用した実験の最中に、街が一つ消し飛んだ。あの、何があるうと決して朽ちることがないときえいわれていた世界樹の一本を巻き込んで、消滅したというニュースは全世界に嵐のように広がり、疫病のように人の心に影を落とした。

なぜそうなるのかはわからないが便利なので使っている、それが今の人類と世界樹の実の距離感だ。

こうして、個人的に利用するのは化石燃料を、大規模な事業で用

いるには世界樹の実を、という今の世界の構図が出来上がったのだという。それがこの五十年ほどの出来事だというのだから、いかに人間と言うのは砂上の楼閣をさまよっている生き物であるかがうかがい知れる話だ、とは、リバーが学者に古ぼけた本を届けた時に聞かされた話しの受け売りだ。

というわけで、エネルギー資源が豊富な街だからこそその恩恵が安宿のくせに昼間からつけられている電燈と言うわけだ。ほかの、世界樹を持たない街では決して考えられないぜいたくだった。ともすれば、夜になれば宿のおやじが明かりを消すように言って回るような街だって珍しくはない。

「つてことは、食うもんもうまいはずだ。ラッキー」

鎧戸は明けたままで荷物をベッドに放り投げ、財布とバイクのキーだけをポケットに詰め込んでそうそうに部屋を後にした。

さすがに街の中をバイクで走り回るにはサイドカーはかさばるし、何より街の中心部ともなれば店に入るにしても何にしてもおいそれと置いておける場所もないかもしれない。もっと大きな町なら車や鉄道が街の中を走っているような場所もあるが、そんなものはごく一部の限られた町だけの話だ。世界の標準は舗装もろくにされていないような狭い道に人があふれかえっているゴミゴミとした街並みだ。

しっかりと居を構えた商店から粗末なテントに莫蔭を敷いただけの露店まで、大小さまざまな物売りが所狭しと世界樹を中心とした広場に群がっている。世界樹のある街にはよくある光景だったが、この街の光景は他のそれと比べても活気にあふれているような気がした。

「何か、祭りでもあるのか？」

小腹がすいたので手近な露店で果物を物色し、真っ赤に色づいたリングを一つ買いがてら店番の男に聞いてみた。男とは言ってもリバーよりもいくらか年下で、まだ少年といって差し支えないだろう。青臭さの抜けきらない顔立ちは、周りの大人に出し抜かれないよう

にとでも思っているのか、終始緊張しっぱなしだ。

「いえ、ここはいつもこんなですよ。この街は世界樹の実の独占を許さずに街全体で管理することで誰もが平等にその恩恵を受けられるんです。その噂を聞いてか、自然と人が集まってるんですよ」

よどみのない言葉は少年の容姿や口調には不似合いで、おそらくは誰かの受け売りなのだろうということが推察できたが、逆にそれなら納得もできた。

「珍しいな、大体は金持ちか王だの貴族だのが独り占めしてて住民は不満たらたら、つてのが常套なのにな」

買ったばかりのリングにかぶりつくと、そのみずみずしさに驚くばかりだった。「シャリツ」という小気味の良い音も新鮮なリングならではだ。世界樹の近くでは、その恩恵を受けてありとあらゆる作物が高品質にできあがる。その代表格が果物であり、一度世界樹近くの果物を食べてしまうと他のは食べられないとまで言われるほどだ。

そのことは間違いなく真実だとリバーも思っている。

溢れるほどの果汁はどこまでも食欲を誘う旨さで、りんごはあつという間に半分がなくなってしまう。

「昔はそうだったらしいんですが、三年前に起こった暴動でそうなくなったらしいです」

世界樹をめぐる暴動は決して珍しくはなかった。むしろ今発生している戦争の八割は世界樹の利権がらみだと言ってさえ嘘がないほどだ。

「ふうん」

大して珍しくもない話だと思いがらリバーはあっさりと露店の前から立ち去る。

言われてみれば、確かに人通りも多いし活気もあるが、祭りなどのイベントごとにしては花がないというのが改めて実感できる。祭りが非日常の体現であるとすれば、今ここにあるのはせいぜいが日常の延長線と言ったところだ。

それもそれで悪くはないと思う。

どこの町に行っても必ず見られる食料品の店から、一体何を商っているのかわからない雑貨商店、占いをやっているのだと思しき怪しい身なりの老人までが通りにひしめき合っている。そして、そのほとんどが商品を山と扱っているか、常に客を抱えている。

残りの半分のリングゴにかぶりつくと再び口の中に甘い果汁が充満し、みずみずしい旨みが頭のとっぺんから足の先まで行き渡るように感じた。

「よし、しばらくはここに居ついてみるか」

そう思ったのはもちろんリングゴの味だけではない。これだけ人がいて活気があって物が溢れているということは、取りも直さず物が動き、人が動き、金が動くということだ。もちろんそこには、物や人や金を動かす手段が必要になっているはずで、リバーにとってはほかならぬ飯の種だ。

希望的観測ではあるものの、これだけ人がいれば他の町や地方から来ている人間も少なくないだろうし、何よりもこのまひにあるものがすべてこの街の中だけで消費されるということは事実上ありえない。そうなれば、根無し草のリバーにとっては願ったりかなったりというわけで、

「とりあえずは情報収集からだな。と、その前に」

ぴたりと足を止め、後ろを歩いていた初老の男に嫌そうな顔をされるがさらりとそんなものはスルーし、九十度回れ右をしてすぐそばに会った定食屋に飛び込んだ。

「まずは腹ごしらえだ」

立ち込める調味料の香りと熱気と調理場のどなり声のようなやり取りが、ぺこぺこだった胃を締め上げるように刺激してくる。最後に食べたまともな温かい食事をもう思い出せないほどだったリバーの口の中はすでに唾液が洪水になっている。

厨房でひととき大きな炎が上がり、鍋の中を野菜と肉が躍っているのが見えた。

その男、昼行燈

結局、チャーハンに青椒肉絲だけでは飽き足らず、帰りの露店で焼き立てパンを購入してかじりながら街を歩いたが、さすがに数時間ぶらついただけでおいしい仕事にありつけるはずもなく、収穫がないままに夕暮れを迎えた。ただ一つ収穫だったのは、行商のようなことをしている若い男から、この街には街の中だけで荷物の配達や郵便物の集配を請け負うやつがいるということだった。うまくすれば、街の外に運び出す荷物にありつけるかもしれないとおもったが、そろそろ店じまいをする商店が多くなり始めた時間でもあるため、日を改めることにした。

すでにバーとしての営業が始まっていた宿に帰ると、昼間は見かけなかった男がバーカウンターの向こうでビールサーバーを操作していた。本人がビアドルのような体形をしているが、手先は意外と繊細に動き、見事な手際でふわりとした泡でジョッキにふたをしていた。

昼間のおかみの言葉通りに、店は早い時間だというのにそこそこの繁盛を見せ、テーブルは七割ほどが埋まっていた。

「はいおかえり。どうする、このまま食べてく？」

近くのテーブルに料理を出しながら、昼間のおかみが額に玉の汗を浮かべている。どうやら酒は親父が、料理はおかみが担当するようだ。

「いや、食べてきたから今はいいい」

「そうかい。じゃあ呑んでくんだね」

そう言ったかと思うと、次の瞬間には後ろのカウンターに目配せをし、それを受けた初老の男が琥珀色の液体を背の低いグラスに注いでいる。

苦笑いを浮かべるしかないリバーに女将は得意げに笑い、瞬く間に次のテーブルに、半ば強引ともいえるオーダーを取りに行っている。

る。体型に似合ったバイタリティではあったが、それが嫌味に見えないのはもしかしたらある種の才能なのかもしれない。

そんなことを思いながらリバーは手近な椅子に腰かけ、ぐるりと周囲を見回した。入口の向こうからは、仕事上がりの陽気な話声やそれを狙った呼び込みのにぎやかさが、遠い記憶の中の音のようにぼんやりと響いてくる。

薄っすらと汚れたガラス窓から見えるのはオレンジ色に染まった街と、少し浮足立った喧騒に彩られた往来、そして夕日を浴びて昼間とは全く違う色彩をはなつ世界樹のシルエットだった。ただ、世界樹に限っては夕陽のオレンジだけではなく、その実が放つ淡い光が陽光のオレンジや影の黒の中に赤く、花のように咲いている。空にまだ星はなかったが、東のほうからは濃紺色をした夜の空気が一呼吸ごとに街を覆い始めていた。

「はいよ、お代は帰りにね」

つまり、ここにいる間はうちで飲み食いをしてくれよ、ということだろう。

曖昧に苦笑いを浮かべたリバーは、運ばれてきた琥珀色の液体に目をやると、薄暗い照明を反射してゆらゆらと金属のように輝きながらリバー自身の目を映し出していた。

とろりとした液体はその純度を現しており、それが相当の強さであることを物語っていると同時に、水で薄めていないことを証明しているようでもあった。

口に流し込むと、久しぶりのアルコールの感触に舌やのどがひりつくほどだったが、あつという間それは心地よい苦味に姿を変え、気がつけばすでにグラスの半分ほどが胃の中に消えていた。

それからの一時間ほどは残りの半分をなめるようにして味わい、日が落ちるほどに賑やかになってゆく店の中を眺めていればあつという間に過ぎて行った。

店内にいる客の半分ほどが入れ替わり、目が回るのではないかと思うほどにくるくるとフロアを走り回っているのは小間使いと言う

のがふさわしいような少年だった。店の中も外も賑やかさのピークに達しようとしているのが容易にわかったその時に、予想外にというか案の定というか、店の隅から怒号が湧きあがった。

最初は火種のような言い合いが時折耳に届く程度で、おかみや周りの常連が冷やかし半分に諷めている程度だった。もちろんリバーにとっては、これが酒を飲む場所でのいつもの光景とでも言うように、視界の隅にもとどめてはいなかった。

ただ、それがいつもの酔った上での乱痴気騒ぎではないとわかった時には、すでに火種は導火線に引火し、あとは火薬に届くだけというところだった。

テーブルが蹴りあげられ、砕け散ったグラスの欠片に隣近所の客は転がるようにして逃げ出し、片方は右手に割れた瓶を左手にはナイフと呼ぶのが憚られるような長大なナイフが握られていた。そしてその対面、ナイフの男がテーブルを蹴りあげる間にもう一人の男は、どこからか取り出した散弾銃を相手の鼻つつらにつきつけていた。

絵にかいたような一色即発。

発狂した画家の手による一枚の絵のような光景で固まった光景に、誰もが言葉を失い、警察への通報を考えられたものなどもちろんだれ一人としていなかった。あの女将ですら仲裁するのを忘れて二人の一挙手一投足に見入っていたが、それでも手にしていたジョッキを的確に客に届けたのはさすがとしか言いようがなかった。

「てめえに何がわかる！」

随分と酒が入っているらしかったナイフの男は、呂律は怪しいながらもなんとかそう叫ぶ。ぶるぶると手元が震えているのは酒のせいか恐怖のせいかはわからない。

「わかるからこうして話してやってんだろうが。その気もしらねえでてめえ勝手なことばっかぬかしやがって、もう我慢ならん！」

対してライフルの男ははっきりとした口調だったが、こちらも真っ赤になった顔と若干焦点の合わない視線が完璧に酔っぱらってい

ることを教えている。

「んだとこの野郎、やんのか！」

「ざけんなこのやろう！ てめえの脳グソぶちまけて犬の餌にするなんざ一瞬だぞこら！」

「おう、だったら！」

一瞬だった。

ナイフの男がちらりと店内に視線を向け、散弾銃の男がそれに呼応するように引き金にかかる指先に力を込める。

「有り金全部だしな！」

ナイフと割れた瓶の切っ先が、一番近くで事態を傍観していた男の首元にそれぞれ突きつけられる。と同時に、ライフルの銃口があるうことか女将の眉間をしっかりとらえる。

「わるいな、いいもん見せてやった見物料だ。有り金全部置いてとっとと消えな。女将、お前は今ある売上全部だ！」

店内の空気が嵐のように全く違った方向に流れ、瞬き一つ許されないような緊張感が店の入り口までパンパンに膨れ上がる。

おそらく、ただの強盗程度ならここにいる連中はこの半分も驚かないだろう。その程度にはこの街は平和で、その程度には無法地帯だった。女将に至っては、笑っていなしてしまったかもしれない。それが、完全に自分たちには関係ないと高をくくり、安全圏にいると思いこんでしまったところへの不意打ちだ。これほど意外で効果的な強盗手段も珍しいかもしれない。

かくして、悲鳴一つ上げずに男たちはナイフ一本と割れた瓶、そして一丁の散弾銃で店にいる全員をまんまと制御化においた、というわけだ。

ただし、

「女将、おかわり」

男たちの計画の範疇に入らないやつが一人だけいた。

リバーが空になったグラスを振り、あろうことか立ち上がって自らカウンターに向かおうとさえしている。

「おい」

不機嫌そうにどすの利いた声で散弾銃の男がつぶやく。先ほどの激昂したような口ぶりは演技だったようで、その口調には今は酒の気配も感じなければ先ほどの軽薄そうな雰囲気はみじんもなかった。しかも、銃口はいまだしっかり女将に向けられたままだ。

全く聞こえないふりでリバーは店を横切り、カウンターに肘を置きながらグラスにビンの中身をあける。トクトクというバーボンが流れる音までが店中に届き、あきらかにそれにいらついた散弾銃が再び、今度は先ほどよりも声を荒らげながら口を開く、

「てめえ！」

同時に銃口が女将から外され、向けられただけで気の小さい奴なら死にそうな勢いで照準がリバーをとらえる。

それが、男の見た最後の光景になった。

銃口を向けた先にはいるはずのリバーの姿はなく、代わりにどんな大きくなる琥珀色の塊。それがビンであり、琥珀色は中身の液体の色だということに気がついた時にはビンが男の顔面を直撃する、がしゃんっ！

ドンッ！！

二つの音がほぼ同時に鳴り響き、一瞬にしてむせ返るような火薬の臭いと酒の臭いが店中に充満する。

「はい、よそ見しない」

次の音は声。

全員の意識が散弾銃の男に向けられた瞬きほどの間に、人の波を縫って走ったリバーが現れたのはナイフの男の懐数十センチのところ。ナイフと素手ではどちらが有利とも言えない極めて微妙な間合いだった。

ただし、それはどちらもが極限に集中をしていれば、という前提があつてこそこの話であり、散弾銃の男がやられたことに動揺した状態ではどんな間合いも有利足りえなかった。

ナイフが翻った時にはリバーの無造作な蹴りが男の鳩尾に突き刺

さり、目を剥いたまま気絶した男は自分がぶちまけたガラス片の上にあっけなく崩れ落ちた。

時間にしてわずか三秒に満たない、まさに瞬間芸。

誰一人として動くどころか息をすることもできないような静寂の中で最初に動いたのはやはり、あの女将だった。

「すごいじゃないかあんた！」

その一言をきっかけに店中から拍手と喝さいが沸き起こり、あつという間に店は元の活気を取り戻し、それどころかお祭りのような大騒ぎへと発展してしまう。

隣にいるおっさん同士で抱き合うもの、誰のものもしれない酒を一気におおって奇声を上げるもの、便乗しようとそれまで遠巻きに外から眺めているだけだったもののまでが店になだれ込んできて、小間使いの少年はそれに次々と酒を売りまくっている。

リバーの周りにはあつという間に黒山の人だかりができ、やれこれを飲めあれを食えとテーブルの上には山のような食い物と浴びてもなくならないほどの酒が用意されていた。

傍らには誰が縛り上げたのか、頑丈な麻のロープでこれでもかというほどにぐるぐる巻きにされた強盗二人組が粗大ごみのように店の隅に打ち捨てられている。

「あんた、ただの配達屋じゃなかったんだね？　ありやなんだい？　本職は用心棒かなんかじゃないのかい？」

礼だと言わんばかりに、先ほど出されたものよりもずっと透明度と粘度の高い酒を瓶ごと置いた女将が満面の笑みを浮かべてリバーの向かいに腰をおろした。少し上気したピンクの顔は恐怖の裏返しだろう。

「そんなもんじゃないよ。自分の身を自分で守って暮らしてきただけだ」

確かに用心棒を頼まれることも少なくはなかったし、一時期はそれを本職にしようと街に居つくことを考えたこともなかったわけではない。ただ、そうした商売の欠点は敵を作ることであり、それは

もちろん街に居つくこととは相反する道理でしかない。結局最後に落ち着いた時は流れの配達屋を営みながら必要に応じて対象の護衛なんかもやる。

「黒髪のバイク乗りで凄腕の用心棒。これで赤い眼をしてりゃあ伝説のお尋ねものなんだがなあ」

「違うだろ、そりゃ壊し屋だろ」

「赤目の殺し屋なんてほんとにいんのか？ 賞金稼ぎにとくに狩られたって話だろ？」

「そもそも実在すんのかよ？ ライフルの弾でも避けられるなんて、完璧なフカシだろ？」

先ほどの緊張の糸が溶けたのと一気に酒が回ったので次々に男たちの口から言葉があふれ出る。

曰く赤い目の悪魔。曰く人の形をした兵器。曰く史上最高額の賞金首。曰く人間大災害。

歩いた後にはぺんぺん草一本残らないといわれる伝説の破壊魔。そんなおとぎ話のような存在に話が及んだのは今日の恐怖をさっさと酒で洗い流すためだろう。

リバーはそんな話を聞くともしに聞きながら、女将から出されたバーボンを流し込むと、先ほどのものよりもずっと強い熱気が喉を焼いたが、風味も味も先ほどのものとは比べ物にならないほどの上ものだった。

自分が話題の中心からそれたことにはほっとしたが、どうやらこの酒盛りは自分を放すつもりがないらしいことに気がついた時には、半ばあきらめ気味にボトルを半分ほど開けていた。

こうして、世界樹に愛でられた街の夜はいつもどおりに更けていった。

拾われ少女

覚醒した意識が最初に見たものは、窓からじっとこちらを見つめる二つの月だった。

まるで黒いキャンバスに描かれたかのように、窓のフレームにぴったりと収まった月は、互いに肩を寄せ合うように輪郭をにじませて触れ合わせていた。

輪郭がにじんでいるのは、寝起き直後の寝ぼけたピントのせいだとはわかったが、それにしても月がきれいだった。

青白い光を放ちながら双子のように寄り添っている月明かりが、記憶にある最後の景色よりも幾分か明るさを増しているように思えた。

「何時だ？」

部屋に備え付けの置時計を探す、それよりも先に自分が腕時計をしたまま眠りにについていたことに気付き、左手を引き寄せた。決して正確とは言い難いが、それでも大まかな時間を把握するには十分な、頑丈さを第一に作られた時計は、短信が三のあたりを指していた。長針を確認しなかったのは、この時計の長身で分単位の間を確認する愚かさを知っているからだ。

「何だ、まだ寝れるじゃないか」

確か、あのどんちゃん騒ぎから解放されたのが日付が変わる直前だったはずだ。二人の強盗を引き取りに来たのと同じ警官があきれ顔で近所から苦情が来てるからさっさと帰れ、と言いに来たのはさすがにやりすぎだと思った。

特に起きる時間にあてがあるわけでもなかったが、少なくとも深夜三時は起きている理由のない時間ではあった。それはこの街に暮らす誰にとっても同じようで、眠りに落ちる直前まで祭りのように賑やかだった外の喧騒は、今では嘘のように静まり返っていた。

ぼりぼりと頭を掻きながらベッドに胡坐を掻いたりバーは、何を

言うでもなく窓の外にじっと目を凝らした。

昼間に見た、祭りのような活気あふれる彩り豊かな街並みはそこにはなく、四角く切り取られた町は全ての命が死に絶えたかのように色彩を失っていた。

いや、色彩はあった。ただそれは命を感じられる色ではない、と言わべきか。

死後の世界を絵に描く時に人はこういう色を使うだろうと思えるような、冷たくさびしい寒色だけに彩られた蒼白い街がそこにはあった。見ているだけで魂が凍るような寂しさ。

一人で旅をする者であれば絶えず隣り合わせの、孤独のイメージ。それは、取りも直さず、

死

一歩足を踏み外せば常に人の隣人であり、しかし絶対的な距離を持って存在しているそれは冷たく、時には甘美に、ときには容赦なく、いざないの手を差し伸べる。

その身近さと絶対性を併せ持ったそれが、四角く区切られた窓の中に満ちている。数え切れないそれを見てきたリバーには、それが物理的にそこに存在しているように見て取れた。

「賑やかだったぶん、こういう反動がでっかいのはやっぱり好きになれねえな」

ゆっくりと立ち上がって窓枠に手をかけ、一枚の絵のように月が照らす景色の中に上半身を覗きこませる。と、そこには吸い込まれそうな静けさと、凍りつくような明るさがあった。

一度だけベッドを振り返るが、真冬の寒さの中ならまだしも、中途半端に覚醒してしまった今は毛布のぬくもりはさほどの魅力を持つてはいなかった。

「ちよっと散歩して、んで寝るか」

きつとこのままベッドに戻っても眠れなくはないだろう。ただ、それまでに布団の中でしばらくもんと寝がえりを繰り返すことになるだろう。

それならば、というわけだ。それに、この時間の街というのは得てして水面下での活動が盛んであったりする。それは単純に深夜営業の何某かの店があるという意味でもあるが、むしろリバーの想定しているそれは昼間の世界からつまはじきにされた者たちの活動の場、という意味合いが色濃い。そういう輩の商売は、危険が伴う反面実入りもケタが違う。

ブーツのひもを締めなおし、窓枠に足をかけたかと思うとチラツとだけ眼下の地面を確認して体を宙に踊らせる。

軽業師のようにすらりと伸ばされた両腕でバランスをとり、舗装されていない道路に靴底がつく直前でゆっくりと膝を曲げて着地の衝撃を軽減する。かすかに砂利を踏む音だけが夜の通りに幾重にも残響を残したが、その音も夜色の布に吸い込まれるようにして溶けて消える。

外に出てみてわかるのだが、この街は世界樹がある割には街灯が少なく、月明かりと窓からこぼれるわずかばかりの明かり以外には世界樹の実が放つ赤だけが夜空に色を持っている。

この街は世界樹の利益を誰かが独占しているわけではないという果物屋の小僧の言葉を思い出す。おそらくは街灯一つにとっても共有の財産である世界樹のエネルギーを使うことを節約しているということなのだろう。となれば、ますます世界樹を街全体で共有している世にも珍しい構図が真実味を帯びてくる。

「とはいえ」

おかげで昼間と印象の違いすぎる街を、昼間の記憶を頼りにゆっくりと闊歩する。

「もうちょっと明るくてもいいと思うんだがなあ」

わざわざ聞こえるようにそう言うと、さらに歩調を落として通りの真ん中を歩く。さすがにこの時間では車も馬車も通りはしないが、ど真ん中を歩く理由は他にあった。

三人

窓から飛び降りて五十メートルと歩かないうちに物陰からこちら

を見る視線の数がその人数を教えている。

光が大きければそれだけ生まれる影も大きさを増す。昼に対して夜があるように、活気あふれる昼の対極に位置するのはその歪みに身を落としたもののなれの果てなのかもしれない。

ただ不思議なことに、こちらに向けられる三組六本の視線以外にも奇妙な感覚がある。

（まるで街全体が蜘蛛の巣みたいだな。とはいえ、何だこりゃ？）
とりあえずやることは一つだった。それまでと全く同じ歩調で通りを歩き、辻に差し掛かったところでくると向きを変えて右に折れる。ここで重要なのは、いかにそのあともまっすぐ歩いて行くと相手に思わせられるか、だ。

果たして作戦は成功したようで、角を曲がってすぐのところにある看板に身を隠していると、にわかにはこちらを追う足が速まったのがわかった。数は二つ、おそらく最後の一人は警戒して後ろから様子を見ているのだろう。それなりには連携の取れた連中のようにだった。

（でも、素人なんだよな）

一つの足音が角に差し掛かったところでゆっくりと首から上だけを覗かせ、

「はい、いらっしゃい」

先手必勝を絵にかいたような一撃。ひょっこりと覗いた顔を思い切り右手で鷲掴みにし、そのまま地面にたたきつける。幸いにも足元は未舗装の砂利道ではあったが、頭の形に地面がへこむほどたたきつけられてはそれも関係なかったのかもしれない。

本人は用心していたつもりかもしれないが、あれだけしっかりと壁から顔をのぞかせていては狙ってくれと言っているようなものではない。たぶん、男は何をされたのか気がつかない間に意識が途切れたことだろう。

二人目に関しては不意打ちを食らったことには気がついたようだったが、それでも反応の隙は与えなかった。目の前で一人目が通り

の向こうに引きずり込まれるように消えたのを見てその場にとどまったまでは良かったが、陰から飛び出てきたリバーの速度には全く反応できなかったようで、頬に手のひらを叩きつけられ、そのままコンクリートの壁に反対側の頬を叩きつけられ、これも瞬きほどの間に意識が途切れる。

「ってわけだ。悪いけど、こっちもおいそれと財布の中身くれてやるわけにはいかなくてさ」

叫ぶわけではなかったが、今の一連の出来事が確認できるほどの距離にいるなら聞こえるだろうという声で言う。

「てめえ、邪魔すんのか？」

三人目が姿を現したのは、意外なほどに近くの路地からだった。もう少し離れていたかと思ったが、どうやら思っていたよりはできる手合いらしい。

「じゃま？ こっちの散歩の邪魔してきたのはそっちだろ？」

「は？」

「ん？」

話がかみ合わない。こちらが何か見当違いをしているのではないかと、窓から飛び降りるところから今までの記憶を脳内で再生してみるが、やはりそれらしい個所は見当たらない。

「お前、俺達の邪魔をしにきたんじゃないのか？」

「あんたらが何してるかも知らないのに邪魔もへったくれないだろ」

「じゃあ何で？」

何となく言いたいことはわかる。

「そりゃ、こんな夜道でこっそり後ろをつけれりゃ、誰だって警戒するだろ。それこそ、俺みたいな流れものなんか殺されたって誰もかばっちゃくれないからな。自分の身は自分で守る」

正論か否かは別として、リバーの身に付けた見知らぬ街での護身術だ。結局は、自分を守るのは自分しかない。ただでさえ食いぶちを奪い合うようにして生きている世界で、よそ者と言うのはそ

れだけで理不尽な扱いを受けるものだ。

「ちっ」

男は露骨に舌打ちをすると、忌々しそうに回れ右をして歩き出す。捨て台詞の一つも残していかとも思ったが、何も言わずに消えるあたり潔さは身につけているらしかった。

視線だけで眠っている男二人を、最後にもう一度だけ歩き去った男の姿が見えなくなったことを確認し、

「これでいいかい？」

先ほど自分が曲がったほうとは反対側の通り、リバーから見て右側の通りに体を向けおどけたような口調で言い放つ。相変わらず街灯が少ないため、通りを曲がって三軒向こうはもう闇に吞まれかけているような有様だ。

「どうして？」

闇が口を利いた。

ぼんやりと、淡い照明の中に浮かび上がるように人のシルエットが切り取られ、遠近法を無視したように両足が動く。

「あなたも、あいつらと同じ？」

ギリギリでシルエットが見える距離。おそらくは向こうから見てもリバーがギリギリ確認できる距離、ということなのだろうか、立ち止まった影は驚くほど淡々とした口調で言葉を紡いでいる。

それが、今しがたまで男に追われていた少女のものとは思えないほどに。

「だったら、さっさと逃げたほうがいいんじゃないのか？」

何がどう同じなのかを聞くようなことはしなかった。少女は、女というにはまだ少し時間を必要としそうな、女らしさよりもあどけなさのほうが目を引くような姿を月明かりの下に晒す。斜めに切り取られた陰から姿を現した少女の姿に、リバーは息をのむ。

踏み出した足音が、水面に生まれた波紋のように周囲の空気を乱し、次の瞬間に引き締める。

「そうしたいけれど、もう」

綺麗な娘だ、そう思ったのは流れる髪を見たからで、顔立ちに関しては表現する術をリバーは持ち合わせなかった。まるで計算つくされた造形物を見せられているような、現実味を帯びないほどの美しさは、後から思い返せばあの夜の月明かりにいくらかは割り増しされていたのかもしれない。それを差し引いたとしても掛け値なしに綺麗な少女。それが重力に引かれるようにその場に崩れ落ち、「こら！　おい！」

限界だったらしい。

あわてて飛びつくようにして少女の肩を支えようとするがあまりにも細いその肩をわしづかみにするかどうかで迷った。その一瞬に少女の赤みを帯びた亜麻色の髪が流れ落ちてゆく。

「くそっ！」

滑り込みセーフで、自分の体を下敷きにして少女を支えると、一張羅のジーンズ越しに尻に砂利の感触が突き刺さる。たぶん破れてはいないはずだが、もしかしたらちよつとぐらいは擦り傷ができているかもしれない。

少女の体が鳥の羽のように軽い、などという妄想を抱くほどには子供ではないつもりだったが、あまりにも重量を感じさせない少女の体がどれほど華奢であるかは想像の範疇を超えていた。その程度にはまだ女を知らない。

「ちゃんと食ってんのか？」

気を失った少女の口元から一筋の血が、糸を引くように滴り落ちる。男らに追われている間もずっと歯を食いしばって逃げていたのだろうか。そう思うと、この年の少女にはどれほどの恐怖だったかは想像もしたくない。怒りよりも自分が男であることへの情けなさのほうがこみ上げてくるような気がして、リバーはふとそんなことを口走ってしまった。

次から次へと呼びもしないのに

「おはようございます」

窓からは、うっかり見てしまうと頭痛がしてしまいそうなほどに眩しい光が斜めに差し込んでいる。鳥の声も人の声も時間とともに賑やかさを増し、扉の向こうではそろそろ一日を始めようとする活動の足音が否応なく朝を告げている。

「はい、おはよう」

ここが高級宿や贅を尽くした豪邸の客間だというのなら話も少しは違っただろう。朝のあいさつに続いてリバーの口からは

「てててて…」

という、年寄りのようなしわがれた声だった。

数時間とはいえ、さすがに床板の上に直に眠れば体はつらいらしい。バキバキととのする腰や肩を伸ばしながらゆっくりと立ち上がると、もうしっかりと熱を持った陽光が背中に突き刺さる。今日も暑い一日になるのは考えなくてもわかった。

「ここは？」

ベッドの上で微動だにせず天井を見つめる二つの目が、一度だけ瞬きをする。亜麻色の髪が枕を覆い隠すように広がり、昔話に聞く眠ったまま起きなくなってしまうたお姫様の童話を思い出させる。

「宿の部屋。あんたが倒れてから六時間後。って、倒れた時の記憶があればの話だけどな」

「そうですか」

結局リバーは少女を連れて部屋に戻った。

倒れこむようにして支える少女の体は、比喻でも何でもなく羽のように軽く、月の青い光の元でなくともそうとわかるほどに血の気の失せた顔色は、しっかりとその疲労の濃さを物語っていた。

頭の中でいくつかの足し算と引き算がありはしたが、結局は凡百と言わざるを得ない答えに辿りついた。それも夜の酒の席なんかで

話せば、根性無しか種なしと言われて笑い草にされるのが目に見える。

かくして、意識を失った少女はベッドの上で目を開き、白馬の子さまになり損ねた配達屋が板床の上でバキバキの体を鳴らしながら間抜けきわまるあくびををこぼしている。

「心配するな。持ってきてそこに置いただけだよ」

「なぜ」

少女が起き上がりながら、初めて見る種類の生き物を見るような視線を向けてきた。そりゃそうだろう、昨日の夜は欲望にまみれた男に追いかけまわされ、目が覚めてみればベッドの上の自分に指一本触れようとしない男が不機嫌そうに床に座っているのだ。

そういう意味の「なぜ」だと汲んだリバーは、めんどくさそうにぼりぼりと頭を掻きながら言葉を選ぶ。

「そりゃまあ、俺の食指が動くような大人の女じゃなかったってことと、残念ながら俺も昼間の配達疲れで眠気に負けて寝ちまったから、ってことで納得？」

多少失礼かもしれないと思いはしたが、ここでの選択肢の失敗は男としての沽券にかかわる気がしたりバーは精いっぱい強がりという札を切った。もちろん、多少のリスクは考えたが、難なくこの事態を収拾し、収束への一歩目を踏むには最良と信じて。

なのに、

それなのに、

少女はあろうことかゆっくりとした動作でベッドから滑り降り、あろうことかリバーの荷物に手を伸ばした。

「おい、それ俺の荷物」

言う間もなく少女は、それがまるで自分の荷物であるかのように鞆をあさると、財布やそのほかの金目のものが入っているところではなく、サイドポケットのいつでも取り出せるどうでもいいものの中から紙切れを一枚引っ張り出した。

「配達屋さん、なんですよね？」

「あ、ああ」

まさかそこに食いつくのかと思いながら、リバーが少女の次の一手に目を見張る。

危険を感じたからではない、それなら何とでも対処のしようがある。そうしなかったのは完全に相手の手の内が見えなかったからだ。「では」

ごくりと息をのんだのが自分だったことに、リバーが胸中で舌打ちをする。何となく少女に気圧されたような気がして悔しかったからだ。

そんなリバーの禅問答に近い自己欺瞞を無視するように少女の腕が動き、いつの間に引っ張り出したのか、リバーの鞆から抜き取ったボールペンで紙切れに何やら記入し始めていた。その時になって初めて、少女の手にする紙切れが送り状であることに気がついた。その間にも少女の手は紙の上で動き、途中で迷いながらも書き終えたらしいそれを、あろうことか

「私を」

ぺたりと、自分の額に張り付けた。

「配達してください」

少女の視線が突き刺さる。もちろん、それだけ突き刺さるのだから、今の一言が冗談ではないことぐらいは容易に想像ができたが、もちろんこれに二つ返事で首を縦に触れるほどに成熟した商売人でもなければ聖人君子でもない。

「は？」

凡百な答えでももう少しましな受け答えがあるだろうというような声を発したリバーは、まじまじと少女の額に張られた送り状の字面を追ってしまう

宛名も受取人も連絡先も書かれてはいなかったが、送り人だけがリバーにも理解できる共通言語で書かれていたため、少女の名だけが印象に残るという結果になってしまう。そのうえ、少女に次の一手を打たれてしまう。

「送れませんか？」

歪んだ扉を押し明け、昨日の夜は喧騒を背中に聞きながら歩いた廊下を逆向きに歩き、足をつくたびにきしむ階段を下りてモーニングをオーダーするためについたテーブルでどこか眠たそうなその声が頭の上から降ってきた。

「昨日はお楽しみだったようだね、大将」

頭上にあるのは女将の満面の笑み。

ギロチンの刃が降ってきてくれたほうが、まだ救いがあったかもしれない。

「モーニングは二人分だね。気にしなさんな、部屋代は一人分でかまわないよ」

全とお見通しだといった風に女将はウィンクをすると、早く呼んで来いとも言うように顎をしゃくってリバーを二階へと促した。

というわけで、木製の丸いテーブルをはさんでリバーは少女とさし向ってコーヒーをすすっている。少女は送り状の送り主の欄に「ラシル」と拙い文字で書いていたのでおそらくそれが名前であることは想像がついたが、本名であるかどうかはまだ怪しいと思っている。

「おい」

少女がパンを食べ終えた頃を見計らって声をかけると、まったく表情を表に出さない黒目がちな瞳がぴたりとリバーを見据える。

「冷静に考えてもみろ」

コーヒーのカップを置きながらリバーは慎重に言葉を選ぶ。

店中の視線が集中するこの場所の緊張感は、リバーがこの世で最も苦手とする種類のものだった。そもそも注目を浴びるだとか目立つといったことに縁がなく、どちらかと言えば日蔭者として荒野を一人で走る配達屋をしている時点で、コミュニケーション能力は人並み以下だという自負があった。最近でこそ、世渡りに必要なやり取りぐらいは身につけられたのかもしれないが、それも生きていく

必要最低限のスキルでしかない。

そんな男が、あろうことか少女を目の前にして何十という視線の先に晒されている。しかも好奇の視線や、なかには好色そうな色を隠そうとすらしらないものまでありありと見て取れる。

誰に言うでもなく、リバーの言葉がありもしない地雷を避けるようにあやふやな表現を選んでゆく。

「いくら俺が配達屋だってもの、その、なんだ、生き物だってそりゃ頼まれれば運ばないわけではないが、それも限度のある話だ」

口を開けば開くほどに自分で何が言いたいのかがわからなくなっていくのがわかったが、この時点でもうゴールを見失っているリバーを見る、周囲の目はすでに見世物を見るそれになっている。

「だからだな」

「連れて行つてはもらえませんか？」

「おおー」という歓声がどこからともなく漏れる。少女の言葉のチヨイスはリバーにとつては最悪であり、観客にとつては待つてましたと言わんばかりのかみ合わせだった。これではどこからどう見ても旅の同行をせがむ女と、それをやっかむ男の構図だ。もちろんこういう場合のギャラリーは無責任に女の味方をするものと相場が決まっている。

「色男、つれてってやれよ」「何なら俺が連れて逃げようか、地の果てまで！」なんて無責任な声もちろほらと上がり始め、それをいなす女将の言葉にもいつもの迫力はない。

古典演劇でも大衆演劇でも何でもそうだが、恋に一途な女というのは常に応援されるものだ。

ただし、これがそんな穏やかなものではないことを知るリバーの心中は穏やかではない。

「あなたの次の配達先までで構いません」

しかも、さらりとこんなことまで言う。こうなつては、あくまで無表情な少女の顔も、見ようによっては思い詰めた鬼気迫る表情に見えるのだろう。

「だから、そういうことを言うのだな」

「私は旅を止めるわけにはいかないんです」

「だったらもっと他に方法があるだろう」

「しかし…」

少女が言葉に詰まったのは、あまりにも当たり前すぎる回答だったのだろう。もちろん、街から街への移動がどんなものかはこのあたりの気候風土を考えなくても並大抵ではないことは容易に想像ができるし、それが女の一人旅ともなれば何をかいわんやである。しかし、だからと言ってそれを実現する方法がないわけではない。実際に物資や人の流通は世界規模で行われている。

「ってことだ」

この時点で店内のリバーを除く全員がラシルに肩入れしており、リバーが口を開いている間にもそこかしこから「人でなし」だの「連れてってやれよ」だの、果ては「種なし」なんてヤジまで飛び交っている。が、こうなってはもうそんなものに耳を貸している場合ではない。

「じゃあな」

ぬるくなったコーヒを一気に飲み干し、カップを置いた音を合図にしたかのようにリバーが立ち上がる。これ以上は問答の余地なしという空気を存分に吐き出しながら少女の横をすり抜けるように歩き去ろうとする。

向けられる視線はすでに物理的な威力を獲得しているように、槍か矢のように背中突き刺さっているが、もうここまで来てはヒールに徹するしかない。それが一番の選択肢だ、そう思って半ば自虐的に口元をつり上げて微笑んだリバーに、ついに声がかけられる。

「みーつけたー！」

リバーが振り返る動作に合わせるように、店中に顔が全く同じ向きで、まったく同じ視線を投げた先はオレンジ色の朝日が差し込む、店の入り口だった。

力いっぱい開かれた扉がきしむような音を上げながら、外れなか

ったのが不思議だとばかりに揺れている。

「見つけたぞ、ちょこちょこと逃げ回りやがって！」

その場にいる全員の鼓膜が破裂するような甲高い声に、窓のガラスまでもがびりびりと震えたのは気のせいではない。それが証拠に、背後のバーカウンターでは重ねたグラスが小さく音を立てていた。

女の声で女とは思えない言葉が紡ぎだされている、とはたまたまカウンターの内側でかがんでいたマスターの談だ。

「今日という今日こそここであったが百年目——」

びしっと、音がするほどに鋭く突き出された人差し指はまっすぐにリバーを指し、腰にあてられた左手がいかに彼女が自信満々であるかを物語っているように、ぐっと血管を浮き上がらせている。力強いその立ち姿は、少女の身長が標準をはるかに割っていることに気付かせないほどだった。が、それでも誰もが気付くほどに小柄な少女は、髪の毛のてっぺんまで怒りをみなぎらせてさらに口を開く。芝居がかった口調に、先ほどまで恋愛もの寸劇の観客だったヤジ馬たちの熱気が膨れ上がる。これは見ものだばかりに少女とリバーの間にあるテーブルやらなんやらを片づけて舞台を作っている奴らまでいる始末だ。

「積年の恨みとあたしらの生活費、ここで一気に大願成就だ！」

宿が揺れるほどの喝さいが上がった時には軽い頭痛すら覚えた。

お前ら働かなくてもいいのか、という言葉を飲み込んだリバーは呆れたようにがっくりとうなだれる。

「あのな」

たぶん聞く耳は持たないだろうと思っていたので、独り言のつもりでそう言ったりバーだったが、タイミング良く少女の耳に届いたらしく、自信満々に反り返っていた少女は訝しげな視線を向ける。

「勘違いもいい加減に」

「黙れ賞金首！ 証拠は上がってるんだ。大人しく父さんと母さんの、街のみんなの敵として死んで賞金に変わりやがれ！ ほら、いきな！」

一方的にまくしたてると少女は、定規で線でも引いたようにびしっと手を横に差し出し、無造作に隣にいた男の首根っこをひっ捕まえると投げ飛ばすようにそいつを店の中に放り込んだ。

「ちょ、姉ちゃん、何でいっつも俺なんだよ」

「うるさいわね、あんた女に斬った張ったさせるつもりなわけ？」

「そうじゃないけどさ」

どうやら姉弟であるらしい二人のやり取りに、もう面喰わなくなった観客はたぶん盛り上がりたれば何でもいいう境地に至ったのだろう。あろうことか女将までもが腰をおろして事の顛末を見守っている。

「あ、逃げるぞ！」

言わなくてもいいものを、せっかく全員の意識が二人に向いた瞬間を選んで物影を走ったのが意味を失ってしまう。

「こら、逃げるな！」

少女が何やら弟をどやしつけているが、どうやら弟には積もり積もった何かがあったらしく寸法で言えば親子ほども違うような姉に向かって猛然と抗議している。

「悪いなセフィ、俺もお前ら相手にするほど暇じゃないんでな」

一気に二階へと駆け上がる。背後では少女のほかにもありとあらゆる罵声が響き渡っていたが、もちろんこれが自分にとっての絶好のチャンスであることに疑いははさんでいなかった。

「どさくさまぎれってのがカッコ悪いけどこの際だ」

部屋に飛び込むと、同時に荷物を手に取り、一瞬だけ迷ってから飯代には少し多めの紙幣とチップ代わりの銀貨をベッドの上において、窓枠に足をかけた。窓は昨日の夜から明けたまま。見下ろせばまるでこの事態を見越したかのようにバイクのテールが物置の屋根からはみ出して見えている。

ためらったのはほんの一瞬。ラシルの必死すぎるほどにまっすぐな瞳が脳裏に浮かび、もう自分にはあんな目はできないのだろうと自嘲しながら頭を振る。

砂ぼこりを巻き上げながら着地すると、しびれる足をごまかしてバイクに飛び乗る。荷物を側車のシートに放り込むと、野宿用の毛布がほこりを巻き上げながら荷物を受け取る。ポケットから引っ張り出したキーをシリンダーに突っ込み、キックペダルに足をかけて一気に踏み込んだ。

本当ならエンジンの暖機なしに負荷はかけたくはないのだがこの際贅沢は言っていられない。

「あの野郎、外だ！」

完全に見物客と化していた男が一人、窓から身を乗り出すようにしてこちらを指差しているがもちろんもう遅い。一気にスロットルを回し、クラッチをつなぎながらテールを滑らせ、百八十度回転したところで一気にタイヤをグリップさせる。

ありとあらゆる種類の歓声と怒号の中ではっきりと聞こえたのは予想通り、甲高くもハリのある少女の声。

「ちつくしゅー！ おぼえてやがれー！」

ドップラー効果を引き起こすほどの加速で漆黒のバイクが、舗装されていない道路を砂煙を巻き上げながら駆け抜けてゆく。

少女と種と

大通りを抜け、世界樹の公園をはさんでちょうど宿とは反対側にたどり着いたところで、ようやく一息つくようにバイクを道端に止めてエンジンを切る。さすがにここまでは朝の騒ぎが伝わってきてはいないようで、通りを歩く人間は誰一人としてリバーに興味を示すものはいなかった。

「全く、なんで俺には平穏と安息が訪れないのかね？」

宿に泊まれば暴力沙汰が降りかかり、街を歩けば変な女を拾ったかと思えば拳銃の果てに自分たちを親の敵と勘違いしているセフィ姉弟らまでが現れた。

「ま、最後のはあながち勘違いじゃないのかもしれないけど、それにしてもひどいな」

さすがにここまでのドタバタが一気に降りかかることなどそうそうない。

気分を落ち着けるためにゆっくりと深呼吸をし、手だけを伸ばして側車に積んであるはずの水筒を引き寄せようとする。が、いつもとは違って適当に放り込んだ荷物の中からはなかなか水筒が見つからず、仕方なしに体をそちらに向けようとしたところでようやく馴染んだ紐の感触が手の平に触れる。

補給したのが昨日の夜だったのでさほどの期待はしていなかったが、ラッパ飲みで喉に流し込んだ水は思いのほか冷たく、食道を流れ落ちる感触に少しだけほっとする。

「ふう」

やれやれだ、そう言おうとして言葉が詰まる。

水筒をサイドカーに放り投げようと手を出したと同時に、その水筒がするりと手首から消える。それは、投げ出した時とも落とした時とも違う。たとえるなら、誰かに手渡した時のような感触。

「おい！」

水筒を握りしめる小さな手が二つ、そしてその手首からすらりとした腕が伸び、もちろんその付け根には当たり前のように華奢な肩があった。ただ問題なのは、どんな形をしているのかではなく、もちろん、どうしてそこにいるのか、だ

自分を配達してくれと言ったあの少女、ラシルが何事もなかったかのようにちよこんとサイドカーに座っていた。しかもご丁寧に、先ほど自分が放り投げた荷物を膝に抱えている。

「はい？」

呼ばれたから返事した、当然のように見上げる視線にはわずかばかりの気まづさが見てとれたが、ばれてしまったことに対する焦りやなんかはないようだ。

「あのな、いつの間に乗り込んだ？」

わかりきっている、自分が荷物をまともに二階へ上がったあの瞬間に、おそらくはだれかが手引きをしたのだろう。あの時に気付くべきだった、あまりにも都合よくバイクが窓の下にあったことに。

「おかみさんが、乗ってしまえばこっちのもんだ、と」

いくつか考えた可能性の一つでしかなかったが、なぜか「やっぱりな」と思ってしまうのはあのおかみの個性ゆえだろう。

「こっちのもんだ、じゃねえよ。あゝくそ、なんで気付かなかったかな」

確かにあのときは逃げることばかりに気を取られ過ぎていたとはいえ、迂闊すぎた。

「あの」

今更ながら、おずおずと少女が肩をすくめる。うつむき加減に向けられた視線は、叱られた子供が許しをこう時のようなものになってしまっている。おそらく、元来はこんな行動的なことはできない質なのだろう。それを、何があったかは知らないが一念発起して気を張っていたのだろう。そうでなければおかみのこんなむちゃな作戦にもものらなかったのかもしれない。

「話ぐらいは聞いてやるよ」

情にほだされる、というのはこういうことなのかもしれないなど、自嘲気味な笑みを浮かべながらスタンドを立てる。このサイドカー、もともとはただのバイクを改造しただけなのでサイドブレーキの類がついていない。それゆえに、停車させる時はバイクのようにスタンドを立てなければならぬという代物だった。最も苦労したのは、スタンドがきくようにバイクの部分だけを少し傾けられるように側車と接続しなければならなかったのだが、こんな奇特な改造がよくオーダーできたものだ。と今更ながらに思わなくもない。

「はい」

ラシルの眼がとたんに輝きだし、年相応の少女らしい笑みがこぼれたのだが、迂闊にもリバーはその表情に一瞬とはいえ度肝を抜かれてしまう。

わかりやすく言うなら、かわいらしかった。

見惚れてしまうというのはまさにこのことだと言わんばかりに、ちらりと向けたリバーの視線がラシルから外せなくなってしまう。それほどに、ラシルの笑顔はかわいらしく、何よりも生き生きとしていた。

「ただ、ここではちよつと」

よくそれだけ器用に表情が変わるものだと感心するほどのスピードでわかりやすく表情を引き締め、真顔になったラシルはこれまたわかりやすいしぐさでひそひそとリバーに口元を近づけていった。

「ま、そっちがそういうならどっか場所を変えてもいいけど、こんなにぎやかな街だと人が聞き耳立ててない場所なんてないんじゃないのか？ いや」

そう言って

リバーは再びバイクのスタンドを跳ね上げ、抜いたばかりのキー突っ込んでエンジンを起動する。大型の獣が唸るような低い音を上げてマフラーが呼吸し、力強い心臓のようにエンジンが鉄色の鼓動をシートに伝える。

「ちよつと移動するわ。これ」

リバーが少女の座っている足元をこそごとまさぐると、色気も減ったくれもないカーキグリーンのフリッツヘルメットが引っぱり出される。このサイドカー、見た目の割にはどうやらかなりのキャパシティがあるらしい。

「かぶってろ、すぐだ」

そう言っ、ラシルがヘルメットをかぶるのも確認せずにリバーはアクセルスロットルをひねり、バイクはあっという間に加速する。

先ほどのまでの光景とは打って変わった場所。

本当に同じ世界なのかと疑っても無理はないほどに、そこには緑と水と光があふれていた。

見上げれば首が痛くなるほどの巨木に、茂る葉はまるで町すべてを覆いつくしてしまうのではないかと錯覚するほどに大きく広がっていた。さらに、土と砂と石ころばかりの街並みに比べ、ここは見渡す限りが緑に覆われている。

世界樹。

それを中心として広がる実り豊かな場所は、憩いの場である以上に町の生産の文字通り心臓であり、生命線そのものだ。ここが終われば街が終わる、というのは大げさでも何でもなく、まぎれもない事実だ。

ただ、そんな大仰な意味のある場所とはいえこの街に暮らす人々にとってはやはり絶好お憩いの場であり、走り回る子供や赤ん坊を連れて散歩をする母親などがちらほらと見受けられた。

「こんなところで、大丈夫なんですか？」

残念ながら、さすがにバイクの乗り入れは禁止されていたため、荷物を抱えて歩いてくることになったのだが、世界樹の根元は緑も茂っているし何よりも太陽の光が遮られるおかげで、涼しかった。

「こんなところからいいのさ」

ドカリと草の上に腰をおろし、背中を世界樹の幹に預けたリバーが眠そうに一発大あくびをする。結局、昨日の夜の騒ぎやら今朝の

ドタバタのおかげで体をゆっくりと休められてはいなかった。

「どうして？ 周りから丸見えですよ？」

「だから。周りから丸見えってことはこっちからも全部が丸見えだ。盗み聞きするやつらがいればすぐに気が付くし、丸見えイコール丸聞こえないからな」

そう言われればなんとなくそんな気がしなくもないが、それでも腑に落ちないのか、ラシルがキョロキョロと周囲を見回していると、「な、そうやって周りを気にするようなやつは目立ってしょうがない。かといってこんな場所で何もせずに聞き耳を立てているようなやつも怪しい。内緒話には絶好の場所なのさ」

自分のことを言われたのが恥ずかしかったのか、耳まで真っ赤にしながらラシルはリバーの隣に腰をおろした。座って俯いたおかげで気がついたのだが、どうやら耳だけではなく、うなじから首筋まで真っ赤にしてしまったらしい。

そこまで恥ずかしがらなくてもいいのになと思いつつながら苦笑いを浮かべたりリバーが、呼び水のように言葉を投げる。

「で、なに？」

その一言にハッと我に返ったようにラシルの眼がリバーの眉間のあたりを見つめ、真っ赤だったうなじのあたりも徐々に薄いピンクから透き通るような白へと戻ってゆく。

「あの、これなんです」

後生大事そうに抱えていたカバンは決しておしゃれとはいえず、年頃の少女が持つには少し不似合いな感じを受ける白い布のカバンだ。そしてその中から引き抜かれた手に握られているのは、真っ赤な、小さい丸い物体。しかもそれは、うっすらと光を放っているような気がする。

「世界樹の、実？ いや、違うな……」

日陰であるこの場所でもはつきりと光を感じるのはおそらく反射ではないだろうと思いつつも、見上げた世界樹の葉の間に輝くその実の大きさをじっと確認する。

もちろん、手が届くような高さには実どころか枝もなく、あそこが空だと言われても信じられるほどはるか上方にうっすらと輝く赤い点が見えるのみだ。とはいえ、距離から考えればあの実が野球ボール大であることは考えられなかった。

「種です」

芝生に寝転がっていたリバーが、背中にばねでも入っているのかというような動きで跳ね起きる。

見つめるそれは、まぎれもなく世界樹の実が放つ赤い光を持っている。

「私は、この種をしかるべき場所に植えなければなりません。その場所を探しています」

ざっ、と風が通り抜ける。

すぐそばを大型犬に引きづられるようにして女の子が駆け抜け、ふわりとなびいた髪をかきあげるしぐさが妙に印象的だった。

「っと、ふう、あぶないあぶない」

相変わらずぴんと張ったリードに引っ張られながら走ってゆく少女の背中を見つめながらリバーはドサリと芝生の上に腰をおろした。「危うく引つかかるとこだった。よく考えりゃわかる話なのに、うっかり信じるとこだった」

「そんな、これは」

「世界樹の種といえば伝説の中の伝説、そんなものが存在すればそれを巡って国の一つや二つは消えてなくなるってまで言われてる代物だ」

世界樹の種。それは古代においては神のように崇められ、最近まではその存在を巡っての議論や争いが絶えず、一生をかけてそれを探し出そうとするトレジャーハンター連中の夢であった。そして近年では、お化けや神様と同様に実在しないものの代名詞としての地位を確立した。強いて言うなら、古代からの長い年月を経て再び神の地位を獲得した稀有なる存在、と言えなくもない、とは哲学者や歴史学者が人類史を皮肉って言う言葉だ。

「まさか俺がこんな女に一杯食わされるとは思わなかった。いや、なかなかのカウンターだったよ。あんた、上手だな」

「違います、これは本物の…」

言いかけた言葉を片手で遮り、身ぶりだけで少女に手元のそれを見せようように指示する。

「とりあえず、それが本物であるなしは別にして、いいさ、乗ったよ」

「え？」

どこか皮肉っぽく笑うリバーの表情を読みあぐねたラシルが目をぱちくりさせながらリバーの次の言葉を待つ。どうやら頑固でまじめな性格らしいラシルには、こういった暗黙のやり取りというものの経験があまりないらしい。その空白を埋めるようにリバーが言葉を追加する。

「俺はあんたのその冗談とも本気ともつかない話に驚いた。それはそれなりに楽しかった。だから、事の真偽はさておいて、俺はあんたの配達依頼を受けることにした、ってことだよ。どうせこの街にはもういられないし、荷物もないわけだしな」

「それじゃ、連れて行ってもらえるんですね？」

「ま、配達先がわからないんじゃない？ あ送り主のあんたにそこまで来てもらうしかない、なんて言えば三流の配達屋だけだな。今回は面白いもんを見せてもらった代金分ぐらいは働いてやるよ。次の荷が決まるまで、って条件付きだけだな」

試すように顎をしゃくってラシルのカバンを指すと、どこまでも生真面目にラシルはこっくりと一度だけ頷いた。

「じゃ、仕方がない。あとでちゃんと送り状書いてもらうからな、あとあんたの旅費はあんたもちだ。俺が運ぶのはあくまでもそれだからな」

「はいっ！」

それまでどこかおどおどとして背中をびくつかせていたラシルとは打って変わって、澁刺とした声が世界樹の根元に澄んだ響きを残

す。不思議とこのラシルの声というのは耳に心地よい。

ぎゅっと握った拳がいかにも世間知らずなお嬢様を連想させるが、まじめに引き結んだ口元を見ればそんなことも言えるはずもなかった。

「改めて、俺はリバー。リバー・D。配達屋なんでも屋を足して二で割ったようなもんだと思ってもらえればいい」

「はい。私はラシル・O・ラシル。孤児院で育ちました」

「へえ、あんたも大変だったんだな」

もちろん質問がないわけではない。旅をするならするで保護者の了解やらなんやら、あとで面倒なことになりそうなことは払しょくしておきたかったし、何よりもこの街を離れることの意味確認は必要だ。だからと言ってここで生まれについて聞いてしまえば、それはどう言いつくろつてもただの興味本位でしかあり得ない。

「聞かないんですね？」

「俺も、親いねえからな」

それは何の答にもなりはしない。ただ、それを打ち明けることでつまらない気負いやそのことに対する遠慮がわずかばかりでも薄められるのも事実だ。

「それに、荷物のことを詮索するのは配達屋としてはルール違反だからな」

立ち上がり、尻をはたとパラパラと枯れた芝生が落ちる。かすかにジーンズが湿っているのは土壌が潤っている証拠だ。

「じゃ、行こうか。俺はめんどくさいのにおっかけられててな。できれば一秒でも早くこの街を脱出したいんだよ」

もちろんこの時点で、何の事を言っているのかはラシルにも想像できたはずだ。

「そうですね」

だからと言うべきか、なのにと言うべきか、ラシルはそれだけ返事をする黙ってリバーの後ろを早足気味に追いかけてくる。

「聞かないんだな」

「私も追われてますから」

迂闊にも、にやりとリバーの口元がつり揚げられてしまう。例によってへたくそ極まりない微笑みに、最初ラシルはそれが笑顔であることに気付くことができずに、いぶかしげな目を向けていた。

世界樹の公園をあとにした二人が向かったのはラシルが暮らしているという孤児院だった。

町のはずれもはずれ、あらゆるサービスが届くぎりぎりといった感じの場所にポツンと立てられているのはおそらく教会か何かだった建物だろう。

鋭角な屋根の上に取り付けられていたはずのモチーフはほとんどが失われて、今となっては屋根との接合部分だけが無残に残されているだけだ。ただ、それでも教会とわかったのはくすんだステンドグラスの色合いだった。

かつてこの街が、いや、この世界が貧困と過酷な環境にあえいだ時期に救いを求める人々の心の支えになったはずの宗教という存在の、なれの果てを見た気がした。

バイクを入り口に止めて待つこと十分。

扉を押しあけて出てきたのはそのコンパクトな体からすれば少し大きめの荷物を抱えたラシルと、修道服に身を包んだ初老の女性が一人。

「それじゃあ、お世話になりました」

ラシルのそんな声に何を言うでもなく胸元で十字を切って祈るしぐさをラシルへと向ける。少しだけ困ったような、けれど少しだけほっとしたような表情を浮かべて女性は答えた。

その表情の理由が、リバーには予想ができる気がした。

孤児院といえば慈善事業の最たるものというイメージがあるだろうが、そんなものは一部の衣食に事欠かない富裕層と、それこそ一部本気の宗教屋だけのものだ。その実はいえ、人の善意だけで

成り立つには過酷すぎる生存競争の場であり、愛や情を超えた何かがなければ存続しえない、奇跡的なバランスで成り立つ一つのコミュニティでしかない

では、そのコミュニティを存続させるために必要なものは間違いなく、数の理論だ。

人の数があればそれだけ分けあわねばならず、かといって一人頭の必要最低限は確固として存在する。

つまりはそういうことだ。

「行きましょう」

いつの間にかサイドカーに乗り込んでいたラシルは、どこかさびしそうに少しだけ微笑む。

一度だけ視線を向けた扉のところで、先ほどの老女がゆっくりと頭を下げていた。

「大変だな」

「ええ。教会の孤児院はいつでも経営難ですから」

「…この町の生まれじゃないのか？」

一拍間をおいたのは、聞くべきかどうかの判断がつかなかったからだ。

「生まれたのはもともとずっと東の小さな、世界樹の飛び地があるだけの寒村です」

世界樹の恵みは大地を伝って時折遠方に飛び地する。はるか東のほうの国ではそれを大地のエネルギーの流れとする教えがあるとさわれているが、その真偽についてはいまだ説明されていないというのが実際のところだ。ただ、わからないにも何もないところに突如としてオアシスが現れ、そこだけが世界樹の周囲と同じように潤いと実りに恵まれる。その周りには得てして小さな集落が作られることがあるのだが、ラシルの生まれもそうした小さな集落の一つだということだった。

「じゃあ、なんで昨日の夜はあんなおっかないのに追われてたんだ？」

「あれは、次の町まで行く当てを探していたところで、その…」

言い淀みながら、おそらくは無意識だろうが肩からぶら下げたカバンを抱きよせている。

「うっかり世界樹の種の話を書き漏らして、おっかけられた、ってところか？」

こつくりとラシルの首が縦に動く。黙ってしまったのは、昨日の男たちに対する恐怖というよりも自分自身の迂闊さに対する後悔からだろうことが引き結ばれた口元から想像できた。

つくづくまじめな子だと、リバーが小さくため息をこぼす。

「ま、そう思いつめなくても、結果オーライってことにしようや。それより、どこ行くのか言われないと俺は勝手に自分の都合でバイク転がすぞ」

いったん街に戻って準備をするか否かを迷ったが、教会が町のはずれにあったのでそのまま街を脱出して街道に出るルートをとることにした。走りながらこの質問はないな、と思いはしたが、

「とりあえずは、どこに行くんですか？ この街では配達の仕事があったとは」

なかなか鋭い質問に苦笑いを浮かべるしかなかったリバーではあるが、さすがに無計画にバイクを転がすほどには馬鹿ではないつもりだった。

結局その日は、出発のときには真上にあつた太陽が真っ赤になつて地平線に引っかかるまでバイクを走らせた。

面倒事は放っておいてもやってくる

手頃な廃屋や大きな木でもあればそこにバイクを止めようと思ったのだが、残念ながらそういったものが全く見当たらず、道から少し外れた場所にある大きな岩がごろごろと転がるあたりで、西日を避けるようにして野宿を決行することにした。それでも直射日光や周囲の目を避けるための遮蔽物があるだけでも大きく環境は異なる。バイクをできるだけ街道から見えない場所に隠すと、リバーはとっとと保存食を引っ張り出して食事と寝床の準備を始める。

一瞬、ラシルがどの程度野宿に耐えられるのか心配にはなったが、そんな心配は無用の長物であるというようにこ、ちらはこちらでてきぱきとシュラフを引っ張り出して寝床の準備を始めていた。

雑貨屋の親父からもらったコンビーフをおかずパンを齧る夕食を終え、ラシルが持っていたポットでお湯を沸かしてコーヒーを入れてくれたときには、もうすっかり世界は夜の色に染まっていた。

日中の熱気とは裏腹に荒れ地の野宿は夜の寒さが敵であることを知っているあたり、ラシルはそれなりに旅慣れていることがうかがえた。

そんなティータイムも半ばに差し掛かり、固形燃料が半分を切ったところでステンレスのコップを置いた。

「ここからだ、もう一つの世界樹の町に二日ほどで行けるはずなんだ。ニドヴェリっていう職人の街なんだけどな。そこなら仕事のあてがあってね」

「そうなんですか。私は実はこのあたりの地理に明るくなくて…」

地理に詳しくない、それは驚くべきことではない。街から街への移動が困難なこの世界にあって、地理の知識などはむしろ役に立たない知識として扱われることのほうが多い。しかも世界地図などという気の利いたものがないのだから、地理というのは個人の経験や他人からの伝聞によってのみ得られる知識というのが常識だ。ただ、

一つリバーにとって引つかかったのは、ラシルが目的をもって旅をしている存在だということだった。

地理知識なしに荒野に出れば間違はなく死ぬ、これもまた一つの常識として世界中に定着している考え方だ。事実、嘘八百の地図をつかまされた揚句に生死の境をさまようほどの迷子になったこともあるほどだ。大人の男がそうなのだから、この小さな体がそれをするというのがどれほど無茶なことかは想像するまでもない。

「なあ、今更聞きなおすのもなんだが、その旅ってのは絶対に続けないといけないのか？」

当然の疑問だと、リバーならずとも思うはずだ。

そこまで過酷な旅を自らに課す理由、それがどうしてもリバーには見つけれない。ときに人が人生をかける理由や目的などというのは、他人にしてみれば驚くほどどうでもいいことはよくある話だ。しかし、それでも「何かに重きを置いているからだ」ということは理解ができるものだ。

ラシルの場合はそれがどうしても見当たらない。

バイクを走らせながら、荒野のど真ん中であることをいいことにリバーが遠慮のない質問を口にする。

「世界樹の種、か？」

しばらくはまっすぐな道が続いているのを確認し、視線の七割をラシルに向ける。

首を縦に振る時に口を一文字に引き絞るのは癖なのか、それともなにがしかの覚悟の表れなのかは分からなかったが、なんとなく決意の固さを見せられたような気がした。

「詳しいことはわからないんですが、私はこの種を持って旅をしなければいけないんです。この種が芽吹くべき場所。必要とされる場所。その時になればわかると言われています。だから」

気が変わって街まで連れ戻される、下手をすればここに置いて行かれるとも思ったのか、ラシルは慌てたようにコップの中身を激しく波立たせて腰を浮かせる。もうちょっとリバーの次の言葉は遅

ければ掴みかかられていたかもしれない。

「勘違いすんなって、今更あんたの依頼を断ろうなんて思っちゃいないって。ただ、さすがに多少は事情を知っておきたいだけだよ、ブツだけじゃなくて依頼主もいっしょに運ぶなんて聞いたことねえからな」

鼻先がぶつかるかと思うほどに身を乗り出したラシルの肩を、ゆっくりと押し戻すようにしながらリバーは慌てて言葉を選ぶ。

「送り先はまだ聞いてないわけだし、俺だって永久にあんたの旅に付き合えるわけじゃない。俺には俺の、あんたにはあんたの旅の目的ってのがあらずだからな」

この話題が今のラシルにとってのアキレス腱であることは承知の上で、あえて言葉を選んだ割にはかすかな罪悪感が思考の隅をよぎる。そして当然のごとくアキレス腱に直接触れられたラシルは言葉もなくゆっくりと腰をおろした。

とりあえずは会話のつかかりとしてはうまくいったものだということにして、さらに続ける。

「終着点が違えば必ず分岐点がある。ま、当たり前の話だけど、俺に出来るのは配達先まで物を届けるだけだからな」

コップの底に残った、少しぬるくなったコーヒーを一気に飲み干す。

カコン、という小気味よいステンレスの音が固形燃料の明かりに照らされた夜の中に消える。

「と、ま、言いたくないこともあるか。すまん、ちよつとルール違反だったな」

ばさりとシュラフを引っ張ってきて器用に体をその中にねじこむと、内側から一気にジッパーを引き上げる。が、胸元までジッパーが来たところで何かを思い出したようにリバーがごそごとシュラフの中で動き、不意に左手だけがによっきりと突きだされる。

その手にある黒い金属の塊が、固形燃料のオレンジ色を反射して鈍く光った。

リボルバー式の拳銃。シリンダーには六発の銃弾が装填されている。

「それ、拳銃ですよ？」

ぬるいコーヒーに口をつけながら、ラシルの視線はシリンダーを握る左手を追いかけている。

「珍しくもないだろ？ 誰だって一つや二つは持つてると思ってたけど、あんたは違うのか？」

そんな呼びかけにも言葉を忘れたように沈黙するが、それは明確な答えでもあるように思えた。

「ふうん、まあこんなもん使わないに越したことはないからな、持たないほうがいいのかもしれん。ただ、俺にはどうしてもこれを持たなきゃならん理由があるからな」

自嘲気味に言うリバーの言葉は紛れもなく、何度となくそれを使ってきたからこそその重みが込められていた。それに、実際に何度となくそうしてきた。

「火、消しといてくれな。さすがに無駄遣いできるほど裕福じゃないからな。それともまだコーヒー飲むのか？」

「いえ、私ももう寝ます」

言った時にはもう火は消され、まっ暗闇の中でガサガサとシュラフのこすれる音が聞こえる。

街であればまだまだ夜はこれから、というような時間だが、太陽と月だけが時間を支配する荒野の中では火を消した時間が夜の帳の下りるときだ。場所によっては虫の声や夜行性の鳥の声が聞こえたりもするのだが、ここまでだっ広い平野では耳鳴り以外に聞こえる音はない。

時が止まったような静寂の中に小さな呼吸音が聞こえてくるが、まだわずかばかり不規則なのは眠りに落ちていない証拠だ。

「それとな、一つだけ言い忘れてた。もしかしたらこれを一番最初に言うべきだったんじゃないかって思ってる話なんだが」

ぴたりとその小さな呼吸がひそめられ、じっとこちらの声を聞い

ている気配がする。

「俺を旅の道連れには選ばないほうがいい」

「どうしてです？」

ぽつりとラシルの声がこぼれる。

「すぐにわかる。その時になれば嫌でもな」

「私と同じですね」

「ああ、お互い、その時にならなきゃわからないことばっかだな」

「そうですね…わっ」

ラシルの声にシュラフを着たままの体をはねさせ、実に器用な動きでリバーが立ち上がる。

「どうした？」

極力落ち着いた口調を意識したが、残念なことに手も足もシュラフに収まったその立ち姿はまるでいも虫が起きあがったようでどこをどう見ても頼りにはなりそうにない。

「すごい、星」

対して、同じような格好で寝転がっているラシルは心を奪われでもしたかのようにじっと空を見つめていた。

「なんだ、ビックリするだろ。星って、見たことないのか？　いままでずっと旅してきたんだろ？」

驚いて損したとでも言いたそうに眉間にしわを寄せながら、リバーが再びいも虫のように地面にはいつくぼる。先ほどいきなり立ち上がった時に生成されたらしいアドレナリンのせいで、いしきがすっかり覚醒してしまっている。寝入りばなではなくてよかった、なんて思いながら再び横になって、ラシルの言う空を見上げる。

「見たことなくって。いつもは野宿にしても絶対に人に見つからないように隠れたり、そうじゃなくても…なかなか気が抜けなくて」

野宿をするような旅の中で油断できる瞬間などそうそうありはしない。もちろん、夜ともなればむしろ周囲に注意を張り巡らし、気を張り詰めていなければならぬ、眠るときでも野生の動物がそうするようにいつでも逃げ出せなくてはならない。それが女の一人旅

ともなれば何をかいわんやだ。

そんな中で空を見上げる余裕などない時間ばかりを積み重ねてきたのだろう。

「大変だな、なかなか」

翌日の行動開始は、日の出とともに目覚めたラシルに叩き起こされたところからとなった。

野宿となれば就寝時間の早さから必然的に朝が早くなってしまうものだが、それでも日の出と同時にというのはリバーの経験上でもトップクラスに分類される。にもかかわらず、リバーが目が覚めた時にはラシルはすでにシュラフを片づけ、簡単な朝食の準備に取り掛かろうとしていた。

湯気を上げながらカタカタとなるポットの音が、眠気の抜けきらない頭には心地よかったが、二度寝ができないほどには意識が覚醒してしまっていた。

朝の冷気に体を震わせながら飲んだホットコーヒーは一日の始まりにふさわしい香ばしさと脳を刺激し、いつもなら味気なく感じるはずのパンが今日は妙に旨く感じられた。

「うまく行けば今日中には街につける。そうなればちゃんとした荷物にもありつけるだろうし、あんたも目的地を見つけられるかもな」そう言ったのは、ラシルの早起きのおかげで、予定よりもずいぶん早い時間の出発ができたからだ。当初はもう一日はかかると想定していたが、ここへきての予想外の短縮だった。

しっかりと暖機を済ませ、ほぼ真横からさす太陽の光に黒く輝く車体にまたがったりバーがアクセルをひねる。

最初の数時間は順調すぎるほどに順調、といえば聞こえはいいが、どこまでも単調で退屈な移動がつづけられた。変わったことといえば、日差しの角度とそれに伴う気温の上昇ぐらいのものだった。

それが一変したのはちょうど太陽が真上に来た正午過ぎのことだった。

乾いた埃っぽい風も、どこまで行っても全く近づかない陽炎も、見あきるほどに見慣れた光景だったが、そのなかにありがたくないものがちらりと見えた。

「あゝあ、さっそくお客さんだ」

悪態をつきはするものの、どこか予想通りとでも言うような、あらかじめ用意されていたような口調だ。

「お客さん？」

周囲をキョロキョロと見渡したラシルの視界のなか、はるか前方に小さな点のように何かが見えた気がした。

「ああ、もしかしたらただの野党かなんかかもしれないけど、たぶんそうじゃない」

「というと？」

答える暇は与えてもらえなかった。

先ほどは点だったものが、当然といえば当然だが進むにつれてはつきりと大きく見えるようになり、それがいかに招かれざる客であるかは五分としないうちにラシルにも確認できた。数人の人影がじつとこちらを見据えているようだった。すぐ隣には、おそらくそいつらの乗ってきたらしいライトバンが停められている。

ただ、それでもリバーは全く意に介さないかのように速度を落とすことなくバイクを走らせ続ける。

ほどなくして、四人の男の表情までが確認できる距離になったところで、ようやくリバーが速度を落としてじつと男たちを睨みつけるようにして視線を向ける。

「よう、色男」

おそらくは四人の中ではリーダー格と思しき、荒くれ者と無法者を足して二で割ったような風貌の男が、ぼさぼさの顎ひげをいじりながら値踏みするような視線をからみつかせてくる。周囲では言葉こそないものの、その他三人のにやにやと笑うような表情が例外なくリバーに向けられている。

「まあ確かに色男だとは思うけど、今更改めて何の用だよ？」

「ま、わかりやすく言うのだな」

それまでは小馬鹿にしたようなにやにや笑いだったのが、一瞬にして男たちに獰猛なけだものの顔が浮かぶ。

「死んでくれや」

言い終わったのかどうかはわからない。ただ、なんとなくそんな意味のことを言われたことだけがわかった時にはリバーはアクセルを全開にして、吹っ飛ばされるような加速を体に浴びていた。

背後からは数え切れないほどの銃声と、葉莢の落ちる乾いた音が聞こえていた。何が起きているかなどは想像する必要もない。

「むだむだむだ、鉛玉から逃げられるわけなんてないだろ。黙って賞金に代わりやがれ」

威勢のいい掛け声はどこからどう聞いても安っぽい悪党丸出しだった。が、それでも確実にこちらをとらえつつある弾丸が、後輪のすぐ近くに着弾する音にはさすがに背筋が冷えるのを抑えられない。

右に左に車体を振り回して、何とか相手の射線上に一秒と留まらないようにするのだが、何かを察知していたラシルがサイドカーにしがみつき、身をかがめてくれていたのが救いだった。これでラシルが無防備で会った日には確実に鉛玉の餌食になっていたはずだ。

「賞金って、もしかして」

頭を下げてヘルメットを抱えるようにしているラシルがぐもった声で言うが、もちろん思いきり横向きのGに振り回されたせいで舌をかまないようにするのがやっとといった感じだ。

「そゆこと。結構な賞金がかかってるらしくてな、ああいう手合いの相手をしながらの配達仕事ってわけだ」

言いながら、こちらは器用にハンドルを切り、サイドカーを振り回す遠心力で車体をスライドさせると、一瞬前まで走行していた位置が爆撃されたかのように砂埃を上げてはじけ飛んだ。

見ると、四人の中で一番大柄な男がガトリングガンを脇に抱えて何もかもを薙ぎ払うかのように銃弾をぶちまけていた。

「うへっ、あんなもんからはさすがに逃げ切らん」

「逃げ切らないって、じゃあどうするんです？」

意外にもパニックになった様子はないが、それでもこの状況に思考が付いてきていないらしく、慌てたような口調でラシルが少しだけ頭をあげる。

「こうするしかないかな」

しばらく横滑りしていた車体にトラクションをかけ、再び進行方向を変えると先ほどと同じようにガトリングガンの一斉射が浴びせられる。

唐突に加速感が薄れ、逆に減速のGが体をすりぬける。

リバーの右手がアクセルから離され、あろうことかバイクは的になることを選択したように目に見えて速度を落とす。

ドンッ

音は一度だけだった気がしたが、どうやらそれは自分の勘違いらしいことをすぐにラシルは知る。

進行方向左手、男たちのライトバンのあたりで派手な爆発が巻き起こり、次いで慌てたように四人の男がクモの子を散らしたように四方に散っているのが見えた。ただし、一番大柄の、ガトリングガンを抱えた男だけはほかの三人に比べて明らかに鈍い動きで這うようにして移動している。見ると、左手で右手をかばうようにしている。

そのすぐそばに落ちている、鉄くずの塊。それがガトリングガンのなれの果てであることは容易に想像できたが、何が起こったのかはリバーの右手に握られたリボルバー式の拳銃を見てもなかなか想像ができなかった。

「ふう、とりあえずはこれでいっちょあがり…だといいんだけどなあ」

器用に片手でシリンダーをずらして銃身を上に向けると、乾いた金属音を響かせて空の葉莢が地面に落ちる。どうやらあの一瞬で六発すべてを打ちつくし、四人の男の得物をすべて撃ち抜いていたらしい。

「でも多分そんなわけにはいかないだろうし。弾だってただじゃないのになあ」

ぶつぶつとため息交じりの文句をこぼしながら、どこから引っ張り出したのかシリンダーに弾を押し込んでゆく。

「こんのやろく、よくもやりやがったな！ どうせてめえはデッドオアアライブだ、ぶっ殺してやる！」

男の絶叫がこだまする。

ライトバンの扉が吹っ飛ぶように引きあけられ、中からどう考えても正気の沙汰とは思えない代物が引きずり出される。

対戦車ロケット砲。おそらくは携帯用のMATか何かだろうが、もちろんバイク一台ぐらいを木っ端みじんにするだけならお釣りのほうが多く出るはずだ。

「おお、何かすげえのが出てきた」

弾の装填も忘れてリバーの口が半開きになる。ラシルもさすがにあれが具体的にどの程度のものかは知らなくても、こういった代物なのかを知らないわけではない。

「あれは、逃げたほうが」

「いや、ああいう手合いはよつく言って聞かせないとな、何度でも同じことを繰り返す。それに」

ガチャリと音を立ててシリンダーを戻し、大声でがなりたてている男に視線を固定する。

「はじけてくたばれやー！」

ロケット砲独特の、ゆったりとした初速で砲弾が打ち出されると、白煙が尾を引き始める。

「さすがにあれは逃げてても間に合わない」

「じゃあ！」

いまにも掴みかかりそうなのをこらえるかのようにサイドカーから身を乗り出すラシルの表情に、リバーが小さくほほ笑む。

「そんな顔もできるんだな。やっぱあの朝の頑固さは嘘じゃなかったな」

「は？」

脈絡のない一言に拍子抜けしたラシルをよそに、リバーは銃を構える。

「耳塞いで伏せてろ」

がきんっ。

トリガーを引く動作とほぼ同時にロケットの先端が火花を上げる。二度、三度と上がる火花に何をしようとしているのかはわかったが、「ばーか、いくらマグナム弾でも鉄板撃ち抜くなんて不可能だ、あきらめて塵になりな！」

勝ち誇ったように男が叫んでいるが、リバーは全く相手をする気がないらしい。再びトリガーを引く。四度目の金属音と火花。

「はい、おしまい」

トリガーを引いた直後、すさまじい風と地響きが巻き起こった。体を芯から揺さぶるような衝撃波に、バイクがひっくり返るんじゃないかとさえ思ってしまったがなんとかそれだけは免れる。ただ、それでも引きずられるように数十センチ移動させられたのは足元を伝わる不愉快な摩擦感からわかった。ガンガンと、何かの破片か石ころが車体にぶつかる音はまるで銃弾の雨の中に放り込まれてもしたような気分になる。

こうこうと、耳の奥に音の塊を突っ込まれたような不快感が、しばらくは神経を握っていたが、それも時間とともに耳鳴り程度に収まり、巻き上げられた砂埃が少しずつ風に卷かれて晴れてゆく。「いくらマグナム弾でも鉄板をぶち抜けない。ただ、いくら鉄板でも同じ場所に五発もマグナム弾を食らえば何とかできる」

器用に、バイクに逆向きにまたがったりバーが口元を引き上げて皮肉っぽく笑っている。

「というわけで」

シンダーに残っているのはあと一発。慎重に肩の軸線と銃身を合わせ、

「逃げるぞ」

カチンというハンマーの音が妙にきれいに響いたその一発は見事
としか言いようのない命中精度でライトバンのタンクに突き刺さり、
先ほどのロケット砲の一撃を彷彿とさせる爆音と、ガソリン特有の
赤い炎と黒い煙が巻き起こった。

その周りでは何かを叫びながら四人の男たちが慌てふためいてい
るのが見えたが、リバーはそんなものにはもう興味がないとでも言
うようにハンドルを握っていた。

走り始め独特の振動交じりの加速感と、徐々に強くなる風を受け
ながら、

「お、今度は笑った」

リバーのその言葉に一瞬なことなのかわからなかったラシルだ
が、サイドミラーをひんまげて自分に向けられてようやくその言葉
の意味を知った。

何とも不器用で、へたくそで、人に見られればひきつっているの
か泣きそうなのかといわれてしまっても仕方がないような表情だっ
た。けれど、リバーはそれを「笑っている」と言った。自分でもそ
う思った。

そういうリバーの表情も、自分のものに負けず劣らず不器用でへ
たくそだったからだ。

「変な人」

「そうか？ 笑い方がへたくそなのはなかなか治らないけど、変っ
てことはないだろう？」

サイドミラーを器用に左手で戻し、腰のベルトにつっこんだ銃の
位置もついでといった感じで直しながらリバーは練習するように口
の端をむにむにと動かしてる。

「いえ、そっちもそうなんですけど、私が言いたいののはあの賞金稼
ぎのことで」

そっち「も」というのが気にはなったが、とりあえずリバーはラ
シルの言葉に耳を傾けることにした。

「どうして、その」

「殺さないのか、ってことか？」

首を縦に振る。どうやらラシルは肯定のときには口よりも首を動かして返事をする癖があるらしい。

「私も詳しくはないけれど、ああいうときって大抵は命の奪い合いになるんじゃないんですか？」

口を開きかけたリバーが不意に、言葉を選ぶように黙りこくる。そして、

「俺もそう思う」

何かを言いたそうなラシルを制するように視線を向け、小さく首を縦に振る。

「そう思うけど、何も奪い合いだからって奪わなきゃいかんことはないだろとも、思う」

不思議な理論だった。言っている自分がこの言葉の真偽について疑ってしまうような内容だったが、それが一番しっくりくるのだから仕方がない、とでも言うようにリバーは言葉をつづけた。

「奪わずに済むならそれも良し、奪わなければならないならそれもやむなし。どっちが正しいのかは俺には分からんさ。でもな、正しかろうと正しくなろうと、俺にはやらなきゃならんことがある。それが答えさ」

目的のためなら手段は選ばないとは言うが、これもその一つなのかもしれない。

目的を達成するための手段、過程にはそれこそ毛ほどの興味も抱いていない。むしろそこに他者の介在をさえ疎ましく思い、ただ排除するのみ、そんな極端なまでの目的意識。

いったい何をしてこのリバーという男をそうさせているのか、ラシルの中に好奇心に似た興味がわいたのは嘘ではない。ただ、そこに踏み込むことへの躊躇いはそれよりもはるかに大きい。

「な、言ったろ？ 旅の道連れにするには不向きかも知れない、って」

「賞金首だからですか？」

「そう。しかも結構な額だ。今みたいなことは日常的に発生する。へたすりゃ夜討ち朝狩りも覚悟しなきゃいけない」

「けど、あなたは戦うんでしょう？」

「たまには逃げるけどね」

「どこに向かってですか？」

賞金首の情報は国中に広がる。とはいえ、その賞金の支払いが有効でない範囲になれば手配書など鼻をかむ紙にも劣る。さらに言うなら、賞金首を追うのは賞金稼ぎぐらいのもので、賞金首を捕まえてひと山当てようとする人間などというのは命知らずだと鼻で笑われる。

「つつましく暮らして暮らせないことはないのでは？　わ」

リバーの手がカーキグリーンのヘルメットにかかり、乱暴な手つきで前後に頭をゆすられる。ついには鼻の頭までが隠れるまでヘルメットをずらされたラシルは慌てて頭を振る。

「あんたと一緒だよ。それでも行かなきゃならん場所があって、やらなきゃならんことがあるんだよ。理不尽だけどな」

遅れてきたやつら

ライトバンの残骸がゴムの燃える不愉快なおいと鉄の焦げる血のような臭いをあげてまだくすぶっている。

「おい、なんだありゃ？」

「俺に聞くな」

顎髭の男が忌々しげに煙草をくわえ、燻っている燃えカスで火をつける。

「何があった？」

止血した個所がまだが痛むのか、一番大柄な男が左手で右腕を抱えるようにしながらうなだれている。

「俺に聞くな」

とはいえ、何があったのかを理解できたのは髭の男一人だろう。

ほかの三人は完全に戦意を喪失している。まあ、そうでなくとも得物も足もここまで完全におしゃかにされては今更何ができるわけでもない。

「化け物め」

化け物としか言いようがなかった。

初速の遅さを差し引いたとしても、移動するものに正確に着弾させるのは並大抵の技量では不可能だ。しかもそれが宙を飛ぶものであればなおのこと。にもかかわらずあの男は、たかだか六インチの銃身しかない拳銃一丁で、あろうことか全く同じ場所に五発の弾丸を着弾させた。連続で。おそらくミリ単位のずれもなかったことだろう。徹甲弾四発に徹甲焼榴弾一発といったところだろうか。

ぶちっと音を立てて煙草がかみちぎられ、フィルターが吐き捨てられる。

「廃業、だな」

ポケットから引っ張り出した、しわだらけの古い手配書が広げられる。

紙の色合いやふちがぼろぼろになっているのは扱いの乱雑さだけではなく、それなりの時間が経っているのを感じさせる。

最後に一度だけ、何かを確認するようにじっと見つめるが、すぐに手を離す。まだくすぶっている残骸の中に舞い落ちたそれは瞬間に燃え落ちて風に舞ってゆく。

あまりにも古ぼけた人相書の中で不機嫌そうにゆがめられた、リバー・Dの仏頂面は少し悪意を持って描かれたものであるのはいたしかたないのかもしれない。

「何だ、それ？」

「ん？」

「今、何か鼻歌あ歌ってなかったか？」

「ええ」

「なんて歌だ？」

「知らないの」

「そっか」

「知らないけれど、好きな歌なんです」

「へえ」

「気に障りました？」

「続けてくれ」

少しだけはにかむように微笑んだラシルは何事もなかったように目を閉じ、歌う。

素直じゃないな、我ながら。そんなことを思う。

鼻歌に包まれて、バイクはいつもより少しだけのんびりしたペースで荒野を走る。

「なあ姉ちゃん」

「うるさいわね、何よロト」

「まだ追っかけるのかよ？」

「あったり前でしょ？ あんたは父さんや母さんの仇を打ちたくない

いの？」

小さな体のでっぺんまで怒りをみなぎらせているかのように、不機嫌オーラを振りまいてずんずん歩くセフィは、唐突に足を止めたかと思うと頭二つほど身長の違い男の胸倉に思いきり手を伸ばしてつかみかかる。

精一杯背伸びをして思いきり手を伸ばしてようやく届いたのは、実は男のほうが少しだけ体がかめたからだというのは絶対に秘密にしなければならない。さもなくば、余計な怒りまで買ってしまうことになるのだから。かといって、手が届かなければ届かないで八つ当たり気味に機嫌を損ねるのだから厄介なものである。

少女の名前はセフィ・カーバル。男の名はセフィの弟でロト・カーバル。

「あの男をぶつちめて賞金を手に入れなきゃ、父さんも母さんも浮かばれないし街も救えない。それに何より、私たちをこんな体にしたあいつを絶対に許せな」

「わかった、わかったから姉ちゃん、とりあえずこんな大勢の人の前で」

掴みかかったのと同じ唐突さでロトから手を離れたセフィは、荒い鼻息を隠そうともせずに腕組みをすると、よろける弟に向かって鋭い眼光を向ける。というか、セフィのそれは街の不良少年がメンチを切っているのとさして変わらないのだが。

「図体ばっかでかくて頼りないんだから。ほら、サッサとしないとあの卑怯者が逃げちゃうでしょ。何としても追っかけないといけないんだからね」

「でも、ほんとに来るのかな？　姉さんが絶対だって言うからニドヴェリまで来たけど、あれからもう三日も経ってるし、下手したら全然違う街に行ってる」

たしかに、セフィの言うとおり図体の割には弱気でおどおどした言動ではあるが、姉と弟という関係を鑑みればむしろ強気な姉に對してはこのぐらいでバランスがとれているのかもしれない。それ

が証拠に、そんな弟を牽引するようにセフィは小さな手でロトの尻を思いつきりはたく。

パアン、という小気味の良い音が通りに響き、近くにいた数人の通行人が何事かと振り返るほどだ。

「あいつが配達屋をしてるのは知ってるわよね？」

「うん」

おずおずと答えるロトの言葉を聞いているのかいないのか、セフィは満足げに続ける。

「なのにあいつは配達の仕事を探す間もなく逃げ出した」

「たぶん」

「だったら、とりあえず手近な街まで逃げつつ次の仕事を探そうと考えるはず。とすれば、このニドヴェリは格好の場所なわけ。短距離短時間で到着できるし、何よりものが集まり商品が出てゆく職人の街だからね」

最後のあたりで力強くガッツポーズを作って語るセフィの言葉だが、残念なことにロトの反応はその半分も力が入らないものだった。「って言っていつも空振りするよね。今回も見つけたのはたまたまだったし。しかも、水も食料もなくなって、やむなく立ち寄っただけの街って」

「行くわよ！」

どうやら、自分への反論が自動的に却下されるタイプの思考回路であるらしく、セフィはくるりと踵を返すと、あっという間にずんずん歩いて行ってしまふ。

「まあ、いいけどね。時間ならたっぷりあるわけだし」

言葉ほどには落胆した様子もなく、ロトもゆったりとした足取りでセフィのおあとを追って通りを歩いていく。

世界樹の見下ろす大通りは人の数も活気もやはり祭りのようで、うっかりすると人の波にのまれて進みたい方向に進めないこともあるほどだ。が、のんびりとした歩調のロトはそれを感じさせない器用さで人波をかき分け、難なくセフィの背中に追いつく。

「とりあえずは聞き込みからよ」

たくましい姉の背中に向けられるのは、どこか穏やかで信頼のこもった表情。

「でもさ、姉さん」

「なによ？」

「たぶん聞き込みなんてしなくてもいいんじゃないかな？」

「なんでよ？」

「だってほら」

人通りも道幅も街一番の目抜き通り。そこは、近代建築こそ数えるほどだが、それを補って余りある露店と古い店舗とが互いに肩を寄せ合うようにしてひしめき合っている。もちろんそれは、加工品を作る職人たちがそれぞれの商品売りさばくために、奪い合うようにして場所をとった結果なのだが、今だけはそのごった煮のような街の中に、ぽっかりと空間が開けている。

まるでそこだけが台風目のように、不気味なほどに静かに、線を引いたように人垣が半球形に途切れている。

「つてええええ！ てんめえ、やりやがったな絶対にゆるさねえ！」

どうして悪党というのはこうもセリフが凡百で機微がないのだろうか、というほどに実に典型的でわかりやすい悪党の絶叫。そもそも事の次第も顛末もわからないのにこの叫び声をあげた時点で悪党とわかってしまうのが実に悲しい。

セフィは小柄な体を駆使して、ロトは大柄な体躯に似合わない器用な動きで人垣をすりぬけて最前列に何食わぬ顔で肩を並べる。

いた。

「ね、言ったでしょ。あいつは探さなくても、絶対に騒動を起こすし絶対に騒動があいつに寄ってくるから」

一度見たら忘れられない、逆立てられた黒髪、馬鹿みたいに頑丈なブーツ、影がその場に立ち上がったかのような真っ黒な外套に包まれた長身の男。

リバー・D。

「うっふふふふふ」

肩をわななかせるように震わせながら、セフィが顔を下げる。ぱさりと落ちた前髪で表情は見えないが、こういうときのセフィは実に壮絶な笑みを浮かべているのが定番だった。

「あーっはっはっはっは！ 見つけたー！」

目の前ではリバーに対峙する男が物騒なものを引っ張り出して今まさに某かの口上を垂れようとしていたところだったが、ものの見事に出鼻をくじかれて酸欠の金魚のようにパクパクと口だけを動かしている。

すでに物見遊山に盛り上がっていた見物人はこっちのほうが見ものだとばかりに、瞬く間に円の中心はセフィとリバーに移される。

「おい、きけ、こら！ このピンを抜くだけでここいらいたいのが吹っ飛ぶ、っておい、ちよつと！」

男の声はあつという間に周囲の歓声にのまれ、その他大勢へととなり下がる。そのあととも何かを叫んではいたようだが、もちろんセフィの耳には入らない。

「どんだけ逃げようったってあたしらは地の果てまで必ず追っかけてやるんだからね！」

例の、音がするような勢いでつきたてられた人差し指は、この瞬間だけは方位磁石でさえここを指しているんじゃないかというほどに定規で測ったようにまっすぐとリバーを指す。

「覚悟なさい！」

腰に手を当て、自信満々の笑みを浮かべてやる。

何故こういつもいつも、そんな疑問をさしはさまなくなったのはいつごろからだろうか。

ラシルの体力面が読めなかったことと、襲撃されやすい夕刻を避けるためとでニドヴェリへの到着を一日遅らせた。これ自体は決して間違っただけではなかったと思う。

宿も順調に決まったし、以前何度か仕事の依頼があった職人がま

だ廃業していいことも早々に確認できた。あとは食事をしてうまくすれば夕方には積み荷が見つかるかもしれない。そう思って入った定食屋で回鍋肉をつつこうとした矢先のことだ。

「動くな！」

突入してきたのは一人の若い警官で、有無をも言わせないといった表情で拳銃を構えていたのを見た時には絶対に自分を追いかける何かだと思った。とっさに逃げるか回鍋肉を平らげるかで迷ったその瞬間に、自分よりも少し、ほんの少しだけ後ろの席から罵声と銃声が上がった。

「くそっ！おちおち飯も食わせてくれねえのかよ！」

警官のすぐ隣で飲んだくれていた酔っぱらいの酒瓶がはじけ飛び、何枚かの窓ガラスが木っ端みじんに砕け散った。

埃っぽい店内に怒号と悲鳴と塵と警官の叫びが充満した。

「貴様、抵抗すんなら鉛玉ぶちこむぞ」

「おおやってみろや、てめえが一発ぶちこむ間に俺はてめえの体重を三割増やしてやるよ！」

その言葉が冗談ではないことを示すかのように拳銃を握っていないほうの手は、マシンガンらしき銃器を取り出して確実に警官をロクオンしている。

あとから聞いた話だと、罪状は強盗殺人というこの時代にはありふれ過ぎて話題にもならないようなもので、たまたま逃走中にこの街に立ち寄ったとのことだったが、問題は警官が血気盛んな若者だということだ。

打てば響くといえばまさにこのことだが、結局はただのガキのけんかだった。

「てめえらみてえな悪党がな、この街にのさばってんのが我慢ならねえんだよ」

「だったらてめえが出て行きな。その分俺が秩序と財産を守ってやるよ。全部おれのものにしてだけどな」

パラパラパラ

ばらまかれる弾丸が舐めるように店内を一掃し、テーブルやら皿が破片に姿を変えて床にばらまかれる。

「器物損壊も追加だ。臭い飯食わせてやるから覚悟しろよ！」

「おうおう、楽しみだ」

ばらばらばらばら

いい加減、一言しゃべるたびにトリガーを引くのはやめてほしい。という周囲の客らの視線を無視するように警官が拳銃を構える。かなしいかな、こういうときの住民の反応というのは応援よりも、余計なことをしゃがってという疎ましさをこめた視線が圧倒的に多い。厨房から顔をのぞかせている店主に至っては、どうでもいいから早く帰れという視線を警官に向けている。

「後悔するなよ！」

ばんっ

警官の指がトリガーを引く。

先にも述べたとおり、この事件で最大の問題は警官が血氣盛んで経験不足で肩に力の入った若者であったこと。

「うるさいなあ」

ラシルが不機嫌そうにつぶやきながら厨房を気にしている。銃弾が飛び交う中で料理のほうが気になるというのはかなりの肝を持っているのかもしれない。

当たり前のように銃弾はそれ、はるか手前に着弾し、回鍋肉がまだ山盛りに入っている皿が回鍋肉ごと派手に吹っ飛んだ。ラシルは二口三口食べていたようだが、リバーはまだ一口目を箸でつまみ上げたところだった。

パクリと最初で最後の回鍋肉を口に放り込み咀嚼する。本格的なそれはキャベツではなくちゃんとソンミョウを使って作られており、豚肉もさすがは世界樹の街にふさわしく甘みたっぷりのジューシーなものだ。しかも豆板醤の利き具合が絶妙な一品だった。

もぐもぐもぐ、ごっくん。

握った箸がへし折れるのと床を蹴りつけるようにして立ちあがっ

たのは同時だった。と思っているのはリバーだけで本当はもう一つ、手近なテーブルに置いてあった紹興酒の瓶を警官に向かって投げつけるという暴挙までも同時に実行していたのはラシルのみならず全観客が口をそろえて証言している。

「つざけんなこの野郎、俺の回鍋肉返せ！ てめえもだ！」

幸か不幸か、手の届く範囲にいた犯人はトリガーを引く間もなく首根っこをひっ捕まえられて、

「俺の近くでもめごと起こすんじゃない！」

その場にいたりバーとラシルを除く全員の眼が、文字通り点になる。

人が宙を舞う。比喻表現ではなく、放物線を描いて数メートルの距離を飛び、そして地上に存在するすべての物体の例にもれず、落ちる。殺しきれないベクトルを、地面で体を削って殺し、顔も衣服もボロボロにして止まったところはもう定食屋の入り口を飛び出してしっかりと通りに出て数歩は歩いたであろうところだ。

「回鍋肉もう一つ」

ラシルが淡々と追加の回鍋肉を注文するも、怒りの収まらないリバーは、目の前にあるものすべてを蹴散らすとでも言うような足取りで店を飛び出すとぎろりと周囲の野次馬を一瞥する。

が、さすがに人も多ければけんかも多いだろうこの街には肝の据わった野次馬も多いらしく、何かを期待するかのようにさっとリバーを中心とした半円形のリングを作りだした。

「なんで平和に飯が食えねんだ！ 食わせてくれねえんだ！」

そんな魂の叫びにも説得力がないとは口にしないのがギャラリーとしての不文律だ。

「つてええええ！ てんめえ、やりやがったな絶対にゆるさねえ！」
擦り傷だらけの顔をさすりながら自慢のマシガンを手片手に立ち上がったかと思うと、自分の血のついた手を唐突にズボンの中に突っ込んだ。

取り出されるのは、形も大きさもちょうどレモンのような黒い鉄

の塊が一つ。

いかにもイっちゃった目はもう後先など考えてはいないやつの典型的な飛び方をしていた。

「ちよっと、まずったか」

ほかのだれにも聞こえないように口の中だけで言葉を漏らしたりバーのこめかみに、嫌な感じのする冷たい汗が伝う。余計なことかもしれないが、こんな事態でも注文された回鍋肉を作る店主とそれを待つラシルというのは、ある種のトリックアートのように見えてしまう。

ため息を漏らさなくてはならないと思い、ため息用の息をゆっくりと人知れず鼻から吸い込んでいるところ、

「あーっはっはっはっはっは！ 見ーつけたー！」

もちろん息は止まったし冷や汗も止まった。その代わり、しつかりと違うため息が出た。

言葉にすればたぶん「うそだろ？」だったはずだ。それほどに、信じられなかったのではない、嘘であってほしかったのだ。

この時点ですでに野次馬の動きは当事者のだれよりも早く、瞬きほどの間にリバーとセフィを取り囲む即席人垣リングが構成されていた。

手榴弾男も何かを叫んでいたようだがもちろん耳になど届くはずがない。

「どんだけ逃げようったってあたしらは地の果てまで必ず追っかけてってやるんだからね！」

こちらに突き立てられた指は、いつも思うのだがなぜにあんなにも自信に充ち溢れているのだろうか。

「しっっこいなあ、お前らも。せっかくしばらくは静かな旅だったのに、また鬼ごっこ始めるのかよ」

「当たり前だ！ お前さえいなければあたしらの街も父さんも母さんも何もかもが幸せなままでいられたんだ」

「だからあれは」

違う。そう言いきれないのは百も承知だ。事故で片づけられるものであるはずもなければ、あれを事故だなどとは言わせない。あれは、

「事故だなんて言わせない、絶対に」
人災だ。

「ま、とりあえず飯でも食ってかねえか？　この回鍋肉うまいぞ」
「ふっぎけるなよ、あたしたちは…」
ぐううう…

誰の耳にも届く、わかりやすすぎる腹の虫の鳴き声。

「ねえさん、ここはご飯にしたほうがいいんじゃない？　ぼくらここ三日ロクなもの食べてないしさ」

思いきり振りかえり、何かを言おうとしているのだが言葉にならない様子は後頭部を見ているだけでもしっかりと伝わる。たぶんさまざまな葛藤があるのだろう。が、遠慮がちに、伏し目がちに振り返るセフィの眼には、きっちり「負けました」と書いてある。

「食べたらしっかり決着つけるんだからね」

悔しそうに握りしめられたげんこつだけが小さな体に込められた最後の抵抗だったのだろう。

だからって許すわけじゃない、と。

決して食欲に屈したわけではない、と。

かくして、尻切れトンボになったエンターテイメントに観客はやれやれといった具合で三々五々おのおのの日常に帰り、殺気に充ち満ちたテーブルが一つ出来上がる。

ちなみに、人のいなくなった通りに一人ポツンと残された手榴弾男はいえ、何を言う間もなくリバーの拳銃一発でベルトのバックルを吹っ飛ばされ、実力差を悟ってすぐと逃げ出した。ズボンの前を抑えていたのは、ずり落ちるからだけではなくちよつとちびっていたからだ、あえてリバーは言わずにおいてやった。

というわけで、運ばれてきた回鍋肉や麻婆豆腐を奪い合うように分け合い、思った以上の辛さに悶絶するセフィをさておいて、辛い

ものが得意らしいロトがでかい図体をかがめて切りだした。

「ここらで、終わりにしようよ」

静かな口調には、張りのある姉とは違う種類の決意が込められている。炎と氷、同じ決意が違う形をとった、良くも悪くもでこぼこな兄弟だが、ピツタリなコンビでもあるようだ。

「何を？」

麻婆豆腐の真っ赤なたれをレンジですくいながら口に運ぶラシルを見て感心する。なんだかんだ言いながらこの味付けは激辛に分類される。特に麻婆豆腐に顕著なそれは、セフィを見ればわかるとおり、並みの辛党程度なら口が痛くなるほどだ。

「こんな不毛な追いかっこ、疲れるでしょう？」

「だったら追わなければいい。俺はお前らに追われようと追われまいと、目的がある限りは立ち止まらないんだからな」

「それはこちらもおなじだよ。あんたが逃げなければ僕らはもう追わなくていいんだ」

「それで、どうする？」

「え？」

いかにも優男といった顔をあげ、開いているのかいないのかわからないほどに細い眼でじっとリバーを見つめる。瞳に映るリバーは杏仁豆腐を二つ注文している。

「俺を捕まえて、殺すのかどっかに突き出すのかは知らんけど、そのあとはどうするつもりだ？」

少しだけ間をあけて、じっとロトの瞳を覗き込む。その視界にとらえられたセフィは、何か一つでも間違えばすぐにでもかみつくとも言うような雰囲気だ。

「『その体』で」

テーブルを殴りつける派手な音を立ててセフィが立ち上がる。

「しばらくはこの街にいるはずだ。といっても、数日だろうけどな」
そんなリバーの言葉も無視して、手近な椅子を蹴散らしながらセフィが店を出てゆく。あとを追うロトの視線は最後までリバーを睨

みつめて外れることはなかった。

「言ったでしょ、あたしたちから逃げられるなんて思わないこと。絶対に、絶対にお前だけは許さない」

殴りつけるように開かれた扉がいきいきとなりながら揺れる。

杏仁豆腐の甘さが口いっぱいに広がり、ふっと肩の力が抜ける。

「食べてから行けばよかったのにな」

しっかりと麻婆豆腐を平らげ、杏仁豆腐もすでに半分以上をやったラシルがスプーンを置き、ぺろりと舌舐めずりをする。

「変な人たち」

「そう、思うだろう？」

実は甘党ではないリバーにとっては、この杏仁豆腐は甘すぎた。二口目あたりでもう口の中が満足のサインを送り始めた。対して、ラシルは甘いものは辛いもの以上に行ける口らしく、とっとと自分のを平らげてすでにリバーの手元をロックオンしている。

差し出された杏仁豆腐にスプーンを突き刺しながら言う。

「あなたも含めて、です」

苦笑いしか出ない。

やっぱり狙われる女

「ちっ、ついてねえな」

後ろ手に扉を閉めながら悪態交じりに顔をしかめる。

「どうしたの？」

おとなしく表の通りでサイドカーに収まっているラシルが見かねて口を開いた。さすがにここまで露骨に不機嫌になられては、理由の一つも聞いてやらなければ、とても思ったのかもしれない。

「コンボイが通った後だってんだよ。タイミング悪いったらねえな」
「そうなんですか」

この砂漠と荒れ地が大半を占める世界で都市間の物資輸送をする手段というのは限られている。鉄道が敷かれて人も物資も安全かつ高速での移動が可能になってはいる場所もあるにはあるが、そんなものはごくごく限られた一部地域だけの話だ。

いまだに物資の輸送の主役は個人による配達業と『コンボイ』と呼ばれる大規模輸送陸船団だ。とりわけ、大量の物資を比較的安全に運ぶ手段としては、少々値が張るものの定期的に街を回る護衛付きのコンボイというのが常識だ。個人の宅配に頼むのはよほど急ぎか安くあげたいかというわけだ。

「くそっ、たった二日の差でコンボイが来てやがるとは、予想外だった」

定期ルートは頭に入っている。さすがにコンボイを相手に競争をしたって値段以外のありとあらゆる面で勝ち目はない。いくらリバーが安全性に自信を持っているとはいえ、世間の認識というのはあくまでも「個人」対「コンボイ」だ。よほどの得意先でもない限り、この常識は覆せない。

「コンボイって、そんな不定期なもの何ですか？」

「いや、普通は決まったルートを定期的に回るだけで、ほとんど例外はないはずなんだ。それが今回に限って、この街の世界樹管理を

してる偉いさんがどうしてもって呼びこんだんだとよ。ったく、余計なことしやがって。今日はあきらめなきゃ仕方ねえか」

職人たちの多いこの街ではそれぞれの商工会が順当に世界樹の利益にあずかれるようにと、各商会の代表が世界樹の管理を任されているらしい。しかし、それでも抜け駆けをしようとする輩が後を絶たなかったため、当時最も有力でどの商会ともつながりのなかった没落貴族が世襲でそれぞれの代表に対しての権限を有するようになり、相互管理という形で利潤の独占を防ぎ、今でもその形が踏襲されているということだ。

「けど、今では実質の最高権力者は世襲でその権力を引き継いでいく貴族様ってことになっちゃったんだけどな。それでもこの街が正常に機能しているのは貴族様の、アヴァルタってのが今の当主らしいんだけどな、その健全な管理のおかげなんだとさ」

さすがにもう空には二つの月が真っ白に輝いており、先ほどまで微かに紫色をしていた西の空も黒一色に染め抜かれていた。いくら得意先でもこの時間から回るわけにはいかず、聞きかじってきたばかりの話をラシルに聞かせながら宿へと足を向けた。

興味深そうにラシルが頷く。

「本当に、街が違えば世界樹の管理方法も全く違うんですね」

「ああ。中にはいまだに利益を争って街が戦争まがいの抗争をやっているところもあるらしいからな。それでも、俺は荷物さえ見つければ何でもいいんだけどな」

「荷物、見つかるといいですね」

「死活問題だからな。ああ、あとそれと、別に「です」とか「ます」とかつけなくてもいいぞ。なんかそういう喋り方って息が詰まるだろ？」

「え、でも」

「無理強いするつもりはないけどな、肩ひじ張ってても疲れるだけだからな。俺にとっちゃあんたはただの荷物だ」

からかうように笑いながらバイクのエンジンをかけ、ゆっくりと

通りに滑り出す。

しかし、トラシルは思う。なぜこの男はこうも抵抗なく自分を受け入れるのだろうか。依頼したのは確かに自分だが、それもただの配達屋として受けてくれたものと思っていた。なのに、先ほどのような態度をとったかと思えば食事も自分の分を用意してくれる。

「あの」

「んあ？」

世界樹の街らしく、通り沿いに街灯のある街並みをのんびりと駆け抜けながらリバーが少し間の抜けたような返事をする。

これも不思議な話だが、賞金首に相対した時にうすら寒くなるような恐ろしさを垣間見せるかと思えば、こうした力の限り油断しきった表情も見せる。

「どうして、私にこんな風にしてくれるんですか？」

「こんな風に、とは？」

相変わらずスピードを落とすでもなく、ぼんやりと運転しながらリバーが首をかしげている。さも、自分が特別なことはしていないとでも言うかのような風だ。

「確かに、どこかに連れて行ってくれるように頼みましたし、利害関係もあるとは思うんですけど」

「ほらー！」

アクセルと握っている右手を離してまで指さしたものだから、ゆっくりとした減速Gが体をすりぬけてゆく。

「言っただろ、ですはいらない、って」

鼻の頭にしわを寄せて、独特の表情を作る。たぶん笑っているのだろうが、お世辞にも上手な笑顔とはいえない。

「えと…利害関係とかもあると思う、けど」

うっかり「思います」と言いかけたところを少々強引に修正すると満足そうに頷いてリバーは再び運転に戻る。

「どうして親切にしてくれるのかとか、今みたいに気さくに接してくれるのかとか、私にはわからないことばかりで」

「理由なんかないんじゃないか？」

即答だった。

きよとんとするラシルをしり目に、リバーはぼんやりと前を見ながら続ける。

「そりゃさ、利害関係もあれ、とりあえず隣にいる。それじゃ、だめか？」

ああ、そうなのか。うまくは言えないが、ラシルの感じたのはそれだった。

きっとこの男にはこれ以上の理屈はないのだろう。そもそも、理屈ですらないのかもしれない。

手の届くものにただ手を伸ばす。そうすることに理由が必要かと問われて、ときには理由があつてさえ手を差し出せせない人間ばかりがとかく幅を利かせる世界に生きていることは痛いほどに感じていた。自分がそうでないかと問われれば答えに困るだろう。理想と現実の格差に、へこんでしまうかもしれない。

それがこの男にとっては当たり前なのだろう。

「変な人」

「今日二回目だな」

「何度でも言うよ」

「あははは、その調子だ」

残念なのは、笑うのがへたくそなこと。これでもっといい笑顔を作れたなら、きっと、いや、言うまい。そう思つてラシルも、決して人のことは言えないへたくそな笑みを浮かべる。

「笑うのへたくそだな」

「もう」

振り上げた左手が少しだけ握られていた。

わざと蛇行させてサイドカーを揺らされたせいでバランスを崩してしまつて不発に終わったが、次に同じことを言われたら絶対にグーで仕返しをしてやろう。そう思うとなぜか、次が楽しみになってしまう。自分がいて、そのことにまたラシルは可笑しくなってしまう。

二つのへたくそな笑顔を乗せたサイドカーが夜の帳の中を実に楽しげにテールライトを光らせている。

「なんで…なんで、生きてるんだ!？」

月を背負ったリバーの姿は男にはきつとシルエットにしか見えていないだろう。それでもそれがリバーだとわかったのは特徴的な逆立てた髪と、人間らしい凹凸をすっぱりかくしてしまっている、夜と同じ色の外套があったからだ。

そうでなければ絶対にリバーであるとはわからなかった。いや、間違ってもそう思うはずはなかった。

だってそうだ、今さっき、ほんの数分前に間違いなく、

「殺したのに！」

リバーの顔に亀裂が入る。三日月形の裂け目というほうが似つかわしいほどにゆがめられた口が不思議なほどにシルエットの中に映えた。

「返してもらうぞ、そりゃおれの荷物だ」

真夜中の通りはさすがにもう街灯も消され、月明かり以外にシルエットを切り取るものはない。

そんなモノトーンな街並みの真ん中で男の脇に抱えられ、猿轡をされながらむーむー唸っているラシルを指さして、リバーが笑う。

いつものような不器用な笑みではない。どこまでも壮絶で凄惨で、見る者の恐怖心を掻き立てずにはいられない、笑み。

恐ろしいまでに美しい、氷の笑み。

「あと、死んでけ」

今回は予算の都合と先々を見越した緊縮財政との兼ね合いで宿のランクを落とさざるを得なかった。というよりも、食事のランクを落とすことを拒んだ結果、予算がある以上は宿代が占める割合は当然下がる、というだけだ。

それでもリバーにしては奮発したほうだ。なにせベッドにかける

れたシーツはきちんと洗濯してアイロンが掛けてあったし、ドアには鍵もかかる。理由はただ一つ。

「ベッド、私が使っても？」

備え付けのシャワーを先に使ったラシルが湯上りの髪を乾かしながら、ベッドとソファの間に突っ立っている。ここで、なんとも中途半端な言葉になってしまふのは、さすがに遠慮から「いいんですか？」と続けてしまいそうになったからなのだが、涙ぐましい努力が何ともラシルらしい。

「ああ、どうやったって俺の予算じゃベッド二つの部屋は借りられないし二部屋なんてもってのほか、かといってこれ以上にランクを落とすとそれもまたまずい」

というのも、ここ以下となるとさすがに女連れで止まるには不都合が生じるクラスになってしまうからだ。不潔であったり物騒であったり、最悪の場合は個室ではなかったりする。自分一人なら躊躇うことはないのだが、というのがリバーの判断だった。

「じゃあ、私がソファに」

「ああ、俺はどこでも寝られるから、気にすんな。それより、明日は朝一から知り合いの職人のところに行ってみる。そこならもしかしたら仕事があるかもしれない」

そう言って手入のためにずらしていた拳銃のシリンドーを戻し、木製のテーブルの上に無造作に置く。ゴトリという金属音が大きさを割に重量感を感じさせる。

「そうなればあんたを送ってやれるのもこの街までだ。しっかり寝て体力つけとかないと、次の移動手段探すにしてもきついぞ」

そう言われてラシルの表情が急速にこわばる。

「ん？　どした？」

「いえ：そういえばそうだったな、と思って」

忘れていたわけではないのだが、あまりにもこの三日ほどの旅が心地よかったのだとラシルは改めて気付く。もちろん、本来の目的を見失ったわけでもないのだが、たった三日という時間が与えたも

のにしては深く自分を動かしているように思えた。

「さすがにそろそろ俺も仕事しなきゃやばいな。料金はふんだくり損ねたけど、そのうち返してくれりゃいいってことにしとくわ」ただ、実を語れば同じことをリバーも感じていい。

最初こそ料金の話も本気で徴収するつもりだったし、サッサと次の荷物を探し出して本来の仕事に戻ることを考えていた。それが今ではどうだ、ラシルとのとぼけたようなやり取りもさることながら、隣に誰かがいる旅に安堵を覚え始めてさえいる。それが絶対に許されない旅であることは自分が一番よく知っているはずなのに、その思いが言葉を選ばせた。

「ま、そこじゃなくて荷物は見つかるさ。安心して寝てくれ」

ラシルがどんな顔をしているのかは見ないようにした。

見ればなにがしかのラシルの感情がそこにはあるかもしれない。そうなれば、自分は次にひねり出す言葉を選べないかもしれない。

何故自分が一人の旅を選んでいるのか、独りで居続けなければならぬのか、それを自分自身に言い聞かせるようにリバーは乱暴にソファに横になり、安物の割にはきちんと日に干してあるらしい毛布を頭からかぶる。

毛布を通して見えていたランプの明かりが消え、どうやらベッドにもぐりこんでいるらしいシーツのすれる音がくぐもって聞こえる。さすがにたったの三日ほどとはいえシュラフで寝てばかりだった体にはソファでさえ寝心地が良く、じっと闇に耳を澄ましているうちに意識が徐々にとろけるように薄れていくのがわかった。本当はシャワーを浴びてから眠りたかったが、今更ここを出る気にもなれないし、何よりラシルが眠っていれば起こしてしまうかもしれない。そう考えた時にはもう半ば以上意識は途切れ始めていた。

外はまだ微かに喧騒を残していたが、それでも夜の声が聞こえる程度にはすっかり夜になっているようだ。そう思ったのが最後の思考だった。

嫌な汗に目が覚めたのは、もう外の喧騒も遠いものになって虫の声しか聞こえなくなった時間だった。時計を見れば正確な時間はなかったのだが、そんなことをしなくても深夜であることが分かれば十分だった。

結局あのあとは毛布の中で悶々と考え事をしているうちに眠ってしまったらしい。

ずいぶん長い時間を物思いに使った記憶があるから、もしかしたらほとんど眠れなかったのかもしれない。それにしても妙に思考もすっきりとしているのが不思議だった。

次の積荷が見つかるまででいい。そういったのは確かに自分だ。そのつもりだったしそれ以上の何かなど期待もしていなかったしそもそも考えてもいなかった。今までもそうしてきたし、旅が終わるまではこれからはずっとそれを続けるものだと思っていた。

何のことはない、繰り返しの中の一小節でしかないはずだ。それが、何故こんなにもそのことを考えるのか、ラシルにはわからなかった。

枕に顔を押し付けるようんしひて、ラシルがつぶやく。

「荷物が、見つかってほしくないって、考えてる……？」

言葉にしてようやくそれを見つけた、とでも言うようにラシルは枕に押し付けた目を見開き、頭の中で何度もその中身を反芻する。もちろん、それが願うべくもないことだというのはわかっていてもいるし、そもそも何故それを願うのかはわからない。なのに、それだけは明確な形を得ている。

あとは積み木が崩れるよりも簡単に思いが姿を手に入れてゆく。

と、その思考が寸断される。

それまで少しながら窓から吹き込んでいた風がやんだ。気温が下がった、

どちらも感覚的なもので実際は風も流れているし気温は昼間の温度を残しているかのようなぬるさに変わりはない。なのに、それをそう感じさせる、いやな感覚。

音はないのに、存在だけが確実にそこにあるのが感じられる。

「リバーさん！」

毛布を跳ね飛ばして体を起こし、声をかけたのは危機を伝えようとしたのか助けを求めようとしたのか、どちらかはわからない。ただ、そのどちらもかなわないとわかった瞬間の絶望は、ラシルの意識を殺すに十分なものだった。

ソファで毛布をかぶって眠るリバー。

すぐそばに立つ男の姿は影になってしまいが、それでも何をしようとしているのかがわかった。

サイレンサーをつけた銃口がプシュツという間抜けな音を続けて二発。間をあけて二発。

そのたびに糸をつけて引っ張っているように、いびつな形で痙攣するリバーの体。

悲鳴を上げることもできなかった。

「用があるのはお前だ、来い」

全く気配も何も感じなかった背後からの声は低く、腹の底を直接わしづかみにされるような不快感を催したがそれも一瞬のことで、声を上げる間もなく口元を押さえられた。

素人ではないことが、素人のラシルにもわかる。それほどの手際だった。

リバーに銃弾を撃ち込んだ男が自分を抱えたときにはすでに口には猿轡がはめられており、瞬きほどの間に部屋の窓から担ぎ出される。

「しかし、こんな女が世界樹の種持つてるって、がせねたに踊らされてんじゃないのか？」

背後から猿轡をかませた男が下卑た笑いを浮かべながら肩を震わせている。さほど大柄ではないのに猫背なせいでひどく小さく見えた。

「黙れ。その迂闊さはプロ失格だ」

それまでどこにいたのかはわからない、長身の男が突然視界に現

れたかと思うと猫背の男の首筋にごついサバイバルナイフを当てている。刃渡りがラシルの肘から先ほどもあるような長大なナイフだというのに、いっどんな動作で取り出してどうやって喉元に突きつけたのか全く知覚できなかった。

猫背の男の喉仏がごくりとうごめく。

「わ、わかったよ俺がわるかった」

萎縮しきった猫背の男をしり目に、腰にぶら下げた鞘にナイフを直したのは物腰とは裏腹にかなり若い男だ。おそらくは三人の中では一番若いのではないだろうか。月明かりにうつすらと照らされる金髪を揺らしながらほっそりとがった顎をしゃくると、それを合図にしたかのようにラシルを抱えた男が二階から飛び降りる。

目の前で起こった一瞬のやり取りだったが、三人の力関係が実に顕著にわかった。

その間にもラシルは叫び続けていた。どれだけ叫んでもむーむーという呻き声にしかないが、それでもラシルは叫ぶ。おそらくはタオルでもかまされているのだろう、叫べば叫ぶほど口の中の水分は失われるがそんなものに構わずに叫び続ける。

リバーの名を、何度も何度も声にならない声で呼ぶ。

そのうちに酸欠にでもなったのか、徐々に意識が薄れてゆく。

「はあい、呼んだか？」

そんな中で聞こえた声は、やはり現実味がなかった。

本当に不死身の男

「頭に二発、心臓に二発：なのに」

恐る恐る振り返った男が最初に見たのはまっすぐに自分を見つめる、二つの月だった。そして次に、その月を背負うようにして立ちつくす一つのシルエット。立っている、というよりは凹凸を感じさせない外套をまとっているせいで地面から影がそのまま引きずり出されたように見える。

「なんでだよ、何で生きてるんだよ、ちゃんと確認したのかよ！」
猫背の男がヒステリックに声を荒らげる。もちろん、疑っているのではない。自分もあの距離で男の仕事を見ていたのだ、疑う余地などあろうはずもなかった。

「当たり前だ。俺は確かにぶちこんだし、息の根が止まってるのも確認した」

確実に銃弾が眠っている頭と心臓に直撃するのを確認したし、あれで生きていればミンチにされたって生き返る。とすれば考えられるのは、

「幽霊？」

ただ、影や幽霊ではありえない存在感は男たちの警戒心を限界まで張り詰めさせた。

「このことか？」

リバーが左手で前髪を書きあげ、右手で外套の胸元を引きあける。生々しい傷跡の残る額と真っ赤に染まったシャツは、間違いなく致命傷を受けた人間のそれだ。

「死なねえんだよ。残念だったな」

「聞いてねえよ、こんな化けもんがガードについてるなんて。割があわねえぞ、これじゃ」

背後から聞こえるのは完全におびえ切った猫背の男だ。腰でも抜けてしまったのか、地べたに尻をついたまま無様に這いずっている。

ラシルを抱えた男が苦虫でも噛み潰したように露骨い顔をしかめる。

「久々にプロが来たと思ったたんでバラバラの即席。しかも、どうも狙いは俺じゃなさそうだ。ってことはまさか、『本物』なのか？」

リバーの言葉に最初に反応したのは猫背の男だった。完全におびえ切った震える声がパニックのままに言葉を垂れ流す。

「しししし、しるかよ。そんなの俺らには、関係ないからな。世界樹の、種なんて、本物だろうと偽物だろうと、俺らはただその女をさらって」

ふつつりとそこで言葉が途切れ、思ったるい音を立てながら猫背の男が崩れ落ちた。

「プロ失格だ」

「ひでえな、仲間だろ？」

倒れた男の首筋には、長大なサバイバルナイフがどかりと突き立てられている。延髄を一撃で貫き、傷口は喉まで達しているだろう。おそらく、痛みを感じるよりも先に意識が分断されたはずだ。

「役に立たんゴミを仲間とは言わないだろう？」

「俺には関係ないけどな。俺はただ、その荷物さえ返してもらえりゃそれでいいなんて悠長なことは言わねえ。片づける数が減っただけの話だ」

外套の内側が風に揺れるように動く。

反応できたのは金髪の男だけ。猫背の男からナイフを引きぬくために伸ばしていた手を躊躇いなく引っ込め、ただ逃げることにだけに意識を集中する。

ナイフの柄が弾け、半ばで折れた血まみれの刃がくるくると宙に舞う。

反応できなかった男は何が起こったかもわからなかっただろう。ただ引きずられるようにして後ろに吹っ飛び、もんどり打って顔から倒れこんだときには真っ赤な水たまりの中に落ちていた。

「いでえ、いでえ」

ようやく肩を打ち抜かれたのだと気がついた時には激痛に耐えかねて泣き叫ぶしかない。

「うるっせえな。貫通してんだから葉塗っときゃ治るよ」

脇に抱えられていたラシルはあられもない姿で地面に捨てられている。猿轡の向こうから、うつすらとうめき声が上がった。

ゆったりとした動作でラシルを引き起こしたりバーが、目を見開きじっとこちらを見つめるラシルの猿轡を解いてやる。

「どうやら、ただ死なないだけの化け物じゃなさそうだな」

「死なないだけの化け物さ。それにしても、あんたは驚かないのか？ 何もんだ？」

問いかけに男は小馬鹿にしたように笑う。

「フリード・Gだ。生き返ろうがゾンビだろうが関係ない。俺はただ殺しができればそれでいい」

淡淡と言い張る様は、プロというよりもある種の狂人だ。

「実にプロらしい答えだ」

皮肉っぽく笑うリバーの口元が更に歪む。覗くのは、ぞっとするほどの狂気。

先ほどよりも少し小ぶりのナイフを引き抜きながら金髪の男はゆっくりとリバーの周囲を回りこむ。とっさに背後に飛びのいたのはどうやら失態だったようで、這うような速度で間合いを詰めながら死角を探っている。肩を打ち抜いた男はとうに戦力外だと判断され、助けを求める声も完ぺきに無視されている。

「クイックドロウは神業の域、だな」

男の眼月の光が反射し、ギラリと獣の眼のように輝く。

「ラシル、自分で帰れるか？」

幸い、手足を縛られていたわけではないので助け起こしたラシルはすぐに自分の力で立つことができたが、動き出すには少し時間がかかりそうなほどにショックを受けていた。

そのショックが、誘拐されたことに対するものなのかそれともほ

かの何かに対するものなのかなど、考えたくもなかった。

返事を待たずにリバーは振り返る。

「言っただろ？ 死なないだけの化け物だって」

少しずつ、ラシルから距離をとる。

「なら、俺が殺してやるよ」

男の足がすり足で少しずつ間合いを詰めているのがわかる。明らかにほかの二人とは桁違いのプロ。それも、殺すことに卓越した殺すことのプロだ。

無造作に踏み出されたりバーの一步目。

リバーが背を向けてさえ保たれていた均衡は、ナイフと銃という全く間合いの違う得物の、実に微妙な距離感覚だからこそ成り立っていたものでもある。それ以上なら絶対に銃が有利、それ以下なら圧倒的な銃の優位は崩れ去り、逆に刃渡りの短いナイフの優位性すらあり得る。そんな距離。

「馬鹿が」

速撃ちだけが取り柄、そう判断を下した。

実際、一対一の局面になったときにものをいうのは空間把握の能力と言って差し支えない。相手の得物が何なのか、自分の得物をどこまで知り尽くしているのか。そしてそこから判断される自分の死ぬ場所と相手を殺せる場所。距離。

目の前にあるのは絶対に外すはずのない間合い。手にしたナイフが、

カシャン

「!？」

はるか後ろから、乾いた金属音が響いてくる。

「せっかく死ぬるかとも思ったけど、やっぱここで死ぬわけにもいかないんでな」

今度は、速さという世界ではなかった。

男に知覚できたのはナイフを振る腕の重さが、記憶の中のそれと違ったことだけ。いつなくなったのかは、全く分からなかった。

終わりというのは、実にあっけなく落ちてくる。それもまた事実だ。金髪の奥で不愉快そうにゆがんだ眼が見つめるのは、無表情に向けられた銃口の闇。その時になって初めて見たリバーの瞳にぞっとする。

「悪魔め」

すべてが畏だったと気づいた今となってはあとの祭りだった。リバーが撃った先ほどの二発は本来の速さを見誤らせるための、そのくせにかなりの速撃ちが可能であることをにおわせるだけにぎりぎりの速さ。

「化け物だよ」

トリガーに指がかかる。

「ちっ」

舌打ちと同時に男の左腕が、しなやかな動きを見せる。この期に及んで何をしようと勝敗が絶対に覆らない、それはだれよりも一番わかっているはずのプロがとったのは、

「くそつたれ！」

いったい何本仕込んでいるのか、さらに一本のナイフが男の手に手品のような鮮やかさで現れ、流れるような動作で投げられる。

狙ったのは、ラシル。

男に必要なだったのは一瞬だった。リバーの銃口が男から逸れ、当然のようにナイフは碎けて落ちた。パラパラと銀色の雨のように月明かりを反射したそれが地面に落ちるまでの一瞬さえあれば、

「逃げるほうを選んだか。本当にプロだったみたいだな。で、お前はとうするんだ？」

肩口を抑え、惨めなうめき声をあげてうずくまっていた男が、おびえ切った目でリバーを見上げる。唇はまっさおに血の気がなくなっているぶると震えていた。見るからに、雑魚の末路と言った感じだ。

「何なら始末つけてやろうか？」

ガチャリとわざとらしくハンマーを引き起こす。

と、どこにそだけの元気が残っているのかというような勢いで飛びあがり、脱兎のごとく逃げ出す。

ハンマーを寝かせた銃を外套の中にしまいこみ、手の平で額を抑える。

「痛ってえ～。あの野郎、思いっきり四発もぶちこみやがって。一瞬まじで意識とんだじゃねえか」

まだ痛々しく残る傷跡からは、真っ赤な血が垂れていた。

「リバーさん、その傷…」

立ちすくんだまま動けずにいたラシルがそんな声を上げる。疲れ切ったような声は、誘拐のせいではない。

「あ、ああ。これな」

説明の必要などない。記憶の糸を手繰ればすぐに行き当たる光景だ。撃った男の言葉を信じるなら、頭に二発、心臓に二発。そしてこうも言っていた。

何故生きている。

「死なねえんだわ、俺」

「死なない、って」

駆け寄ろうとするのに体がすくむ。

目の前にいるのは間違いないリバーだ。あのリバー以外ではありえない。それなのに体はどうしようもなく萎縮して言うことを聞いしてくれない。それどころか、言葉さえもが胸でつかえて息が苦しくなる。

言わなければいけないことがあるのに。聞かなければならないことがあるのに、そんな気持ちさえもが嘘であるかのように開いた口からは細い息だけが漏れる。

「ほんとは隠してたかったんだけどな。さすがにもう誤魔化しきかねえな」

べつとりと血で額に張り付いた前髪を気にしながら、傷口を指さす。すると、先ほどまで血が垂れていた傷口がもうふさがり始めている。

「そう、死なないんだよ。脳みそぶち抜かれようが心臓をえぐられようが死なない。って言うか、死ねないってのが俺の感想なんだけどな」

あっさりと言ったのけるリバーに、再び腰の抜けたラシルがぺたりとその場に尻もちをつく。おそらく、さきほど立ち上がったのでさえ相当気を張り詰めていたのだろう。その緊張が一気に解けたところへの告白としてはパンチ力が強すぎる。

「ま、そうなるよな」

そのすぐ隣にリバーも腰をおろしてがっくりと肩を落とした。

「ふう：さすがにしんどい。血は足りねえし、あたま撃ち抜かれてるからぼーっとするしな」

どこまでが冗談でどこからが本気なのかわからないが、それがラシルを氣遣ったのジョークであることは間違いなかった。ただ、ラシルにそれをジョークとして受け止める余裕がないこと尾にまで気が回らなかったところを見ると、ぼーっとして思考が弱っているのは本当なのだろう。

「ほんとうに」

ぼつりとラシルがつぶやくが、消え入りそうな声はリバーには届かず、「ん？」と言う間抜けな顔でリバーが横を向く。図ったようなタイミングでラシルが、

「本当に、死んだと、思った！」

小さく震える肩を必死になって抑え、身を乗り出してリバーに詰め寄る。うっかり振り向いたリバーと鼻っ面がぶつかりそうな距離にまで近づく。吐く息が震えているのがわかった。

「私のせいで、あなたが死んだって思って、本当に本当にこわかった」

徐々に最初の勢いを失った言葉は語気が弱められ、とうとういつ泣き出してもおかしくないような細かい声になる。

「悪い。あいつらの狙いもわからなかったし、いろいろと確認したかったから」

自分を狙うのであれば殺気は自分に向けられ、そのための手を打ってくる。しかし連中がとったのは対リバー用のものではなく、もっとほかのものを得物として想定したような動きだった。それが何であるのかを確かめると同時に、一つのあたりをつけた。

おそらく狙いはラシルだろう。だとすればラシルの何を狙っているのか。

その答えはおそらく自分の疑問にも回答を与えてくれるはずだと直感しながら、当然のように邪魔ものの自分を排除しようとする男たちにも気付かないふりを決め込んだ。

「で、予想は大当たりってわけで、収穫はあったわけなんだが」

ボロボロと、大粒の涙がこぼれている。ラシルの黒目がちな瞳が、あふれる涙でゆがんで見える。

「そんなことのために？」

ラシルの声は、涙とは裏腹に張りのある穏やかな声だった。

「そんなことのために、自分を危険にさらしたの？」

「まあ、俺は死なねえからなあ」

「そんな問題じゃ、ない。そんな、問題じゃ」

少しずつではあるが、ラシルの言いたいことがわかったリバーの顔に動揺が浮かぶ。

自分の命など、ただの盾ぐらいにしか考えていなかった。傷はすぐにふさがる。多少の痛みに耐えさえすればこれほど罔に向いたものもない。事実それで今回は思うとおりに事が運んだ。知りたいこともある程度は情報を得ることができた。

「傷はふさがるし、何度も言うけど俺は絶対に死なない体なんだ。切られようが撃ち抜かれようが、それこそバラバラにされようが」

もちろん、最後のは大げさだったしそんな経験はない。ただ、たぶんそれでも死なないだろう自信はあった。

「そうじゃない」

ラシルが大きく首を振る。もう涙を流してはいない。

「私は、怖かった。あなたがいなくなることが。本当に怖かった。」

私のせいでいなくなってしまうた。それがどんなに怖かったか…」

「悲しんでくれるのか？」

リバーの突拍子もない一言に、ラシルは押し黙り、必死に力んで口をへの字に結んでいる。そうしていないとまた涙があふれてしまうのだろう。

そして、ゆっくりと頷く。

リバーの手が少し乱暴にラシルの頭に乘せられる

くしゃりと赤みがあった亜麻色の髪が撫でられたかとおもうと、その手がふと止まる。

「悪い。俺の独断だったが、驚かせたな」

「本当に、驚いた」

ようやくラシルの声から緊張や気負いが消える。まだまだ普段通りとは言い難いが、それでも、わざとらしくこぼしたため息にリバーからは苦笑が漏れる。

「ばっかっ！」

ラシルが、信じられないような声を上げる。

夜中の街に何重にも不名誉な叫びがこだまする。ただ、なによりもラシルの口についてそんな言葉が出たことのほうが驚きだった。

「痛いんでしょう？」

「ああ。不死身っても怪我も病気もすれば治る過程は普通の人間と同じだからな」

とはいうものの、その治癒の速度に触れないのは、やはりリバーにとってこの話題はあまり嬉しいものではないからだ。

「だったら」

頭の上に載せられたリバーの手に、ラシルが小さな両手を重ねる。「もう、あんな真似しないで。死ななくても、あんなのは見たくない」

手の甲に伝わる穏やかな温度に、リバーは久しく忘れていた人のぬくもりをかみしめてしまう。

誰かに心配される。誰かが自分のことで悲しい思いをする。そん

なことを考えない世界でずっと生きてきたリバーにとっては、逃げ出したくなるような温度だ。

「わかった」

それでもその手は、首を縦に振らせるだけの魔力を持っていたように思う。

振り払って逃げることも容易だし、自分の稼業や目的を考えればそうするべきだと思った。これからずっと自分は一人のはずなのだ。

「ばか」

ラシルが半ベソをかけたような声で鼻をすすりながらそんなことを言うもんだから、リバーには「ばがあ」と聞こえて思わず噴き出しそうになる。

「あゝあ、わかったって言っちゃったよ」

おどけるようにくると踵を返し、引き抜いた右手でバリバリと頭をかきながら出来の悪い劇の登場人物のようにわざとらしく歩く。

「そんなことより、ほんとに本物だったんだな」

かなり強引にリバーが話題をねじ曲げる。それは照れ隠しであると同時にリバーが本当に切り出したい話題だ。

「そうよ」

先ほどと変わらない調子でラシルの声が背中に聞こえるが、心なしか淡々とした口調に聞こえるのは主観だけのせいではないはずだ。「まだ信じられない気分だ」

「不死身のあなたがいるんだから、これがあってもおかしくないって言ったら？」

風がないことに気がつく。

月が出ている以外には明かりもほとんどなく、人の気配が全くないこの時間では時が本当に動いているかどうかさえ怪しくなる。きっと、この瞬間は時間さえもが止まったのだと思う。

先ほどラシルが使った魔法は自分にイエスと言わせる魔法だった。では今度の魔法は何だろうか、そう考えたときにリバーの肩は震え、

いつの間にかクツクツと声に出して笑っていた。

「違う」

まさかあのラシルが皮肉を言うなどとは考えてもみなかった。

そりゃそうだ。自分の不死身という異常性を差し置いて世界樹の種の実在を疑って、果てにはこんな茶番まで演じて確認している。

ラシルにしてみればおそらくこんな体の自分のほうが信じられないに違いない。

「なんでもありだな」

「そうよ」

ここで、リバーが言うか言うまいか迷っていた一言を口にする。

「あんた、実は意外と図太くないか？　まさか馬鹿なんて言われると思わなかった」

皮肉のつもりだったが、ラシルにとってはむしろこちらのほうが素で、今までのほうが猫をかぶっていたのだというように、ドンとリバーの背中を突き飛ばす。

思えば、今朝がたの食堂での態度は実に堂々としていた。それだけではない。所々で飛び出した一言は実に的を射ていたように思うし、会話のテンポも悪くはない。そしてなにより、

「セフィが来たときに、堂々としすぎてたしな」

「馬鹿にバカって言ったんだもん」

それはラシルにとっての降参だったのか、それとも宣戦布告だったのか。たぶんどちらでもなかったしどちらでもよかった。

「馬鹿にバカって言えない世の中じゃ、つまらんからな」

生きることだけを考えていたのかもしれない。

謙虚に、真面目に、真摯に、遠慮がちに、眼を伏せて言葉を選んで肩をすばませていなければ旅どころか通り一つ歩けない。そんな旅をしてきたラシルにとって、人との接点と言うのは常に自分を押し隠す場所だった。笑顔は常に愛想笑いで言葉は相手のことを第一に選んだ。それが嘘であるか否かは二の次だった。極力うそにならないように言葉を選んでいたこともあった。いつの間にかそうする

ことが当たり前になっていた。

権謀術数とまではいかなくとも他人の欲望や嘘の海を泳ぎきるために必要なのは、いつでも正直さやまっすぐな気持ちではなく他人を出しぬき騙す技術だった。

「ほんと、変な人」

それを、鼻で笑い飛ばす。

「お互いにな。で」

リバーがおどけるように、突き飛ばされたままとことこと歩き続け、くるとその場で回ってみせる。月の明かりをスポットライトに踊るピエロのようだ、そう思ったラシルはわざとらしく小首をかしげて見せる。

そんな仕草を、いつかはしてみたいと思いながら他人を眺めていた自分を思い出した。

「どうするんだ？」

「どうする、とは？」

リバーは動きこそコミカルに装っているが、目が笑っていない。

「ここも、一つの分岐点だ」

道は二つに一つ。

「もちろん」

いつの間にかラシルの中では答えが決まっている。そのことが意外でもあり、当然のことを今更という気もしていた。リバーがどう考えているのかは底の見えない瞳が物語っている。

選択権を持つのはラシル。

口を開く。

「明日、荷物を探しに行かないとでしょ？」

これでもかというほどの演技をしてやったラシルは満足げに胸を張り、どうだという目を向けてやる。

「仰せのままに」

相変わらずへたくそな顔で笑いながらリバーは肩をすくめる。少しだけ、この旅が終わることを惜しんだことは絶対にラシルに

は内緒だ。

お仕事探し

月明かりも届かないように窓一つ取り付けられていない部屋だというのに、ランプもつけていない。

「聞いてねえぞ、あんなもん」

フリードが半ばほどから折れてしまったナイフを思いきり壁に向かって投げつける。八つ当たりでしかないとは思ったが、そんなことでもしなければどうにかなりそうなほどにイライラしている。

ナイフの柄が当たった壁は鈍い音を立てる。暗すぎる中では距離感が全く掴めないが、音の反響で大体の部屋の広さがわかった。

「そうねえ。あれは私たちにも予想外だったから」

女の声。

そいつがいることには、全く気がつくことができなかった。いるのだろうとは思っていたが、意外なほどに近くにいたのには恐怖よりも不気味さを感じずにはいられない。

（気持ち悪い奴らだ）

胸中で毒づく。

会うときは必ず深夜。指定された一室。やつらという言い方をしたのは、相手の規模が全く分からないからだ。そして、何よりも気持ちが悪いのが、こちらの方が先に入っているのに、いったいいつ入ってきたのかもわからないうちにそこに表れているということ。フリードも一端のプロとして殺しを請け負ってきた自負がある。殺気や気配といった類のものには鼻がきくつもりでいたし、事実そのおかげで仕事がこなせていると言ってもいい。

なのに、

「でもおかげでいいことがわかったし、今回はある意味で成功って言ってもいいかもね」

こいつらは殺気どころか、気配すら全く感じさせない。

意識の空白を乗っ取られているような気がして、まだ三度ほどし

か会っていないというのにもう次はごめんだと思ってしまう。

「いいこと？」

「そう。あれはリバー・D。私たちがずっと探していたもう一つのピースよ。まさか二つがそろって目の前に来てくれるなんて。しかもこのタイミングで」

不意に部屋に明かりがともる。

背後から照りつけるランプの明かりは決して強くはなかったが、闇に慣れ過ぎた目には刺激が強すぎる。

「つくづく、ラッキーとしか言いようがないわ。そう思うでしょ？」
おどけた口調なのに、暗闇から声が聞こえてきていたさっきまでとは比べ物にならないプレッシャーが背中を圧迫する。気配すら感じさせなかった先ほどまでとは逆に、押し隠せない存在感が、いかに自分の背後にいるものが人の常識を超えた何かであることを伝えてきていた。

「さあな、俺には理解できん。俺が考えるのはあの男を殺すことだけだ」

「あれだけ圧倒的な負け方をしておいて？」

まるで見てきたような口調だが、おそらくはどこから見ていたのだろう。無意識に舌打ちが漏れる。

「ま、そうでなくてもあれは死なないから、殺すことはできないんだけどね」

まるで旧知であるかのように楽しそうに話す態度が、ますますイライラを募らせる。

ことん、とランプを床に置く音がする。続いて足音がして、目の前の壁に人の形をした影が浮かび上がる。

「そんな緊張することないじゃない。別にあなたを取って食おうってわけじゃないんだからさ」

影の髪がさらりと肩から滑り落ち、フリードの肩口につややかなロングヘアーがかかる。息を感じるほどの距離に唇があり、それだけで端正とわかる顔立ちが視界の隅に見えた。

絶世の美女、とはまさにこのことだろうと思わせる。

隣を通り抜け、それまで影が映し出されていたあたりでくると振り返る。ワテンポ遅れて腰まであるロングヘアーがその動きに滑らかに従う。プラチナブロンドという言葉がふさわしい髪がランブのくすんだ明かりにも輝いている。

切れ長な目元にすらりと通った鼻筋、潤んだ唇は絶妙なバランスで配置され、神が気まぐれが作り出した美術品であるかのようだ。

ただし、隣を通り過ぎる時に感じた背筋の凍るような悪寒がなければ、という条件付きだが。

「顔はまずまずだけど、あなたみたいなのじゃ食べる価値もないものの」

どこまでも他者を蔑んだ瞳は、そこにあるものが命を持っているとさえ考えていないような冷たさだ。

「ああ、そう願いたいもんだ」

口元を微かに釣り上げるだけだと言うのに、その笑顔は恐ろしいほどに美しく、きっと通りを歩けば通りにいる全員が振り返ってたえるに違いないほどだ。

「そこでお仕事」

意思の確認がないのは、こちらの意思などは一切関係ないということなのだろう。つくづく傲慢を絵にかいたような態度だが、自分が拒否できる立場にないことなど最初からわかり切っていたことだ。フリードは黙って女をじっと見つめる。

「どんな手段を使ってもかまわないからあの男には邪魔をさせないで」

「あんたらが直接やった方が確実なんじゃないか？」

皮肉と言うよりも、何故このタイミングにもう一度自分にやらせるのか、その方が気がかりだ。

「理由は簡単。私たちが直接やると面倒なことになるの。大き過ぎる力の衝突は、巻き込むものもそれなりに大きいから。それに、人間相手だとあの男は偽善を振りかざしてくれるから」

この女が言うのと奇妙な説得力があった。

「種のほうはどうする？」

「あれさえいなければ簡単でしょう？」

言いながら、ポケットから取り出した小ビンをテーブルの上に置く。

中には少量の液体が波打ちながらかすかに赤く輝いている。ランプの照り返しかとも思ったがどうやらそうではないらしい。

「何だよこれ？」

見たことのない液体を手取るが、近くで見てもわかるはずもなかった。かといってこんなやつが持ち込んだものの蓋をあけるほどの無茶は、今はしたくなかった。

「目薬よ」

続けて女が口を開く。

「これを使ってもかまわない、って言うんだから、相変わらずのVIP待遇よね、あの男も」

誰にともなくそう言ってあきれたように小さくため息をひとつこぼし、それを合図にしたかのようにランプが消える。

ランプの明かりに目が慣れてしまったせいで先ほどよりも闇が深く感じたが、フリードはただじっと目の前の闇に向かって目を凝らし続けた。無はどれだけ覗き込んでも無でしかないが、さっきまでいた女はそのさらに奥にある、もっとどうしようもないもののような気がした。

闇すらも包括する黒さ。

「化け物だな」

取り出した煙草に火をつける。

ほんのりとたばこの先にオレンジ色の火がとまり、白い煙が目の前を昇ってゆく。

「おまえは本当にタイミングが悪いな」

薄暗い部屋には、埃と何かの油のにおいが密集している。

明かりとりの窓はごく小さく、それも限られた時間に限られた場所だけが明るくなるように設計されているかのようだ。

「うそだろ、ウェーランド？」

カウンターに乗り出して非難がましい目を向けるリバーを全く無視するように、薄暗い中で作業をしているのはもうとうに初老も過ぎた白髪の男だった。

「おまえに嘘をついても金にならん」

「じゃあ、近々ものを送る予定は」

儚い希望はもろくも崩れ去るのが、どうやら世の中の定番のようだ。

「コンボイが行った直後だ。どこもしばらくはないんじゃないのか？ それこそ一軒ずつ地道に御用聞きしていけば別だがな」

もちろんその物言いはリバーがそんな地道な労働とは縁遠い存在であることを熟知しているが故の、突き放したような口調だ。

ぐったりとカウンターに突っ伏したりリバーなど視界に入らないかのようにウェーランドと呼ばれた男は作業台の上の細かな部品と向き合っている。どうやら時計をはじめとする精密機械を作ったり修理したりする職人のようだ。

「まったく：ついてねえよ、ほんと」

「他によろがないなら帰りな。辛気臭いのにいられちゃ来る客もこねえ」

というが、置かれている時計や何に使うのかわからない細々とした機械類の数の割にはあまり繁盛しているようには見えない。

「じゃ、こいつを頼むよ」

懐から引っ張り出した拳銃をカウンターに置くと、木と金属の当たる独特の音がする。

ぴたりと作業をしている手を止め、ウェーランドが大きさの割には細長い指を伸ばしてシンダーを握る。職人の手と言うのは独特で、このしわだらけの小柄な男は精密機械を触り続けた者だけが持つ、繊細そうな指をしている。

「もっと大事にしてやれ」

何を見るでもなく一言だけそういうと、手のひらの感触を確認するようにじっと銃を眺める。

「ああ。最近思ったところにあたらないことが多くてな。自分の調整じゃ限界だ」

驚いた。あれだけ完璧な命中精度で速撃ちをする場面を何度も見ていたラシルには、あれ以上の正確さを想像することなどできない。百発百中とはああいうもののことを言うのだと信じてやまなかったのに、それがリバーにとっては我慢ならないほどの命中精度の低さだったとは。驚きを通り越して嫌味にすら聞こえてしまいうだ。

「あたりまえだ。こんな使われかたすりゃ、言うことを聞きたくなくなる。人も同じだ」

「大事にしてるんつもりなんだけどなあ、これでも」

宿のテーブルの上で分解と掃除をしていた姿を思い出す。緻密きわまる作業なのに一つ一つを実に丁寧にこなしていたように思ったが、それほどにプロの目と言うのは厳しいものなのだろうか。それともこれが男同士ならではのやり取りなのか、ラシルには判断がつきかねた。

ただ、リバーのなんとなく照れくさそうなしぐさから、後者ではないかと思いはした。

「じゃ、明日取りに来るわ」

「こんばんだ。てめえのツラなんか二日も見たくねえ」

そう言ってウェーランドは怒ったように背中を向け、黙ってそれまでの作業に戻った。

もうこれ以上は何も言うことはない、という暗黙がラシルにもわかった。

「じゃ、たのんだよ」

そう言ってひらひらと手を振るリバーの後に続いて、ラシルも小さく会釈をして工房をあとにした。

善は急げということで朝一番に訪れたのに荷物にはありつけなかったのは残念だったが、実際はそれほど期待していたわけではない。コンボイの通った後のおこぼれがあれば上場程度の気持ちだったし、主たる目的は銃の整備だ。

「じゃ、行くか。今日こそは仕事見つけないとな」

もちろん、そんなのんきな頭でばきばきと肩を鳴らしているリバーには、自分の隣でそっと胸をなでおろしているラシルの存在など見えるはずもなかった。それが安堵ゆえのものなのか、それとも別の何かなのかは神と本人のみぞ知る、というところだ。

「とはいうものの：どうしたもんかな」

「当ては、もうないの？」

腕を組んで考えているようなしぐさをしているリバーだが、こんなポーズをするときは実は何も考えていないことのほうが多い。

「ないこともないんだがなあ」

どこか上の空の声は、本当に働く気があるのかどうか疑わしくなるような間拔けな声だ。

「だが、何？」

「んゝ：配達じゃねえんだよな」

「そういえば」

ラシルが思い出したのは、リバーが自己紹介をした時の言葉。配達屋となんでも屋を足して二で割ったようなもの、という言葉。

「なんでも屋さんのほう？」

リバーの眉間にしわが寄る。悩みの種は働くべきかどうか、ではない。言うべきかどうか、だ。しばらく死んだようにじっと眼を閉じて空を仰いでいたが、意を決したようにパツと目を開き、一人で納得したようにうなずくと、リバーが唐突にラシルを見る。

「ま、ついてくりゃわかるさ」

とだけ言うと、見るからに気が進まないという足取りで職人たちの工房が軒を連ねる路地をすり抜けてゆく。

道のわきに工房を建てたというよりは、やたらめったに建てまく

った工房の隙間がたまたま道として機能している、といったほうが正解のような路地を抜けると、最初にここに入った時とは全然違う場所に出た。

リバーは迷う様子もなくどんどん歩いていたが、ラシルはきつともう一度同じ道に入り込んだら永久に出てこれないだろうとおもう。運よく出られたとしても、きつと自分がどこにいるか全く分からないだろうことは請け合いだ。

「ここはかなり古い町らしくてな、土地区画もへったくれもないころの名残がこの場所なんだとさ。迷子になってミイラで発見されたやつまでいるらしいけどほんとにかよって感じだな」

不思議そうにきよろきよろとしているラシルの様子から思考を読んだりリバーがそんな説明をしている。

「わかる気がする」

もう一度まじまじと自分の出てきた路地を見つめて、ラシルが実にまじめにそんなんことを言う。

相変わらず気が乗らないのが丸見えの足取りで、つま先を引きずるようにずるずると音をさせて歩くリバーが、ふと一軒の食堂の前で足を止める。

昼時にはまだずいぶんと時間があるせいで準備中の札がぶら下がっているが、リバーが見ているのはその入口のすぐ隣に建てられた一枚の掲示板のほうだった。

「あんまり気がのらねえんだけどな」

愚痴のようにぼそりと呟きながら見つめる掲示板には何枚かの紙きれが乱雑にピン止めされており、砂交じりの風にバサバサと揺れている。種類は雑多で古いものはふちがぼろぼろになって黄ばんでいるかと思えば、新しいものは縁で指が切れてしまいそうなほどだ。共通していることといえばバストアップの人相書があることとその下に数字が書かれていること。

手配書。

「あなたがそれ見るの？」

淡々とした口調はときとして感情的なそれよりもはるかに破壊力がある。実に鋭い、そして遠慮会釈のない一言がぐさりと突き刺さったが、もちろんそれが嫌で乗り気ではなかったのだ。

「やっぱ言われるよな」

「当たり前よ」

見れば、懸賞金をかけているのは警察や街の自治体といった公権力からどこその商業組合といったような寄り合い所帯、果ては個人で手配書を出しているものまでである。ただ、公権力のものとそれとで大きな違いがあり、公権力のものがDead or Alive（生死問わず）であることに対して、個人の懸賞は必ずいけどりが条件となっている。

これは当たり前と言えば当たり前で、個人で生死を問わない報奨金などを出せるとなれば、金さえあれば恨みのある相手を殺してしまえるという無秩序極まりない社会になってしまう。いくら荒野に一步出ればまだまだ無法地帯とはいえ、人が生きるコミュニティである限りは保たれるべき秩序というものがある、というわけだ。

そして、自分も首を狙われるリバーが手を出すのは、

「当然、そうなるわね」

公権力のもとに自分から出向いて行くほどの馬鹿ではないつもりだ。というわけで、個人が懸賞金をかけているものばかりを何枚か引っぺがして持ってゆく。もちろん、手配書を剥がしていくのはルール違反だ。警官が見ていれば罰金の上に厭味ったらしい説教が待っている。

「おまえさ、日に日に毒舌になってないか？」

「そう？」

「初対面の時はもっとしおらしかった気がするが？」

「気のせい」

そんなはずがない。

女というのは変わればここまで変わるものかとまじまじと見つめていると、逃げるように体をよじり、「なによ」という不機嫌そう

な声をあげてラシルはもじもじし始める。

「ま、そんなことより」

ぷっ、とラシルの頬が膨らんだのに目もくれずにリバーが手配書の束をめぐりながら歩き始める。さすがにあんなところで手配書の束を持って立っていれば、捕まえてくださいというようなものだ。

「手頃なのがあればいいんだけどな」

「聞いていい？」

「だめだ」

「なんでも屋みたいなものって、もしかして、ほんとに賞金稼ぎなの？」

だめだと言われたことなど関係なくラシルは聞く。さすがに「だめだって言っただろ」という返しは野暮だと思ったりリバーは、黙って首を縦に振る。声にしないのは、まだ某かのためらいがある証拠だ。

「じゃあ、配達屋と賞金稼ぎを足して二で割った、でいいと思うんだけど」

「そりゃお前」

ぺらりと一枚だけ手配書をめくる。身長が頭一つ分違うリバーの手元はラシルからでは見えないらしく、必死になって覗き込もうとしている。

「こんなもん、賞金稼ぎだなんて言えるか？」

いちまいの紙きれを放り投げてラシルに渡すと危うくとりこぼしそうになりながら何とか捕まえる。

『探してください』とでかでかと書かれた下にあるのは白黒ぶち模様の犬の首から上の、人相書ならぬ犬相書。

「まだあるぞ。これは家出した息子を探してくれ、こっちは猫を探してくれ、これは：何だこりゃ？」

言って放り投げた手配書にあるのはフライングフィッシュという動物の絵と指折り数えなければわからないような桁の数字。空を飛ぶ魚という、架空の動物の手配書はもちろん『想像図』という注釈

つきだ。

手配書などと言えば重く聞こえるが、結局は迷子探しの延長線のようなものだ。

「探すの？」

ひらひらと、トンボのような羽の生えた細長い魚の絵を揺らしているラシルにリバーは思わず声に出して苦笑する。

「くっ、それもいいかもな。その手配書あんたにやるよ。クックッ」

「馬鹿にした」

スカイフィッシュの手配書突き返しながら、ラシルはなんでも屋を自称したリバーの言いたかったことを何となく理解した。これを賞金稼ぎと自称するのは、自分を追う賞金稼ぎを見れば気後れるのは当然というものだろう。

「そんじゃま、小遣い稼ぎしなきゃな」

そう言ってリバーは一枚の手配書を手にとると、残りを外套のポケットにねじ込むようにして突っ込んだ。

「何探すの？」

「面白いもん見つけた」

そう言ってリバーが手渡したのは、どうやら手配書の類ではなく働き手を募る仕事紹介の紙だったらしい。内容は実に簡単で、大豆を運ぶ人間を探している、というものだった。

「なんだ、細かい配達の仕事だ」

てつきり賞金稼ぎまがいのことをするものだと思っていたラシルは、少し拍子抜けしたがそれ以上にホッとしていた。行動の読めないリバーのことだから、また危ないことにでも首を突っ込みやしないかという危惧が、心の隅っこには残っていた。

「まあな、本業は配達屋だからな」

「でも、それがどうして面白いの？」

文面を見る限りでは大豆の卸を仕切っている商会から小売りの店に豆を配達するだけの仕事。それこそ小間使いがやるような単純労働と言って差し支えない。報酬も、はっきりと書かれてはいないが

誰が見ても多くは望めないはずだ。

「ま、見てればわかるって」

リバーの中にあるのはある種の予感のようなもの。表通りを堂々と歩けないような人間と多くかかわってきたからこそかぎ分けられる臭いが、この配達員募集の紙からはぶんぶんしてきている。

「面白って」

リバーの肩が小刻みに揺れているのは笑っているせいだ。

「ねえ」

ラシルの胸をよぎったのは、なんとも言えない嫌な予感。リバーはもちろん返事をしない。そのことがラシルに自分の予感が核心であることを教えた。

「悪いこと考えてるでしょ？」

そのラシルの言葉には答えずに、リバーは散歩でもしているかのような呑気な歩調で大通りをしばらく歩き、再び何やら雑多な露店が軒を連ねる怪しい路地へと折れていく。

街並みこそ先ほどの工房街と似ているが、そこにある雰囲気は全く違ったものだ。先ほどの場所が職人が技術を切磋琢磨する場所だとすれば、こちらは商売人たちの権謀術数が渦巻く商人街といったところか。

そして、その色合いの違いからくる活気の違いには雲泥の差があった。

常に誰かが何かを怒鳴っているし、目まぐるしいほどに物も人間も行き来している。同じ町の側面というとすれば、見事に静と動が描き分けられている。

「つと…ここのはずなんだがな」

手元の紙と目の前看板とを見比べながらリバーが覗きこんだのは、紛れもなく豆を販売している常設の店舗だった。

「ちよっと、外で待っててくれるか」

そう言って返事も待たずに店に足を踏み入れる。

薄暗い店内には独特のにおいが充満しており、所狭しと札の掛け

られた麻袋が置かれている。札には、どうやらその袋に何の豆が入っているのかを書いてあるらしい。手近な一番大きな袋には大豆の表記があったが、何よりも驚いたのはその豆の種類の多さだった。

「いらっしゃい」

気だるそうな声が奥の闇の中から聞こえる。とても客商売をしているとは思えない声を辛気臭いと思ったのはどうやらラシルも同じだったようで、明らかにいぶかしがって眉をひそめている。それでも、リバーが注意して見ていてやっと気付く程度だったので、おそらく他人から見れば全く気がつかなかっただろう。

「うちは卸だけだから小売りはやってないよ」

まだ若い。パッと見ただけではただの使用人に見えなくもないが、妙に落ち着いたというか、肝の据わった雰囲気の不気味だった。

「いや、張り紙を見てね」

手元の紙を指さしながらリバーが愛想笑いの一つも作らずにじつと男の眉間を見つめる。自分の笑顔がいったいどういった効果をもたらすかは、とうに自覚済みだ。

「そうか、すまないな。生憎人手が足りてしまつてね。それももう剥がしに行くところだったんだよ」

男の口が、あらかじめ決まっていたセリフを読み上げるような滑らかさで動く。

ビンゴ。

「ちよつと変わった豆の配達でも何でもやりますよ」

こちらにも、定番のやり取りとでもいうように言葉を吐き出す。

店の男は一瞬だけ小さくこめかみをひくつかせた以外は表情には何の変化も見せずにリバーを見つめる。かと思うと、それまでの無表情が嘘のようにぎろりと眼を見開き、品定めでもするようにリバーを眺め始める。頭のとっぺんからつま先まで一通り舐めるように視線を巡らせ、ほんの数秒黙考する。

「来な」

明らかに先ほどまでの無気力な男とは違う、どすの利いた声が店

内に響く。

子どもほどの大きさのある麻袋の間を縫うようにして男の背中を追って店の奥に行くと、かなり頑丈そうな作りの扉を開けてさらに奥の部屋へと招待された。こちら表と同じ石造りの店舗で薄暗いというのと同じだったが、表と全く違う空気が充満していることは、入ってすぐに感じられた。

「名前は？」

「リバー・D。個人の配達屋をやってる」

ああそれか、というように男が目だけで返事をする。

「俺はシードラ。見ての通り豆屋だ」

「見ての通り？」

皮肉っぽく言うリバーの言葉もさりと受け流すのは、おそらくこういうやり取りのほうにシードラのお眼鏡にかなった、ということなのだろう。

「見ての通りの、豆屋だ」

見ての通りをあえて強調するあたりが、リバーの予想を確信へと変えてゆく。

「で、本当にうちで働きたいのか？」

「ああ。本来なら街から街への長距離便のほうがいいんだが、あいにくコンボイが出た直後らしくて仕事がなくってな」

蛇のような目つきでじっとこちらを見るシードラは、ふんと一つだけ鼻息を漏らすと手近な袋を一つ取り上げた。表にあったような大きなものではなく、腰にぶら下げて運べる程度の小さな皮の袋。

「最近ルールも守れない配達屋が多くてな。配達物の封を開けない程度のことできないやつらが仕事欲しさに寄ってきやがる」

「そりゃ、不幸だな。うっかり品物を任せられない」

「そうだ。まあまあ働いてくれるやつだったんだがな」

あとは推して知るべし、ということなのだろう。シードラの右手が人差し指と親指だけを伸ばして、鉄砲の形を作る。

「で、俺は仕事をもらえそうかい？」

「夕方、またここで。奥まで入ってきてくれりゃいい」

そういうと小袋を無造作に放り投げ、扉を開ける。視線だけで部屋を出るように促すと、あっという間に先ほどの眠そうな気だるい表情に戻る。ただ、その間も一挙手一投足を見逃すまいとじっとリバーに向けられた視線だけは、蛇のようにからみついていた。

「そうだ」

足を止めて振り返る。

返事はしなかったが、露骨に鬱陶しそうな顔をしたシードラが、視線だけでさっさと帰るように促している。

「あんた、赤目の連中と取引はあるのか？」

一瞬間をおいて、シードラが首を横に振る。

「何のことかわからんな」

「そうか、変なこと聞いて悪かったな」

今度こそ本当に店を後にする。

背中に本当に蛇でも這っているような不快な感触を感じながら店を後にしたりバーは、外のあまりの明るさに目がくらむ。

心配そうな顔でこちらを見つめるラシルには、とりあえず手を振って仕事があったことだけを伝えておく。ホッとしたよなラシルの笑顔になんとなく罪悪感を感じはしたが、とりあえずは急場をしのがなければならぬと自分には言い聞かせておく。

「とりあえずいったん宿に帰るか」

のんびり歩いて宿に戻ればちょうどお昼頃に到着できるはずだ。

頭の中では昼に何を食えるかばかりを考えながらリバーはそこらの露天に目を向ける。食べ物を扱う店はどこも昼の書き入れ時に向けての準備に追われているようで、そこら中から食欲をそそる香りが漂ってきている。

ずっと隣にすり寄ってきたラシルがリバーの袖をつかむ。

何か食いたいものでもあるのだろうかと思って、小銭を確認するためにポケットに突っ込んだ手を動かすと、どうやらジャンクフードぐらいなら何とかかなりそうな量の硬貨がジャラリと音をたてた。

「説明してくださいね」

甘かった。

小銭を鳴らしていた手が止まり、ついでに足まで止まり、恐る恐る振り向いたラシルの表情には目だけが笑っていない笑顔が張り付いていた。

「いろいろと」

どうやら、午後の予定は決まってしまったようだ。

はめたりはめられたり

宿に帰ると同時に紙袋の中身をテーブルの上にぶちまけ、紙パツクのオレンジジュースを投げてラシルに渡した。タンドリーチキンとナンは半分ずつ食べるとして、ケバブはどうやって分けようかと考えていたところでラシルが遠慮なくケバブに手を伸ばす。

ぱっくりとかぶりついて中の羊肉と野菜を引きずりだしながら食べている。あまり上品とは言い難い光景ではあったが、実においしそうに食べているので見ていて不快感はない。むしろ、口の中に羊肉の独特の味が思い出されてよだれがジワリと湧き出してくる。

そんな状態で齧ったタンドリーチキンの、実に芳醇な香辛料の香りに思わず目を剥いた。

こんな旨いものの初めて食ったと言わんばかりに一心不乱にナンにかじりついていると、無言でラシルがオレンジジュースを差し出してくる。もう半分ほどになったケバブは、まだまだおいしそうな魅力を振りまいている。

「説明、して」

うっかりオレンジジュースを手にとってからそれが策略であったことに気がついたのだが、もちろんその時には手遅れだ。せめてこの手にあるのがケバブなら、もう少し時間が稼げたはずだと思いいながら、口の中に広がる芳醇すぎる香辛料の香りが果汁のさわやかさを求める。

どの道話すことだったとはいえ、こんな形でイニシアチブを握られてしまっただけならは圧倒的に不利にならざるを得ない。

ストローから吸い込んだオレンジジュースは何とも酸っぱい。

「配達の仕事だよ、ただの」

「うそ」

もちろんこれでかわしきれるなどとは夢にも思っていないなかったが、それにしても早すぎる。

「あのさ、普通会話にはもうちょっと順序ってもんが」

「聞きたいことはたくさんあるんだから」

ケバブを一口。やばい、このままではケバブが食べつくされてしまう。さすがにタンドリーチキンだけでは物足りない。

苦渋の決断だ。

「わかったよ。配達の仕事でも、たぶん運ばされるのはやばいもんだよ」

もぐもぐもぐもぐ、ごつくん。

「やばいもの？」

口に物が入っている間に喋らないのを徹底しているのはラシルの生真面目さが見てとれてよいのだが、こうされると会話のペースまで持っていかれるのでリバーとしては少々やりづらい。

「ほんとに？」

疑問文にはいるが、そこには「何なのかはわからない、とは言わせない」というプレッシャーがたっぷり込められている。それが証拠に、ケバブをもう一口かじるぞとも言うような仕草が恐ろしい。

覚悟と言うよりも、あきらめに近い心境。

「ありゃ、クスリだな」

「くすり？」

もちろん、医薬品という意味ではないのは暗黙の了解だ。

「あの独特の臭いはたぶん。ある種の豆なんかは乾燥させて粉にしてから鼻とかの粘膜から吸い込むと最高にぶっ飛ぶらしいからな。それに、豆ってのは言いえて妙で、そういうのの隠語でよく使われる」

「それって」

「そ。俺は菓の売人まがいのことをさせられるんだよ。あくまでも俺の予想だけだな」

とはいっても、おそらくこの予想が覆されることはないだろうという確信がある。

注意の逸れたラシルからケバブを奪い取ってかぶりつく。

「なんで」

「ん？」

咀嚼しながら何とか返事をする、今度はラシルがひったくるようにケバブを取り返し、最後の一口をほとんどかまずに飲み込んでしまう。

「危ない仕事はしないって約束したのに」

「ああ、だから」

言い訳をする間ももらえない。いつもは大人しいラシルとは思えない剣幕で詰め寄る姿に、思わず尻ごみしてしまうほどだ。

「なのに、もうこんな」

「だうから落ち着いて聞けよ。誰も運ぶなんて言っていないだろ？」

「でも、仕事が見つかったって」

「だから、誰も運んでそこから金もらうなんて言っていないってことだよ。まったく、思ったよりあんたは思い込みが激しいな」

きよとん、という音が聞こえてきそうなほどにラシルの目が点になる。

「あのな、いくら金のために配達屋やるってたって俺にだって分別はあるつもりだ。ましてやあんな胡散臭いシャブの売人なんて百害あって一利なしだ」

「じゃあどうして？」

にやりと口元が緩む。ナンを食べたので口の中が渴いていたが、絶妙のタイミングでラシルがオレンジジュースを手渡す。

「簡単な話だ。後ろめたい商売の隙間を縫って儲けをせしめるのさ」

「上前をはねる、ってこと？」

ずばり言ってしまうと色気も何もない言葉になるが、全くその通りだ。ラシルがそんな言葉を口にするほうが意外だったが、こちらはこちらでまたそれなりに大変な旅をしてきたであろうことを考えれば納得できなくもない。

「でも、どうやって？」

オレンジジュースがわずかな苦みと甘味を残して喉の奥に滑り込む。やはりこうした肉類を食べた後のオレンジジュースは最高だと思う。

「さあ」

残っていたナンをちぎって、大きいほうとタンドリーチキンをラシルに差し出すと、ナンの切れはしをオレンジジュースでごっくする。

「それは相手の出方を見てからかな。今頃向こうでは俺をどう利用するか、算段が始まってるはずだ。俺みたいなぽつと出のわけわからん奴に大事な取引を任せるなんて考えられないからな。せいぜいが捨て駒か何かだろう」

それがわかっていてなぜ、とはもう聞かない。ラシルはその程度にはリバーを理解しているようだ。ただ、手配書を見た段階でここまでの絵を描いていたのだとすればかなりの策士か相当の悪者かだ。「ワルが悪いのは手くせだけだ。頭の悪い奴はワルにもなれないんだよ」

「でも」

何故とは聞かない代わりに、ラシルがさびしそうに口を開く。

「消されなきゃいいだけの話だよ。それに、クスリなんかで金もうけしてるやつらだけはどうも好きになれねえ。そんな奴のいいようにされるのも癪だからな。それに、俺の探し物も見つかるかもしれない」

おどけて眉毛をゆがめているリバーを見て、茶化するような態度をいさめようと口を開いたラシルは見た。

笑っていない目と、その奥にある底の知れない深い、闇。覗きこめば吸い込まれて、二度と戻れなくなるほどの暗い感情の吹きだまりは、リバーという人間の闇そのものであるような気がした。

「顔、怖い」

「お、悪い悪い。ちょっとムキになったか。ま、そんなわけで今回は金になるかどうかはわからんけどな」

「なにそれ？ お金稼ぐためにやってるんじゃないの？」

もっともすぎるラシルの言葉にもリバーは表情一つ崩さずに、口の端に付いたケバブのケチャップをぺろりと舐めて返事をした。

「さて、夕方からは大事な商売の話だからな。今のうちにゆっくり昼寝でもしておくか。今朝も早かったしな」

そう言ってソファに横になると、何を言う間もなく寝息が漏れ始める。

残ったタンドリーチキンとナンを咀嚼し、ラシルがそんなリバーの寝顔をまじまじと見つめながらつぶやく。

「悪い人じゃ、ないんだ。でも」

自分でも気づかないうちに口元が緩む。

「変な人」

聞こえていないはずなのに、リバーが苦しそうに唸り声をあげてごろりと寝がえりを打つ。

「あ」

そして気がついた。

聞きたいことはまだまだあった。あったはずなのに、答えを持っている男は実に満足そうな顔で夢の中にどっぷりとつかっている。

「明日、聞こう」

明日、その言葉が自分の口から出たことに少々驚きを感じながら、ラシルもベッドに横になる。香辛料のにおいのたっぷり残る部屋の中で見る夢は、きつとスパイシーなのだろう。そんなことを考えながら目を閉じる。

「彼は無実です、やってません！」

両方の拳を握り、力いっぱいスチールのデスクに叩きつけた。派手な音がするわりに、大して手のほうは痛くない。

「そう言われてもなあ」

新聞の三面記事に目を走らせながらのらりくらりと目の前の男が答える。たっぷり蓄えられた髭を撫でながら半分ほどになった煙草

を灰皿にねじ込む手は肉体労働者のそれとは違うごつさをしている。胸には星型のバッジが鈍い金色を放って輝いている。

「それを決めるのは裁判所の仕事だ。俺たちじゃなくて法廷に言ってくれや」

腰にぶら下げたオートマティックの拳銃がホルスターごと揺れる。

「そんな、でも現に」

「現に、あいつは死体の前にいた。よりにもよってヤクの売人の死体だ。その前後に店に入ったやつも確認されてないときてる。しかもあんた、昨日の朝は飯屋でもめごと起こして物騒なもん振り回してたらしいじゃねえか。うちの若いのが見てる」

隣では昨日の定食屋での騒動の、文字通り引き金を引いた若い警官が何食わぬ顔で調書にペンを走らせている。おそらくはこのやり取りもすべて記録されているのだという無言のアピールなのだろう。「そうだろう？」

見えない紐でも繋がれているように調書に走らせるペンを止めて若い警官が振り返る。

「はい。確かに」

「だそうだ。それに、あんたらは全く身元が割れてないときてる。俺じゃなくても拘束するぞ、普通。まだ留置程度で済ませてる分だけ温情主義だと思ってもらいたいね」

そういう口ぶりは実に尊大で、けっしてこちらを一つの人格とみなしていないことがありありと伝わってくる。ことによっては人としてすら見ていない、そういった空気が男の言葉からは見てとれた。「しかし、彼がやったという証拠は」

「証拠はこれから探す。あんたは必死になって無罪だって証拠を探せばいい。俺たちの仕事は議論することじゃなくて犯罪者を逃がさないことだ。それとも何か？ あんたは真犯人とやらを知ってるんでも言うのか？」

言葉に詰まったラシルを鼻で笑いながら警官は再び三面記事を読み進め、威嚇するように腰の拳銃や手錠をもてあそび始めた。

お前なんかいくらでも罪を作って檻の中に放り込めるんだぞ、
でも言うような態度。

ラシルが唇をかみしめる。

そのラシルに追い打ちをかけるように、若い警官が椅子を軋ませて振り返り、

「そうそう、女が来たら伝言頼まれてたんだ。独りでどこへなりとも行け、だ」と

ことが起こったのは夕方。もう日も傾いて空の色がオレンジ色と黄色のグラデーションになり始めたころ。夜の商売にはまだ早く、かといって昼間の仕事はそろそろ切り上げなければ遅くなる、そんな一日の中に何度か生まれる空白にも似た時間。

たつぷりと昼寝をしたリバーはバキバキと肩を鳴らしながら通りを歩き、隣を寝ぼけまなこのラシルが追い掛ける。この二日ほどの間に出来上がったこの距離を、リバーは意外と気に入っていた。

だから、わざと大股でゆっくりとした歩調にして歩き、時折ラシルが小走りに距離を詰めるのを視界の隅っこに入れる。歩くのが速いと文句を言えはいいのだろうが、そうしないのはラシルが「リバーの旅についてきている」という意識だからだろう。

遠慮と言えば遠慮だし、そんなものが必要だとは思わなかったが、そうしようとするラシルのまじめさがリバーには面白かった。

「寝過ぎた」

まだ頭がぼやけるのか、ふわふわと雲の上を歩くような感覚だったが、これはこれで悪くない。夕方独特の空気とまだ半分夢の中にいるような心地よさがある。

隣を見れば、やはり同じようにまだ眠そうなラシルがこちらを見上げている。

ひとつ気がついたのだが、ラシルは眠くなると目じりが垂れてかなり幼い顔立ちになるようで、いつものまじめで気丈なラシルとはどこかかけ離れた印象だ。

「何か？」

「いや、別に」

さすがに口調はいつものままなので、そのギャップが面白い。ついうっかり声に出して笑ってしまいそうになるが、そうなればきつと怒られるので必死になって我慢せざるを得ない。

家路を急いでいる労働者やこれからさらに仕事を詰めにかかる職人、さらにはこれから仕事が始まる女など、通りを歩いているだけで世の中のすべてをここに詰め込んだかのように錯覚してしまうほどだった大通りだが、それも路地を一本曲がるまでの話だ。

「あれ？ こっち？」

ラシルが路地の入口で足を止める。

「ん？ ああ」

この路地を進めば豆屋のある通りに行きつく。当然、ラシルは先に調整に出している銃をとりに行ってからそちらに行くものだと思う。い込んでいたということだろう。

「いんだよ、これで」

腑に落ちない様子のラシルを手招きしてリバーはどんどんと路地を抜け、ここだけは昼間の活気そのままに賑わっている一角に足を踏み入れる。どうやら食べ物を扱う店が多いこともあって、夜昼間わずかにぎわう場所らしかった。

「でも」

雑踏に足をふみ入れる直前でラシルが外套のすそを握る。

ツンと引つ張られる感触にリバーは足を止め、肩をぶつけた小太りの親父に睨まれながら振り返る。

「だいじょぶだって。それに、まあなんていうか」

心配そうに見上げるラシルの頭に手のひらを置き、ポンポンと軽くたたく。首をすくめるようにしたが、まんざらでもないようで、手を当てられたあたりを嬉しそうに両手でさすっている。

「備えあれば憂いなし、ってやつ？」

そういうと再び踵を返し、器用に人を避けながら雑踏を泳いで渡

ってゆく。

この時間帯の人間はだれしもが目的を持って歩いているわけではないせいか、動きがまちまちで昼間とは違う動きにくさがある。あるものは家路を急ぎ、ある者は仕事から解放された解放感にのんびりと歩き、あるものは怪しい呼びこみにふらふらとついて行ったりしている。活気のある町というのは夜を見ればわかると言うが、この街はまさにそれだった。

「この一角だけは除いて、だけどな？」

昼間と同じ店の前に立つが、そこだけは周囲のにぎやかさからは取り残されたかのように影が落ちている。とはいっても、実際には入り口にはランプの明かりも灯っているし、特別な何かが見てとれるわけではない。ただ、誰もがこの店を避けている。

「この店って、こんなだった？」

溺れるように人波を抜けて、ようやく追いついたラシルが開口一番そう言ったのも無理からぬことだろう。

「こんなだった……って言ったらうそか？ まあでも、大体こんな感じだろ」

適当に答えざるを得なかったというのが本当のところだが、それをうまく隠せたかどうかは自身がない。ラシルならそのあたりのごまかしを見抜いていそうな気がするから怖い。

「何かあれば一人でこの街を離れる。バイクのキーは宿にスペアがある」

失敗だったのは、命令口調で言ってしまったこと。たぶんなにがしかの緊張が伝わってしまったのだろう。深刻そうな表情でラシルがこっくりとうなずいて、棒でも呑んだようにその場に立ち尽くした。

こんなだったか？ そんなわけがないと内心で毒づいたのと、ここに来たことを失敗だと直感したのとはほぼ同時だった。

足を踏み入れた瞬間に鼻についたのは、肉の生臭さと鉄のにおいを緋い交ぜにして鍋にかけたような不愉快極まりない臭い。何があ

るのかなど見なくてもわかりそうなものだったが、もうここまで来てしまえば見ないわけにもいかない気がした。

意を決して豆の詰め込まれた袋の間を抜け、頑丈な作りの扉を引きあける。

とたんに、それまでのものとは比べ物にならないほどの臭気があるふれだし、その奥に何があるかを如実に伝えてきていた。

「うわっ…」

文字通りの血の海だった。

どうなっているのかについては、何もかもが引き裂かれているとしか言えない。もし鼻をふさがれた状態でこれを、トマトジュースの入った麻袋をずたずたに引き裂きました、と言われても信じられただろう。

問題はどうかやってそれをやったのか、だ。

「動くな！」

背中から声が聞こえたときに、改めて先にこちらに来てよかったと思った。手元に銃があれば間違いなく抜いていたはずだ。これだけ充滿した、むせかえるような血のにおいの中でなら当然の反応だ、とでも言うように。

「動いたら、どうなる？」

ゆっくりと開いた両手を頭の高さまで上げながら舌打ちをする。

はめられた、それもものの見事に。へたな策氏は相手の行動を可能性として取り入れて策を練るから失敗の要素が発生するが、すぐれた策士は相手の行動を包括するような策を作りだす。相手の打つ手にかかわらずに同じ結果が出せるように。ときには、相手が策にはめられたことにすら気付かせないほどに狡猾に。

「どうにもならんよ。死体が“もう一つ”増えるだけだ」

少しだけ振り返って確認すると、警官が二人、こちらに銃を突き付けながら店の入り口をふさいでいる。

すぐ横をすり抜けるようにして部屋に入ってきたのはまだ若い方の警官で、実に仰々しい態度でこちらを振り返ると、ほくそ笑みな

がら、勝ち誇ったような視線をからめてくる。

「どうやらたつぷり聞くことがあるようだな」

後頭部に、わざわざそうする必要もないのに銃口が押し付けられ、ぐりぐりとねじこまれる。

「俺は話すことなんか、ないんだけどな」

奥をひとしきり確認した若い警官がリバーの手首に手かせをかける。ジャラリという鎖の音がなんとも大げさだとは思ったが、その重さよりもむしろ両手の自由を奪われることのほうが苦痛だ。

「あろうが無かろうが吐いてもらう。それが俺たちの仕事だからな」
うんざりするような権力の誇示は聞き流し、駆け寄ろうとするラシルを目だけで制してリバーは歩きだす。今自分のところにくれば間違いなく同じ目にあわされる。そうやってしまうのだけは避けなければいけない。かといって、自分だけがここを切り抜けたところで同じだろう。警官がラシルの存在を見て見ぬふりをしているだけだとすれば目も当てられない。

少なくとも、今回の罠を考えたやつは実に巧妙に仕掛けを施し、最高のタイミングで警察まで動かしている。となれば、その中で動いたところでデメリットのほうが大きいと考えるべきだ。

「おら、とつとといけ」

尻を固いだけ取り柄とでも言うようなブーツの裏で蹴りつけられて、否応なく通りを進まされる。

「覚えてろよ」

目の前の警官だけではなく、この仕掛けを仕組んだどのどいつかわからないやつに対して、リバーは口の中だけで呟いた。

「なあ、あれでよかったんだろ？」

雑踏を外れた路地の影からリバーが連行されるのをらんらんとした眼で眺めている男が訪ねる。昨日、朝の定食屋でリバーに追い払われた賞金首だ。どうやらベルトは買い換えたようで、妙にピカピ

カのバックルが安物っぽい。

「ああ、上出来だ」

隣では金髪の男が見向きもせずに答える。

フリード・G。しかし、その形相はすでにリバーに敗北した時のそれではない。

サングラスで目元を隠しているから表情は読み切れないが、口元が我慢しきれない笑いに震えている。ただ、喜んでいるとかそういう類の笑みではない。どちらかと言えば、狂気に近いような笑み。

「もう、もういいんだよな？ 俺はもう消えるぜ」

「ああ、ご苦労だったな」

フリードが雑踏の中に姿を消す。

ドサリと、路地の奥で何かが地面に落ちる音がする。

「で、あいつは今檻の中、か」

今日の作業を終えたウェーランドが作業台の上を片づけながら抑揚なく言う。おそらくは言葉のままに大して興味もないのだろう。

「はい」

結局、面会一つさせてもらえなかったラシルは当てもなく夕闇の街を歩き、せめてリバーのためにできることを、と思ってウェーランドのもとを訪れた。

今日の夕方、という約束だったはずだ。

「まあ、あいつの場合はそれも考えのうちだったんじゃないのか？ あの無茶苦茶なやつがおとなしく警察の世話になるなんて思えないしな。ほら、物はもうできてる」

カウンターのの上に、新品のようにピカピカに磨かれたリボルバー式の拳銃が重い音をたてておかれる。

「ウェーランドさんは、彼のことをよく知ってるんですか？」

「馴染みの客だ」

作業台の明かりを消し、カウンターに向き直ると一日の終わりを告げる煙草に火をつけた。決して高価なタバコではないただの紙た

ばこだった、これがなければ一日が終わった気がしない、というのは職人見習いのころからの習慣だった。

「爺さんの代からのな」

細い煙が吐き出され、独特のニコチン臭が工房に広がる。

「どういうことですか？」

「どうもこうも、そのままの意味だよ。俺の爺さんの代からの常連客だよ、あの男は。何の因果か知らんがな。なんでも砂漠でくたばりかけてんのを拾ったのが最初らしいが」

ゆつくりと煙を吸い込み、吐き出す。

「腐れ縁だよ」

『くたばりかけていた』という言葉が引っかかりはしたが、それ以上にラシルは興味深そうにウェーランドに詰め寄る。

「おじいさんの代から、ですか？」

「そうだ。俺が物心ついた時にゃあいつはもううちの常連だったよ」
そういうウェーランドの年齢は決して若くはない。祖父はおろか、父親もどうやらここで作業をしていないところを見ると引退したとみて間違いないだろう。引退していないとしても、ウェーランドが跡目についてからずいぶんと経っているはずだ。深いしわの刻み込まれた顔と手が、それを物語っている。

「あの顔でな」

リバーの言葉を何度も何度も反芻する。いや、これまで、たった一日の間に数え切れないぐらい反芻したことばがようやく少しだけ飲み込めた。

死なない。

比喻でも何でもなく、銃弾で頭と心臓を吹き飛ばされても、職人の工房が三代にわたって代替わりを繰り返すような時間を生きても死なない存在。

「彼は、何なんですか？」

思わず口にした疑問を飲み込もうとするがもちろん間に合わない。言葉はこぼれおち、ウェーランドのたばこからは灰が落ちる。

「客だよ」

はっとなる。

「相手が化け物だろうが神様だろうが殺人鬼だろうが聖職者だろうが、俺にとっちゃ客だ」

そう言っただけで吸い終わった煙草を灰皿にねじ込んで火を消す。

なんとなく、リバーがこの工房を選ぶ理由がわかった気がして、ラシルは小さくうなずいた。

紙袋に拳銃を入れて立ち上がる。

「喋りすぎた。忘れてくれ」

帰りがけに背中に声を投げかけられる。

扉を引きあげ、月明かりも届かない路地に踏み出す。かろうじてそれぞれの工房が軒先にランプを掲げてはいるがそれでも明るいとは言いがたく、注意して歩かないとすぐに何かにつまずいて転んでしまうほどだ。幾重にも重なった屋根が、空を迷路のように細く切り取っている。

「あいつ、捕まったんだ」

そんな暗闇の中から声をかけられても驚かない異様になったのは、リバーというせいでそんな騒動にも慣れてしまったからなのかもしれない。

「誰？」

振り返ると同時に胸元の紙袋が強烈に意識される。

「は、いい、あたし」

「と、僕」

ラシルの眼に映ったのはリバーよりもさらに巨大なシルエットが一つだけ。

まだ暗闇に慣れていない目を凝らしてじっと見つめると、ランプのオレンジ色にはんのりと輪郭が照らしだされてくる。

セフィとその弟の口。

「あ、そんなに警戒しなくてもいいから。あたしらが追っかけるの

はあくまでもあの野郎だけだから」

コンパクトな体に似つかわしくない起伏の激しい体が、妙にエロティックにランプの明かりを受けている。ショートカットなので、うなじのラインまでもが艶めかしい。

「そう言われて信用するほどお人好しでは」

後ずさりするラシルを、実に乱暴な足取りで距離を詰めたセフィが捕まえる。両肩を勢いよく掴まれて思わず肩をすくめたラシルだったが、そんなものお構いなしセフィが続ける。

肩越しに見たロトが少し申し訳なさそうにただでさえ細い目を細めている。

「利害関係が一致すると思うの」

「は？」

思わず間拔けな声を上げるが、そんなことを気にする性格ではないようで、さらにセフィがまくしたてる。

「あいつが檻の中にいて困るのは二人とも同じ。あなたは旅を続けられない、あたしらはあの男を捕まえてしかるべき場所につきだすことができない。となれば」

ここまで聞けばいったい何を言っているのかわからない方がどうかしている

「チャンスは今夜。明日になればたぶん留置所に移されるか、最悪どこかに移送されてそれこそ本当に手出しができなくなる」

「でも、本当にリバーさんは」

「やったかやってないかなんか関係ない。あいつらに必要なのは『捕まえた』という実績。事実なんて後からいくらでも作り出せるのが警察ってやつよ」

そんなことをするはずがない。そう言いきれないラシルの胸が唐突に不安で潰れそうになる。

「そうなるとさすがにあたしらも困るのよね。いくらなんでも脱獄させるわけにはいかないし。今なら連中の面子のために逃げたら逃げたで、ってことになるだろうし」

実に真剣にそんなことを言うセフィを見てみると、リバーとこの二人の因縁というのはただただ陰鬱とした追う側と追われる側なのではなく、何かもっと深いものがあるのではないだろうかと推測する。それが何であるのかは到底想像もつかないにしても、もしかしたら今回の話を信用する程度には値するのではないかと、と。

「で、問題はどうかやってカチコミをかけるかなんだけど」

「姉さん、そういう物騒な言葉はどうかと思うよ。僕らがやるのは単なる陽動なんだから」

さすがに止めに入るロトはあきれるを通り越して、かなしそうな表情になっている。

「なによ、同じでしょ。警官おびき出してその間にあの野郎を引きずり出すだけじゃん。どう言いつくろったって」

「ずずずずず……」

地響きとも地震ともつかない振動が足元から伝わる。

最初に駆けだしたのはセフィで、ラシルの体を押しつけるようにして路地をかけ下ってゆく。あと追うようにして、ラシルが走る。ロトはがたいのでかさが災いしてラシルの後ろについて行かざるを得ない。

どこをどう走っているのかはわからなかったが、セフィの後を追って何とか通りに飛び出したラシルは、セフィの視線の先を追って顔を向ける。

「あれってさ、警官の詰め所があるあたりじゃないか？」

もうもうと巨大な煙が立ち上っている。何事かと通り沿いの店にいた人間や住人たちが窓から顔をのぞかせ、通りに踏み出しては口々に好き放題を言い合っている。

「爆発だよ、あっちの一角が赤く光って、窓が割れるかと思った」

エプロンにサンダルで飛び出してきた初老の女が、自分が第一発見者であることを触れまわっている。

「これって」

ラシルが何かを言いかけてセフィを見ると、さもそれが正解とで

も言うように苦笑いを浮かべる。

「こんなトラブルが降りかかるのはあいつぐらいのもんでしょ。ほんと、探すのに苦労しないやつだわ」

「でもあいつ、今丸腰なんじゃないの?」

追いついてきたロトがぼそりと言う。

ラシルの胸元には、ずしりとした重量感のある紙袋が一つ。ただ、何かを躊躇うようにラシルは二人の顔を交互に見つめる。

「別にあたしらに気兼ねする必要ないんじゃない? それに、あたはあれを旅の連れについて選んだんでしょ? だったら、自分が思うようにやれば? あたしらの用事はそのあとでもいいわけだし」ただでさえ大きな胸を突き出すものだから、ラシルの目の前のセフィは半分ほどが胸でできてるように見えてしまう。

「ごめんなさい!」

叫ぶと同時に駆けだすラシルの背中を、セフィとロトの二人がやれやれと言った様子で見送る。

「姉さん、なんで行かせたの? あいつ、この一件が片付いたらまたどっか行くんじゃない?」

そんなことを思ってもいなくせに、ロトがセフィの二の腕を肘で小突く。

「そうなればまた追っかければいいだけじゃんあたしらはどうせ時間制限のない鬼ごっこなわけだし。それに」

「それに?」

ふっとセフィが鼻で笑う。

「あたしらにごめんなさいだって。お人好しにもほどがあると思わない?」

まんざらでもなさそうに、ほくそ笑んだセフィは残念ながら実にオヤジ臭い笑顔で歩き出す。

「また面倒なことに巻き込まれそうだね、姉さん」

「あたしらが追っかけてんのはそういうやつよ。あきらめなさい」さらに一発、今度ははっきりと炎が上がり、地響きのような振動

とともに周囲の建物の窓ガラスがびりびりと震える。
黒煙が、より一層激しく空に向かって登ってゆく。

災厄は嵐のように

詰め所の建物はほとんど原形をとどめないほどに倒壊した。

瓦礫の中から血だらけの警官が起きあがるが、幸いに命には別条がないようで、互いに体を支えあいながら何事かと怒鳴りあっている。

「これも貴様か！」

年上の警官のほうが、かろうじて倒壊を免れた牢屋の中にいるリバーに向けてわめき散らす。

「んなわけねえだろ。俺が何できんだよ、丸腰で手枷はめられて。

そんなことよりもう一回ぐらい来るぞ」

言わなければよかったと思う。まるで自分の一言を引き金にしたかのように、第二段がまだ生き残っている部分の壁をかなりの勢いで叩いている。爆薬による爆破ではなく、すさまじい勢いで銃弾が叩きつけられているような衝撃。

「伏せろ！」

叫んだと同時に、今度はすさまじい勢いで建物が揺さぶられ、見る間に壁や天井が碎けて崩れ落ちてゆく。瓦礫をよけるのに必死な中で、何とか見つけた警官二人はかろうじて建物の外に脱出できていたようだ。

爆破の威力が強すぎてコンクリートが粉々になってくれたおかげで瓦礫の下敷きになってしまいうようなことはなかったが、それでも半ば以上埋まってしまった体を引っ張り出すようにしながら立ち上がるのは苦痛だった。

もうもうと立ち上る砂埃に口の中がじりじりで、砂嵐の中にいるように視界が悪い。

「まったく、誰がこんな助け方してくれって言ったよ」

こんな有様になってもまだ倒れずに生き残った鉄格子にけりを入れると、乾いた音を立てて瓦礫の上に倒れ落ちた。いざとなればあ

れを破って逃げなければならなかったことを思うと、これは不幸中の幸いなかもしれないと思いいこうとして、

「やっぱ不幸中の不幸だわ」

何とか収まり始めた砂埃の向こうにあるシルエットを見つめてぐったりと肩の力を落とした。

詰所の裏手、工房街が何かの搬入や搬出のために使うつもりで作られたかなり幅広な道が街灯にも照らされずに大きな口をあけている。そこに立ち尽くす男にははつきりと見おぼえがあった。

二十四時間の間に二度見たいとは思えない顔だなと思いつながら、リバーは外套の埃を払ってできるだけゆっくりとした動作で男に向かい合う。

「リベンジにしちゃ、ちょっと申し込みが強引だな」

手にしていたのはかなり大口径のガトリングガンだったが、男はそれをためらいもなくその場に投げ捨てる。

フリード・Gが自慢のサバイバルナイフを引き抜いて逆手に構える。

「ほんとに殺すなって言われてるんだがな、やっぱ無理だわ、我慢できねえ」

「何言ってるんだ？ プロ失格なんじゃないのか？ 思いっきり警官に見られてんぞ」

皮肉のつもりで振り返ると、埃まみれで拳銃を構えた警官が信じられないことを叫んだ。

「フリード！ こんな話は聞いてないぞ！ これはアヴァルタさんの知っている話なのか！？」

「ちょ、何言ってるんですか？ 班長、あいつのこと知って」

「やかましい！ おまえは黙って言うことを聞いていればいい。そんなことよりフリード！」

哀れなまでに狼狽した男の声は金切り声のようで、先ほどの横柄な態度からは想像もつかない。

「何か言ってるぞ？」

動くたびにジャラジャラとなる手かせが鬱陶しい。

「知るか。あとでぶち殺して終わりだ。んなことより、ざまあねえな」

他のものが目に入る余地はないようだ。フリードの視線がまっすぐにリバーだけを見つめている。その視線には、常軌を逸した何かを感じる。

「雰囲気変わったな」

「そんなことはないさ。俺はもともと、殺しさえ楽しめえばそれでいい。それもな」

言いながらあつという間に距離を詰め、口元をゆがめて笑う。そして見える、サングラス越しの赤い目。

「お前！」

振り下ろされるナイフのキレが昨夜のものとは比較にならない。

ぎりぎりでかわしてカウンターで蹴りでも入れてやるつもりだったのが計算違いだ。かろうじて手首の間の鎖で受け止めるが、あまりの重さに油断しきっていた膝ががっくりと折れる。

「お前、あれを使ったのか？」

「だったらなんだ」

ギシギシと鎖がきしむ。囚人を捕まえておくための鎖が頑丈でないはずがなかったが、それがいつはじけ飛んでもおかしくないような力が掛けられている。

「すげえなこの目薬。いくらでも力はわいてくるし、今までの自分がどんだけカスだったかがよくわかる」

「ドーピングしてまで俺に勝ちたいかよ。それより、それをお前に渡したやつは、どこだ！」

鎖でナイフの刃を滑らせ、思いきり鳩尾に蹴りをぶちこむ。手加減は、一切しなかった。

とびすさって距離をとるが、さすがに表通りに逃げるわけにはいかず、フリードの背後をとる形で搬入路のほうに行かざるを得ない。「どこだって関係ないだろう？」

全くダメージなどなかったかのようにゆらりとフリードが立ち上がる。先ほどの衝撃でつるの壊れてしまったサングラスを投げ捨て、再びリバーに向けた目はまるで血で染めたかのように真っ赤だ。

「俺を殺せたら教えてやるよ。もっとも、今の俺が死ぬとは思えねえけどな」

完全に狂気にまみれた笑みが張り付いた表情は、おぞましさを感ぜさせた。

「死んだら教えられねえだろ、うそつき」

皮肉っぽく言ってやる。

「なあ、どうなってんだよこれもアヴァルタさんの」

「馬鹿！ はなれてろ」

立ち位置を逆転させたのが災いした。

狼狽しきった表情の警官がフリードに駆けより、懇願するようにすがりついた。

どうなるかなど、考えるまでもなかった。

警官の両手がフリードに触れるか触れないかのところで、

どさ

警官の首が、瓦礫の上に落ちる。何が起きたのかわからないと言うように、しばらくは探るように動いていた両手も間をおかずに動きを止め、その場にくず折れる。

「不用意な口は、ふさがないと」

「そんだけの力が引き出されてるってことは、かなりの量が与えられたみたいだな」

与えられたのは目薬タイプだろう。あの真っ赤に染まった目を見れば間違いはなさそうだ。

「ご機嫌だねえ。世界樹の血、ブラッディ・アイとはよく言ったもんだ。俺もこの方見たことはなかったし、まさか本物がこの世にあるなんてな」

世界樹の血、ブラッディ・アイ、神の眼、呼び方は様々だが一様にある種の目薬タイプの麻薬を指す言葉で、その効果はまさにその

名にふさわしいまでの力を与え、ありとあらゆる能力を人知を超えて引き延ばす。

「話ばっかで、俺もそんなもんがセだと思ってた。しかし、ここまではな。今まで出会わなかったのが悔しくて仕方がねえ」

跳躍する。

来るとわかっていてさえ、必死に見なければ反応できない速度に、リバーは飛び退りながら何とか手枷の鎖でナイフを受け続けるが、防戦一方にならざるを得ない。しかも相手はほぼ無尽蔵の力をいいことにごり押しの戦術をとってくる。

「うはっ、昨日とは逆だな、配達屋あ！ 心配すんな、お前やった後はあのがきだ。世界樹の種だか何だか知らねえが、きっちりおんなじところに送ってやるよ！」

狂気の笑みを浮かべ、血の色の瞳が息がかかるほどの距離に迫る。絶叫に近い言葉とともに振り下ろされたナイフが、とうとう鎖を引きちぎる。

「おわりいいいいいい！」

返す手でナイフを振り上げ、全体重を乗せた刃が心臓めがけてつきたてられる。

「うっせ！」

自由になった両手を引き寄せ、コマのように体を回転させる。回転軸は一瞬たりとも固定せず、曲芸に近い動きでナイフをかわす。心臓をとらえ損ねたナイフが顎先をかすめ、頬にまで軽く血の筋を引く。

その回転のままに、思いきり右足を叩きつけた。ブーツの固さには自信がある。

めり込んだつま先に、確実に肋骨とその奥の内臓がひしゃげる感触が伝わる。交通事故並みの衝撃。

「あいてっ」

さすがに着地のことまで考えられなかったが、尻もちをつきながら見たフリードは半分以上が瓦礫の山に埋もれている。

「つたく、とんでもないもん送り出しやがる」

おそらく、あの程度で死にはしないはずだ。それどころか、すぐに起き上がってくる。麻薬を使った人間の興奮状態や神経が麻痺していることからの打たれ強さは折り紙つきだ。それにも増して今フリードが使っているのはよりにもよってあのブラッディ・アイだ。単にメンタリティの麻痺だけではなく実際にありとあらゆるステータスをすさまじく上昇させる。

「それにな、残念ながらあいつは俺とおんなじここには来られねえよ」

外を見れば、いったい何事かと集まってきた野次馬たちが詰め所を覗き込むようにして中の様子を探っている。

「ばか！ とつとと逃げてろ、じゃないと殺されるぞ！」

さすがにこんな不特定多数の人間に気を配りながら今のフリードの相手をするのは不可能だ。一瞬でも意識が逸ればあの速度のナイフをよけられる自信はなかった。

「なんだ、あいつの言うとおりでな。お前はどこまでもその偽善を貫くわけだな」

埃にまみれた金髪を振り乱すようにして起きあがり、フリードはぎらついた視線で周囲を睨めまわす。

「ば、やめろ！」

「はっは、やめるかよ！」

リバーの制止などもちろん気うはずもなく、フリードは全速力で詰め所を飛び出し、サバイバルナイフを振り上げる。何が起こったのかが全く把握できない野次馬たちはただ茫然とナイフの照り返す月と街灯の明かりに目を奪われているようだ。

「だから逃げろつつたのに！」

ぎりっ、という耳障りな金属音を立てて手首から衝撃が昇ってくる。こんなところで役に立つとは思ってもみなかったが、それでもこの手枷の強度ならあと二、三度が限度と言うところだ。

「殺される」

誰かが震える声でそうこぼしたのがきっかけになった。

パニックになった数十人の野次馬が我先にと走り出し、前にいるものを押しのけるようにしながら逃げ出してゆく。

「人間ってのはこうも浅ましく、薄汚いもんかねえ。己が助かるために他人を踏み台にする。いいねえ、俺はそういう傲慢で利己的なところが好きだあ」

言いながら真っ赤な目をひんむいてリバーに「そう思わないか？」などと毒を吐く。

「そうかもな。俺もその辺は、同意、するわ」

押し返すだけで精いっぱい馬鹿力。おそらく並みの人間が並みの肉体で行使すれば自らの力に負けて体がぼろぼろになるほどの力のはずだ。

「そうだろ？ だったら、こんな街も人間もなくなってしまうばい」と、思ったことはないか？」

「ないね」

即答するが、フリードにとってはリバーの返答などどうでもいいようだ。

「俺はある。何もかもに嫌気がさして、何もかもをぶち壊してやりたくて、殺して殺して殺しまくってきた。それがな、俺がここにいる理由だと思ってる」

狂っている。それは薬による意識の暴走などではなく、それ以前から狂気をずっとはらみ続けてきた、それがこのフリードという男なのだ。

「だからって殺していいことにはならんだろう」

「なるね。だから俺はお前を殺す。偽善を語ってそんな人間を生かそうとするお前は、俺の敵だ。そのためなら何だってやってやるさ」

「たいそうな、思考、だな」

そういう間にもナイフは手枷を圧迫し、いつ手首ごと持っていかれても貸しくはない。

まずい。完全に相手の力量を見誤った。ここまでリミッターをは

ずして、なおかつ薬の力を引き出しているとは思えなかった。

「だから、この街ごとぶっ飛ぶような実験に手を貸すのか？」

理論が破たんしている今だから、通じる言葉だった。

「そうさ。俺はあの女に協力することにしたのさ。何もかんもをぶっこわして、殺して、終わらせてやる」

安っぽいひっかけだとは思ったが、おそらく引かなかったのはその事実すらこの男にとってはどうでもいいことなのだろう。退廃的な思考を突き詰めて、そこに性悪説が重なった結果がこれだとすればそれもうなずける。

ただ、それが本当ならこんなところで油売っている場合ではない。その焦りのほうが大きくなる。

「けどな、一つ思い違いをしてる

「なんだ、よっ！」

力任せに腕を振り抜き、バランスの崩れたフリードの脇をすり抜けるようにして距離をとった。ずっとナイフに晒されていた左手がうっすらと痺れている。

「俺が動くのはそんなご立派な思想信条のためなんかじゃない」

「立派でもねえんだけどな」

皮肉が通じるならどれほど楽だっただろうか。

「今の俺にはな、お前をぶち殺すことがすべてだ。お前は俺を生かした。お情けのつもりなのかも知れんが、生かされた。そして俺は逃げた。無様に、惨めに、かつこ悪く逃げた。俺はな、俺自身さえ殺せなかったんだ！」

論理が破たんしているとは思ったが、それは薬のせいで肥大化したエゴの産物だろう。この男にとっては自分でさえもが排除すべき人間の一つでしかない。

「だからって、お前が手を貸している実験が何なのか知ってるのか？」

「知ってるさ。聞いたわけじゃねえが、どうせ世界樹をどうにかしてとんでもないエネルギーだか利益だかを引き出そうとしてるんだ

ろう？　どうでもいいこった。むしろそれで街が消えて人が消せるんなら俺には好都合だ」

「どうやら薬で飛んじまっただけ、ってわけでもなさそうだな」

「ああ。むしろこれが俺の本音だ。頭はすっきりしてる。むしろ今までの俺の方がいろんなものに惑わされ過ぎていた」

ただの狂人であればそれなりの扱いでもよかったが、自分の目の前にいるのがつくづく厄介な相手だと実感させられる。

「二つに一つだ。その偽善を押し通すなら俺を殺してあの女のところに行く。それができないってことは所詮偽善は偽善、お前が死んであいつらの思うつぼってわけだ」

「洗いざらい吐いてもらおうぞ」

「リバー！」

逃げ出す人の津波のような流れに逆らって、溺れるようにして小さな体が飛び出す。

これだけ図ったような絶妙さで出てこれては、どこかで見ていたのではないかと思ってしまう。

「おっせえ！」

小さな体を目いっぱい使って紙袋を放ってよこす。

緩やかな放物線を描いて飛ぶ紙袋は格好の的でしかなく、そこを狙えばいくらでも優位に立てたはずのフリードがそうしないのがリバーにとってはありがたかった。

ピカピカの銃に弾を込めながら、何かが抜け落ちたような視線でこちらを見つめるフリードをにらみ返す。

「お前も人間だってことだな」

「知ってるよ、いやってほどな」

サバイバルナイフを投げ捨て、背負っていた筒を引っ張り出す。長さにして一メートルほどの鞘から引っ張り出されたのは、ナイフよりもはるかに長い刃渡りの軍刀。キレ味と間合いでいえばナイフのそれとは比べ物になるはずもない。

「ラシル、離れてろ」

シリンダーを戻し、ちらりと視線だけで促す。

「よそ見とは、えらく自信家だな！」

腰だめに構えたまま地面を蹴る。間合いが詰まる時間は一瞬。詰められれば、負ける。

ドッ

威嚇がきかないことなどは百も承知だ、だから当てるしかない、そう思って放った一発が銀色の欠片をはじけさせて明後日に飛ぶ。クルクルと宙を舞うサバイバルナイフ。

「冗談だろ！」

フリードの蹴り上げたサバイバルナイフが銃弾をはじいた。

弾が見えている。

「んなくそっ！」

三連発に望みを託すが逃げ腰の弾丸は確実に見切られて、ボクサーのフットワークのように銃弾を紙一重でかわす。

「銃弾が見えるなんてな、あいつらが神を作るなんていう戯言を本気で言ってるのもうなずける」

沈むように踏み込まれる。

そこからの速度は、クイックドロウの比ではない。つまり、

「迎撃は不可能だ」

「くそったれ！」

軌跡だけが光の筋になって見える。一瞬の起こりだけを見てあとは予測だけで補完された軌道をかわず。

防弾防刃繊維のはずの外套が所々引き裂かれ、頬やズボンも無数に血の筋が描かれる。

避けるだけが精いっぱいの一瞬に、何を思ったのかラシルに視線が向いた。

「だあかあらあ！」

声に気がついた時には自分の失態を呪う間も与えない一撃が、目の前にあった。

「あうっ！」

左目に鈍い痛みを感じ、同時に引き抜かれる刃の感触が脳髓をえぐる。

「何だ、義眼かよ」

「だったらなんだ。俺の大事な目だったのに」

どうでもいいとでも言うように刀を振って再び構える。

ギィン！

「んなろっ！」

どれだけ速かろうとそこに在るものにあてられないような時間を重ねてきたつもりはない。あとはウェーランドの腕を信用するだけだった。

抜かれた刃が砂煙に黄ばんだ空気を真っ二つに切り裂き、何とか銃弾にはじかれる。狙ったのは鏢の部分。バランスを崩したフリードの右腕が跳ね上がる。

「当てるのか？」

「終わりだ」

ラスト一発。上段に構えたフリードの両腕の間に腕を滑り込ませ、銃口を眉間に突き刺すようにねじ込み、

「ってことで、いいな」

引き金は、引かなかった。

軍刀が力の抜けた手から滑り落ち、フリードの背後に突き立つ。

それでも眉間から銃口をはずせなかったリバーの弱さを、誰が責められただろうか。

黒幕はいつでも裏から

動かない、正確には動けないフリードの体を横たえながらリバーは切り裂かれて使い物にならなくなった義眼をもてあそんでいる。幸い眼窩に傷はなく、見事に眼球だけに刃が当たっていたようだ。とはいえ、視神経に繋がって視力も持っている目であるだけに、神経を切断するまでの痛みは思い出すだけで股間が縮みあがる。

「そりゃ、そうなるわな」

修理が不可能だと判断した眼球を投げ捨て、リバーがフリードの呆けた表情を覗き込む。ラシルは隣で泣きじゃくってリバーの外套のすそをつかんで離さない。義眼であることを知らなかったラシルにとってはかなりのショックだったようだ。

「バラバラになりそうだ」

「本来は器のほうを作ってから使うべきなんだ。それでも生半可な人間なら精神から何からぶっ壊れて廃人になることもあるのに、生身で生きてるお前なら、あいつらには格好の研究材料かもな」

通常の色に戻った両目は、ブラッディ・アイの効果が切れていることを示している。

「で、何が聞きたい？」

声を出すのもつらいのだろう、うめき声と判別のつかないような喋り方でフリードが言う。

「主犯はだれだ？ どうせそいつらがアヴァルタってのをそそのかして実験するように仕向けたんだろう？」

「名前は知らん。ただ、恐ろしくいい女だったことだけだ」

「女？ 男じゃなくてか？ 本当にか、男じゃないのか？」

意外だったのか、リバーが表情を曇らせる。

「くどい。絶世の美女ってのはああいうのを言うんだろうな。あれなら神だろうがなんだろうがたぶらかせる。最初はアヴァルタからの命令でその女をさらってくるだけだった。それがいつの間にか、

アヴァルタ本人じゃなく、そのパートナーだとかぬかす女から話
来るようになった」

「俺の邪魔をするように、って？」
頷く代わりにまばたきをする。

「薬もその時にもらった。それでもお前は殺せないなんてぬかしや
がった。まさかその通りになるなんてな、くそったれ」

毒づく声音にも力がない。

「何のためにラシルが必要だ？」

その問いにフリードからは返事はなかった。

「教えてあげよっか？」

問答無用で振りかえりざまにリバーは引き金を引いた。隠そうと
もしない殺気はフリードの比ではない。抜き身の刃を無数に突き立
てられたような暴力的な殺気が、何の前触れもなくそこに現れた。

「あら、ごあいさつだこと」

「リバー！」

銃弾はかろうじて背後に現れた女のうなじをかすめて外れ、幾筋
かのプラチナブロンドが月の明かりに輝いた。

女の腕が、ラシルの首にかかっている。殺そうと思えばいつでも
殺せる、というアピールに見えたのは先ほどの殺気にあてられたか
らかもしれないが、それでもリバーの神経を逆なでするには十分だ
った。

「へえ、実物は初めて見たけどほんとに若いのね。あなた、ほんと
に五十年前の被験体？」

「あの目薬が使われてたからまさかとは思ったけど、まさか本当
にあいつに行きつくとはな。そいつを返せ。俺の荷物だ」

クスクスとあいている左手を口元にあてて笑うさまは、フリード
の言葉通り絶世の美女と呼ぶにふさわしい。ただ、リバーがそれを
特定したのは女の美しさではなかった

「まだ配達屋さんを気取るつもり？ みんな探してるのよ、あなた
のこと。なにせ唯一の生存者だし、成功例なんですからね」

「どうやら、本命ではないもののあたりを引いたようだった。」

「探したのはこっちだ。あいつのこと、洗いざらい吐いてもらうぞ」
長い時間の中でも決して忘れることのできないにおいが、嫌というほどにおってくる。

女の、ルビーのように真っ赤な瞳を睨みつける。ただし、それは宝石の赤ではなく、血の赤。

「あなたが探してるのは私じゃなくて彼でしょう？　だとしたらあなたは、最高のタイミングで現れたわ」

実にうれしそうに女は微笑む。確かに美しい。が、人の表情の柔らかさではなく、氷の彫像のような冷たい美しさに背筋がぞつとする。

「あの男は、やっぱり生きてるんだな？」

憎しみのこもるリバーの声は高ぶるあまりに震えている。

「それは自分で確かめて。私はただのコマでしかないわけだし」

馬鹿にしたような口調だが、リバーはその声に唇をかむ。圧倒的すぎる存在感に、次の一手が見つからなかった。

「ふふ、今ここで事を起こさないところを見ると、やっぱりさすがって言わなきゃいけないわね。伊達に長生きしてるわけじゃないってことかしらね」

「何をたくらんでるのか喋って、ラシルも置いてってもらうぞ」

空になった藁莖をばらまき、新しい六発をシンダーに詰める。

その間も女は余裕の表情でその動きを見つめている。

「どっちもできない注文ねえ。ただ強いて言うなら、前者にちよつとだけお答えしようかしら」

女が覗き込むのは、空になった左の眼窩。

「この街の世界樹はこの星でもかなり古い株なわけ。知ってるかもしれないけど、世界樹の力は長く生きればその時間だけ強大に、そして純度が高く成長するの。それを使ってあの時と同じ実験をするつもり。あなたならこれでわかるでしょう？」

「ふざけるな！　あの実験でどれだけ犠牲が出たかわかっている

だろう！」

リバーの顔が怒りに歪む。かみしめた奥歯がぎりぎりとなり、握りしめた銃はがカタカタと震えている。

「ええ、資料で見たただけだけどね。街一つに世界樹が一つでしょ？その程度の被害ならむしろ実験の誤差として考えるべきね。ゾクゾクしちゃう。さすがはあの方の研究だわ」

リバーの右手が最速の動きを見せる。

「なんせ、あの方の肉体まで失われてしまったんですからね」

引き金にかかった指がけいれんと同じ動きで止まり、それを見た女がいやらしい笑みを見せる。

「やっぱり知らなかったんだ。そうよ、あの方はあなたの実験の成功の横で肉体を失ったの。あれだけの力の余波を受けて、あなたが無事ではいられなかったようにね」

リバーの脳内で映像がフラッシュバックする。

真っ白い光に包まれる街、世界樹、数え切れない人間。全身を引き裂かれるような痛みの中で体に流れ込む真っ赤な光の帯は自分ではない何かの意思が語りかけているような気がした。そして、光の中に溶けるようにして消えた、あの男の傲慢きわまる笑顔。すべてをあざ笑い、己の命すらもちりあくと考えるような狂人にふさわしい笑みだと思った。

失ったのは、左目と、

「俺は死ぬ自由を奪われた」

「そう。なのにあの人は精神だけの存在となって、世界を漂い始めた。最初はまだ駄目だと思ったわ、だって幽霊と同じですもの」

言って、ラシルの頬をなでる。

「でも、見つけたの。絶対の存在である世界樹さえあれば、そこを依代に彼をもう一度呼び出せる。彼がいないせいで研究は数十年足踏みせざるを得なかったけど、ようやくそこにたどり着いた」

「何のためにだ？」

ラシルの背筋を冷たい何かが駆けあがってゆく。

リバーの声に、それまでリバーが見せたことのない感情があふれるほどに込めら得ている。

憎悪。

言葉に込められた憎しみは、場の空気を一気に凍らせる。

「それはあとでのお楽しみ。私もこんなところで油を売ってるわけにはいかないの。興味があるならまたあとでね。あたし、ブラン・ヒルデ」

ラシルを盾にするように、首根っこを捕まえたままリバーに向けてラシルの体を突き出したかとおもうと、予備動作なしの拳を地面にたたきつける。

「しまっ」

引き金を引くのが一瞬遅れた。

その場にあった何もかもがすさまじい振動に包まれ、足元が崩れてゆく。

「うわあああ！」

空が驚くような勢いで遠ざかってゆく。自分の足元が陥没しているのだとわかった時には、隕石の墜落現場もかくやというような巨大なクレーターがすべてを飲み込んでいた。

ブランと名乗った女の姿は、当然のように、ない。

「ざまあねえな」

クレーターから這い上がったリバーを待っていたのは、よりにもよっての顔が二つ。

「今はお前らと遊んでる暇はない」

「かっこ悪。あたしらだってこんな、女寝とられるようなへたれの根性無し相手にする気はないわよ」

コンパクトな体で目いっぱいふんぞり返るセフィと、表情を殺して見下ろすロト。

「で、どうせこの街でまた五十年前みたいなことしようとしてるやつらがいるんでしょ？」

自分ではどんな顔をしているのかはわからなかったが、さぞ間拔けな顔をしていただろう。

「なんで知ってる？」

「何よその顔？ あたしらが何にも知らないとも思ってるの？ だとしたら馬鹿にされたもんね。あんたらの実験のせいでこんな体にされて、何も知らないままでいられるほどのうのうと生きてたつもりはないわ」

息継ぎの間もないほどに一気にまくしたてる。

あとを、ロトが続ける。

「あんたたちがやった世界樹の実験、あれを許すつもりはない。だが一番悪いかじゃない、かかわったやつらは全員僕らの敵だ」

ロトの一言に、リバーは言葉を持たない。

「あの時、軍として来ていたあなたは、どれだけ被害者面をしようとあたしらにはただの敵よ」

ぐっとリバーが言葉に詰まる。自分がかかわっていなかったわけではない。それは言い訳のできない事実だ。五十年前のあの日、確かにリバーはあの街にいた。そして、あの実験を目の当たりにした。知らなかったですまないことは、わかっていたはずだ。

「でも、今回はどうもそうじゃないらしいし、あの子も無関係なんでしょ？ まさか、行かないとか言わないよね？」

答えがわかりきっている質問をするとき、人はどうしても挑発的になる。セフィの表情はいい例だ。

「お前らには関係ないだろ？」

先ほどの衝撃から回復した体を引きずるようにしてリバーは立ち上がる。さすがにまだ頭の中が震度三か四と言った感じだが、それほど肉体的なダメージを負っていないことだけを確認するとキョロキョロと周囲を見回す。が、わざわざ探す必要のないそれはどうぜんのごとく町の中心にそびえ立っている

天に向かって開かれた傘のようなシルエットのところどころに、赤い実が発光している。

「どこに行けばいいのか、わかって言ってるわけ？」

実に挑発的なその一言が、セフィの性格をよくあらわしている。まるで、次のこちらのセリフを誘導するかのような一言は、会話術の賜物だろう。

「ああ。どうにも、色々とやらなきゃいかんみたいだしな」

ズボンについた埃を払い、外套を羽織りなおしたリバーが睨みつけるようにして世界樹を見る。

「つたく、面倒な荷物を預かったもんだ」

吐き捨てるような言葉にセフィとロトは互いに顔を見合わせ、してやったりの笑顔を見せあった。そこら中の瓦礫を蹴散らしながら歩く背中には今にも走り出したいような焦りがはつきりと見てとれたのが、少しだけ微笑ましかった。

「素直じゃないんだから」

「姉さんもだけどね」

ばかりと、セフィの拳骨がロトの後頭部をとらえていい音を上げる。

「痛ったいなあ……でも、ほんとにあいつを行かせてよかったの？」

もう帰ってこないかもしれないし、もし誰かが実験しようとしてるならそれを止めるか、街の人を逃がさなきゃいけないんじゃない？」

リバーの背中が消えた通りを眺めながら、ロトがぼんやりとそんなことを言う。

「なんて言って逃がす？ 世界樹を使った実験でこの街が消え去り

ます、って？ それとも、みんな逃げないとあたしらみたいに時間の流れから切り取られた存在になります、って？」

「あ、いや」

ロトの返事を一瞬だけ待ってセフィは続ける。

「信用されないどころか、完璧にあたしらが逮捕。よくて留置場罰金計、最悪はあたしらは実験動物のモルモット、結局はあたしらも表の道は歩けない存在よ。だったら」

ロトの見つめる同じ場所を見つめていた視線を世界樹に向ける。

自分たちから何もかもを奪った憎い存在でありながら、生きる上で不可欠であり、この星の命そのものと言っても過言ではないその神の木は、やはり少しだけセフィの心に重い。

「だから、今回ばかりは、あのバカが何とかしてくれるって思わなきゃやってらんないのが癪だけどね」

足元の瓦礫を、底のほうはまだ煙ってるクレーターに向かって思いきり蹴飛ばす。

「さすがにこんな化け物相手じゃ、あたしらじゃ荷が勝ちすぎるしね」

からからと音を立てて転がる石ころに改めてこの穴ぼこの深さと、これを作り出した力のすさまじさに息をのむ。どうやって作ったかなどは二の次、そもそもこんなことができてしまう力と言うのが存在するということが脅威でしかない。

「で、姉さんは何にもしないわけ？」

「は？」

クレーターの底が見えるようになり、蹴りこんだ石ころが転がっているのが何とか見えるようになったところに、唐突にロトが立ち上がる。

「だからさ、何があるかはわかんないけど、またあのときみたいなことが起ころうとしてるんでしょ？」

五十年前、自分たちの故郷で起こったことを知った時には、ショックのあまり三日ほど食事ができなかった。セフィのヒステリーは思い出すだに恐怖しかおぼえず、あの時は二人して精神を壊してしまふのだとロトは半ば以上本気で思っていた。

世界樹の力を絞りだし、人に永遠の命を与える。

狂気の沙汰としか思えない実験は、結局は自分たちの故郷を滅びし、世界樹を奪い、数え切れない犠牲者とともに失敗したのだと言う。こと切れる寸前の研究者崩れにそんな話を聞くことができたのは不幸中の幸いだったが、その中でもセフィの精神を追い詰めたのは間違いなくリバーという男の存在だった。

自分たちが追っている男も、結局は被害者でしかない、そのことに至った時に泣いたのはロトではなく、やはりセフィだった。その姉が、あの男に接触している。だとすると、

「たぶんね。あんだだけ誰もが世界樹世界樹って騒いでてあいつがいれば、そうじゃないかってあたりをつけた。で、あいつを煽ったら見事に大正解って感じ」

やっぱり、とロトは肩をすくめる。少なくとも自分が旅をしている中でそれと確証を得られるようなものはなかったはずなのに、あそこまでこの街で何かがあると言いきれるのかとおもっていた。

「姉さんらしいや」

「ってわけでロト」

立ち上がり、強気な話息とともに目の前の背中を思い切りひっぱたく。

体力差からいってさほど痛くはなかったのだが、ロトは大げさに痛がるふりをしておく。それが不文律、お約束と言うやつだ。

「行くわよ。あたしらだって、五十年間無関係ってわけじゃないんだからね」

「ここであつたが百年目、だね」

得意そうにほほ笑むロト。なくなりそうなほどに目を細めて笑うが、セフィは眉間にしわを寄せていぶかしげに睨みつける。

「何言ってるの、五十年だって言ったじゃん」

「あ、そ、そうだね、うん。ここであつたが五十年目、だ」

「きっちり、見届けてやるんだから」

体の小ささを感じさせない力強い足取りで、セフィが一步を踏み出す。

「そうだね。でも姉さん」

いつも通り姉の後ろを歩くロトが、ふと疑問を口にする。

「どこに行けばいいの？」

一瞬だけセフィの足取りが止まる。

かと思えば何事もなかったかのように、むしろ先ほどよりも勢い

づいた足取りで通りを歩き始める。

「何とか、なるか」

ロトの言葉が二人で歩いてきた長い年月を感じさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9839x/>

リバー・デリバー

2011年11月18日03時23分発行